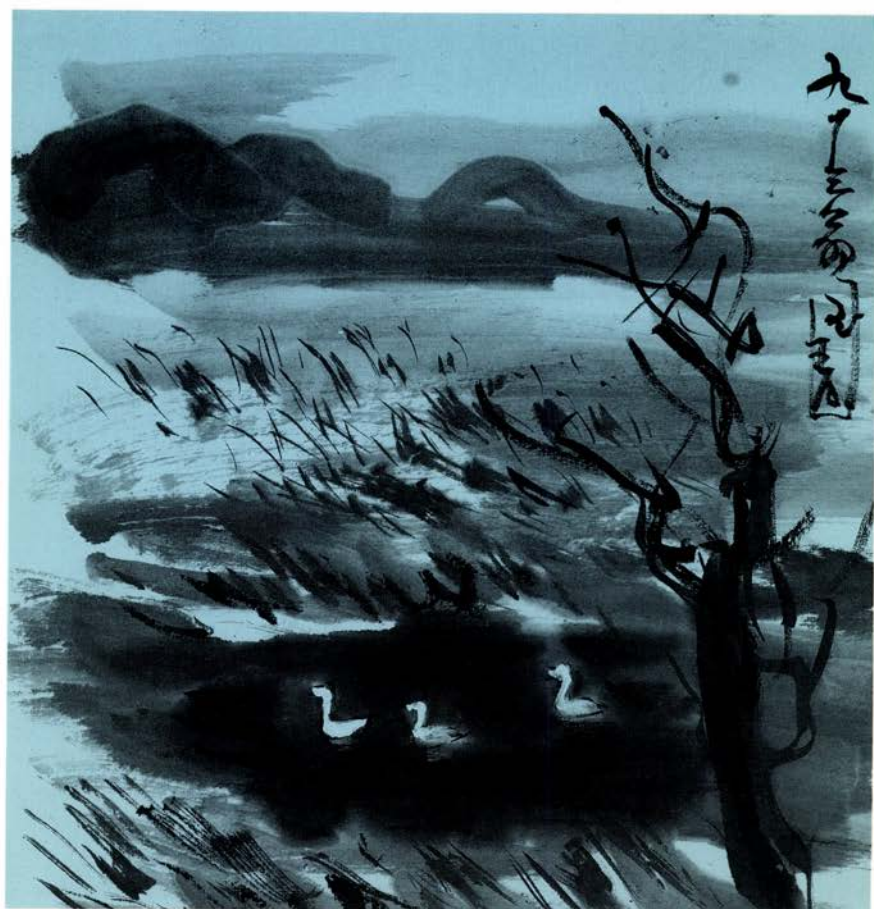


川柳塔

創刊大正十三年 二月一日發行（毎月一日發行）
通卷八二五号



日川協加盟

No. 825

二月号



古稀 萱風

頒価三千円
(送料三四〇円)

序 視野無限 この言葉に尽く

麻生路郎

恋人の膝は檸檬のまるさかな
労働歌蟻が歌えば凄かろう
睡蓮は万丈光の源よ
亡母の闇この世は雨が降っています
走馬灯花も犬ほど走るなり
老いてしずけし淫の字も姦の字も
蹈躡踏む阿形咩形人間座
富士山の藍に一礼してしまふ

発行所 沖積舎

101東京都千代田区神田神保町一―五二
電話 〇三・三二九一・五八九一
振替 東京 三―一七七六三二番
(川柳塔社でも取次ぎます)

寒中お見舞申し上げます

昨秋発刊いたしました『川柳万画』の普及にご協力いただき、ありがとうございます。なお、残部が少々ございますので、送料とも一五〇〇円で頒布いたします。

岡村康裕
黒川紫香

第9回 但馬川柳大会

と き 3月17日 午前10時開会
と ころ ホテル大丸 (JR豊岡駅前)
兼 題 「穴」 遠山 可住 選
(各2句) 「円」 小林 妻子 選
「噂」 来住 タカ子 選
「音」 和田 恭子 選
「九」 奥山 晴生 選
「命」 森田 勢津子 選
「鍵」 (事前投句・
2月20日締切)

◎欠席投句は1000円を同封し、
下記の但馬川柳協会へ

会 費 2000円

主 催 但馬川柳協会
豊岡市小田井町14-22

お伊勢さん

橘 高 薫 風

私が七十歳となる年、終戦から五十年過ぎ去った年、川柳生活四十年を経た年、しかも千支は子である。

「よし、行くぞ」の一声で、体調がどうのこうのと言っていた妻も支度をはじめ、大晦日の日のとつぷりと暮れた頃に家を出た。お伊勢さんへの初詣である。伊勢に着いて更に驚いたのは「祝二〇〇〇年」の表示であった。個人も国も、神様さえ歴史を積み重ねて行くのだ。

平成八年になったばかりの午前二時、宇治橋を渡る。星の美しさに気づいた。豊中とは比べられぬほど大きく澄んでいて数も多い。この中には二千年の星もあるに違いないと眺め入るのだった。

暗く広い神域には随所に大きな薪が組まれ、焚火の焰も威勢がよい。町の奉仕の人たちの黒い烏帽子と白い仕丁の衣が古代を偲ばせる。参道は若い人が多く、後から後から追い越して行く。私ら夫婦は、ただはぐれぬように腕を組んでしずかに歩を運んだ。そして西行法師の和歌を口ずさんでいた。

なにことも変りのみゆく世の中に
おなじ影にもすめる月かな
拝殿は混んでいた。拝殿まで登る石段さえ身動き出来ぬほどだが、とにかく辿り着いてようように二礼二拍手一礼の礼拝をすませた。神殿に近い庭には、若い神官が二人向き合って座り、清浄な神の灯を守っていた。

私は平和と健康を祈り破魔矢を頂いた。そして出口へと向ったのであるが、その道すがら思わず息をのんだのは、突然暗い闇の中で神鶏が時をつくる意気揚々の

声が聞えたからだ。しかもそれは大樹の高い枝からの二声であった。見上げると白い鶏が二羽仲よく並んでいた。

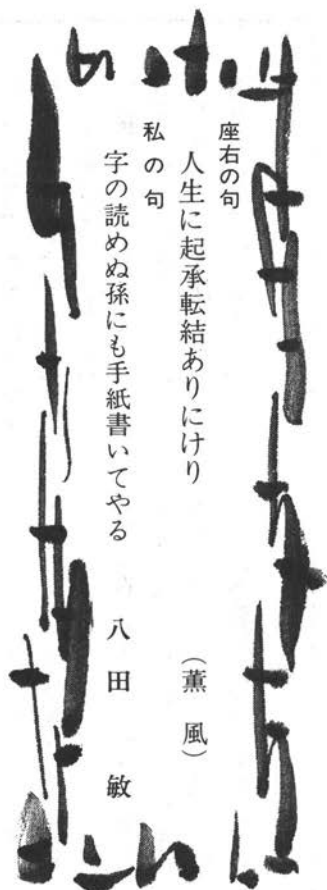
私たちは鳥羽へ出て英虞の海から出る初日を拝むことにした。遊覧船に乗って七時三分の日の出を待つ。

やがて水平線に太陽の円い頭が見えた。海は快晴ではなかったので眩しいほどには光らず、線香花火の最後の火の滴のような美しい紅色で上り切った。船中はどよめき万歳の声まで上がった。

私はここでも今年の平穏を海の魂のよくな初日に祈ったが、川柳は森羅万象との出会いであることをつくづく感じたのである。

◇作品

夜の水に夜の火映り初詣
師の叱咤神鶏の時樹上から
初日の出海の玉ゆえ滴るか



座右の句

人生に起承転結ありにけり

私の句

字の読めぬ孫にも手紙書いてやる

(薫風)

八田 敏

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 お伊勢さん

二度づけお断り

川柳塔 (同人吟)

自選集

大空のころ (61)

川柳の群像 草刈蒼之助

古川柳 柳籠裏二篇研究 (二十八丁)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

渺湖抄

橘高薫風 … (1)

高杉鬼遊 … (2)

橘高薫風選 … (4)

橘高薫風 … (42)

橘高薫風 … (45)

東野大八 … (46)

西田柳宏子選 … (52)

西田柳宏子 … (50)

河井庸佑 … (75)

小出智子選 … (76)

二度づけお断り

高杉 鬼遊



ある一日、川柳サークルの終了後、ご婦人方を大阪新世界の「ジャンジャン横丁」へ案内した。聴いてはいたが、まだ行ったことが

ないとのこと。二、三名ぐらいと思っていたのに、十名も参加されたのには愕いた。

阿倍野のベルタから山王町を抜け、「ジャンジャン横丁」へ来た。入口の交番所は昔のまま。昼すぎのことだったので、食事を兼ねて串カツ専門店「八重勝」へ入った。部分的に空席はあるが、十一名も並んでの椅子がない。店員は慣れたもので、先客を移動してし字型に一団の席をとってくれた。

まず定番のビフカツを注文する。串カツが揚がるまでのひとときを利用して壁に貼ってある「二度づけお断り」のビラを皆さんに説明する。それはテーブルに置いてある、ウスターソース入れに、一度つけて口にしたら再度つけないルールである。この店に限ったことでない。共用物に対しての心くばりがある。目の前にドカツと盛られた串カツに

茴香の花

「景色」

八木千代選

(80)

一路集「飾る」

武田帆雀選

(82)

「みかん」

瀬戸まさよ選

(82)

初歩教室「許す」

菱田満秋選

(83)

■句集紹介「古稀薫風」に寄す

吉岡美房

(84)

各地柳壇（佳句地十選／木本朱夏）

東野大八

(79)

一月本社句会

(98)

路郎賞・川柳塔賞中間発表

(102)

片上英一さんを偲んで

宮崎シマ子

(105)

柳界展望

(106)

二月各地句会案内

(107)

■編集後記

(108)

座右の句

峰歩く男はピアノ弾きながら

(岳人)

私の句

嘘を信じて大根の首洗う

池森子

皆の瞳が輝いた。「セロリ」「じゃがいも」

次々に注文する。「御飯はないの?」と、食欲旺盛なのに辟易する。この店逸品のどてや

きて最後を締めくくる。

折角のことなので新世界を一巡する。「通天閣」を見上げ、坂田三吉を思ったりする。

塔の下に三吉の碑がある。「東京タワーに昇ったが、通天閣へ昇ったことがない」と言う。

案外、土地の者はその土地を知らない。皆が昇りたい希望なのでグループと別れる。

通天閣の近くにも串カツ屋がある。この店は小誌の編集をやっておられた、不二田三夫さんが行きつけの店である。新年号の発行

が終り、師走のひととき新世界をぶらつき、食べ歩いた話を氏から聴いたことがある。酒

を飲まないで、ひとり串カツを食べている男の背が寂しい。

ジャンジャン横丁や新世界を知らない人には異界と思うが、この地に住み、この町を知る者にとっては第二のふるさとのな温かさを

感じる。ネクタイ背広姿の私が居酒屋で二級酒を飲んでゐる横で、仕事帰りの地下足袋姿

の人々が特級酒を飲んでゐる。飾ることのない正味の生活に、自由な豊かさが漂う。

この町に来ると私はホッとする。正に「新世界」である。川柳世界もこうあってほしい。



橘 高 薫 風 選

唐津市 田 口 虹 汀

弘前市 佐 治 千加子

丙子へ米寿迎える鶏の声

丙子が背中に赤字背負つて来る

無欲でも男一つの的はある

勇み足 米寿の土俵それはない

甘いのに弱い私の舌と耳

菩提樹へ坐像 立像 涅槃像

堺 市 桑 原 道 夫

誕生日 東西南北あるばかり

憤懣のやる方なきに鉦とび

黒色の極み苺の種光る

抽斗に空き箱のあるあたたかさ

馬の尻並ぶあわれを見て居たり

旅半ば魚臭き口中を思いけり

東西南北ふるさとぐるり雪の山

母おわす山墓雪に着ぶくれて

平凡に老いて故郷に友ありき

無人駅 六方踏んで出る男

昼の月 嬉しい嘘が大好きだ

過去を持つお互いさまのにぎりめし

松原市 小 池 しげお

先頭に従いて行けないことだらけ

赤い錆どんな喧嘩も知っている

かたくなになつてしもうた昔の字

木守柿一つ何やら言い忘れ

低い鼻 工場一の働き手

できぬ子の高さに蓄ついている

唐津市 仁部四郎

つまずいた小石に歩幅糺される

弱虫が笑うどうやら策がある

西暦にまだ迷つてゐる忠魂碑

理論派と人情派あり屋台党

九分まではカネの力でことが済み

蓋世に葉書一枚五十円

和歌山市 宮口克子

大丈夫 肩に大きな手がのつた

熱燭とおでんフーフー泣いている

淋しさを猪口も徳利も知っている

乾鮑がぐつぐつ笑う鍋の中

通リゃんせ鬼も一緒に通らした

何着ても寒い心の旅続く

鳥取県 土橋 螢

ふるさとに帰るつもりはないらしい

家族っていいなあ孫へお年玉

負け残りの歳月だった五十年

ちびりちびりと正月も三日過ぎ

平成もはや八年か新日記

歌麿と絵を描いている夢だった

吹田市 栗谷 春子

墓参りまだ薄化粧わすれずに

小春日はうれし茶漬けの野沢菜も

富有柿をむいてことしを喜びぬ

松屋町 暮れもお盆も花火売る

木枯らしはむかしと同じ気にさせる

高速をはしる日の空十二月

吹田市 古川 喜美子

飛べそうな気がする真つ青な海峡

知事賞の菊は必死に生きている

菊満開 松は見据えて色変えぬ

枯菊を焼いて愛憎みな捨てて

一番茶 美味しい水で入れました

眼鏡拭く秋天汚してはならぬ

枚方市 海老池 洋

童謡の中でかまくら灯の点り

一揆の碑へ忘れもせず咲く野菊

惜しかったねにも皮肉派同情派

遠くからいま祈るしかないのです

欲望の爪の地球を掻き破り

隅でも咲くだけ咲いてみたい花

出雲市 板垣 草丘

人よりも小さきけものに知恵がある

ウミネコが出雲なまりで春を呼ぶ

何もかも美味くて頓死ふと思つ

西安はゆっくり砂漠迫る街（西安の旅 三句）

二千年前が昨日の兵馬俑

街を掃く人の動きで夜が白む

大阪市 榊 本 蔭 児

世紀末されど柘榴の実がはしけ

窓開けてふと約束を思い出す

木の葉今散るタイミング計ってる

満たされぬままで散ってる葉もあろう

ここからは土の道です登山口

年金の暮らしも捨てたもんでない

町田市 竹 内 紫 鏑

喜寿おめでとつと言ひ声変わりしてる孫

かるた押さえる孫の右脳

カーキ色いまでも忘れず身に着けず

特攻兵 美声を五十年つづけ

賞品の彫り駒 孫のきらう文字

前さばきよく席を取りマンガ読む

広島県 田 村 新 造

難民に化けコロ島で船に乗る（興安嶺逃亡記）

かえり船の歌もせつない帰り船

生きていることが不思議な博多着

帰還一号シベリアのこと調べられ

シベリアの履歴 入社の邪魔をする

往事茫々北満もまたシベリアも

富山市 舟 渡 杏 花

祥月の母のアルバム小半日

雪催い 遠くで茶碗割れる音

鼻の差で勝った人間臭い馬

花枯れる速さで愛も冷えはじめ

転がり切れぬ坂で父恋い母を恋い

大阪市 西 出 楓 楽

胸のあたりから暮れてゆく冬の日々

残月よ言いたいことは言いなはれ

父老いて打つのは錆びた釘ばかり

善人で飲んだらすぐに寝てしまふ

大根煮るときが一番妻らしい

豊中市 井 上 直 次

隅すみまで知りすぎていて恵まれず

足並みが揃いすぎてる恐ろしさ

菊人形 吉宗凜と美男なり

混んでいる医者へいそいそ母の行く

混んでいる電車の隅で文庫本

豊中市 安 藤 寿 美 子

渴いた手 冬の薄日をうけている

まとまりの良い温泉へ行く話

露天湯につかって時雨やりすごす

野鳥図鑑出した時には小鳥居ず

少しだけやさしい姥になれそうで

豊中市

田中正坊

松原市

玉置重人

子の帰郷 一週間はまたたく間

DOCTORも父と語れば普通の子

ありふれた惣菜に打つ舌つづみ

永住権とつたがニッポンよいと言う

鷹になるはずはなかったトンビの子

吹田市

山本希久子

魂も湯気も岩間を這い上がる (海潮温泉)

裸木よ万歳のまま冬を越す

みかん山盛り私の鬱もこのような

椿ボトリ女の情の強いこと

客を呼ぶ客を去らせる雪になる

高槻市

川島諷云児

妻と娘の歩幅に合わす定年後

遊び球投げる余裕のない暮らし

終章は花で埋めたい種を選ぶ

胸底の澱みを流す縄のれん

フィナーレの幕は自分で引くつもり

高槻市

井上照子

寝るだけのワインではない明日を待つ

花散つていと色気なし胡蝶らん

電池一本 時計律義に秒刻む

咲き残るコスモス風にまだ堪える

兄妹で今母の苦をしみじみと

核ボタン押してシャンソン口ずさむ

諍いのタネをよそから拾て来る

ご近所にウマの合わない犬がいる

生きたとはめがねをふたつ持っている

初春や初春大吟醸の封を切る

藤井寺市

吉岡美房

元日の音の中なる初詣

賽銭も御布施も要らぬ初日の出

三ヶ日うれしい夢はすぐ醒める

一年の早さを思う震災忌

とどめまで刺さぬが武士の情けだろ

東大阪市

森下愛論

一輪が花園になる夜の菊

負けん気が分かる力カトの高い音

串カツ屋斜に飲んでる梅田地下

残り火を時々燃やし謀反する

うるむ灯のうるまぬままの酒の酔い

東大阪市

安永暁子

うどん屋の味がふわふわ匂う駅

舞う雪に鹿も寒から二月堂

兄の訃に瀬戸内を飛ぶ海の子

海の青 手にとるように讃岐富士

特急が十分ごとに止まるなり

八尾市 故片 上 英 一

岡田英次また逢う日までききようなら
テレサ・テンあなたが先に逝くなんて
死亡欄 知らない人の名が並ぶ
ひまわりよなんと正直なる姿勢
このままで朽ちてたまるか二十五時

富田林市 池 森 子

葉をみんな落としてブライドを守る
影から出て来たのは真実のわたし
ルンルンと通う赤い実の下に
夢の中まで亡母は背中を丸くして
その一言で風花に舞った

尼崎市 春 城 武庫坊

戦後五十年 無縁仏の兵の墓
老いのつぶやきばかりあふれる街師走
フラスコで老いの泣き煮つめてる
男でも揺すれば流す涙あり
夢詰めて飛んだ風船見付からず

尼崎市 春 城 年 代

しゃべりすぎてどっとさみしき湧いてくる
裏屋根をのそりと通る猫の日課
聞いているふりだとわかる目のうつろ
きょうの命があすもあるよに銀杏散る
師走の街を夫婦老いてもふたりなり

西宮市 門 谷 たず子

風花のやさしさ母の忌が近い
花鋏にこころの機微を見すかさね
ガラス戸に映るは亡母かわたくしか
砂時計だんだん速くなるリズム
しまい風呂 今日のをとき放つ

西宮市 奥 田 みつ子

古書の市出るとポツカリ昼の月
雲走る昨日のわたし捨てに行く
言い訳はしないと決めて蓋をする
騙したつもり大きな尻尾見えるのに
一呼吸おくとスマッシュよく決まる

西宮市 牧 渕 富喜子

一日を見ていた冬の日が沈む
沈む日の輝く果てを明日と言う
十二月八日 古里あられ降る
道具市ふと亡父の顔思い出す
偶然の出会いに支えられて来た

西宮市 秋 元 て る

五十年待った南海散華の地(フィリピン慰靈巡拝に参加して)
この土に眠るか母国遙かなり
孫自慢 貴方の知らぬ子の子です
帰るバスを追いかけて来るお月様
敵味方 今は声なしマニラ湾

川西市 松本 ただし

八十の手垢の中の白と黒

八十になって得意な赤いシャツ

八十の余命数えて何になる

足跡のみにまゝに來た八十路

八十の手で消してゆく住所録

加古川市 吐田 公一

一年を迎えたコウベ寒々と

北風も容赦してほしテント村

年頭の氣迫も薄れ小正月

もう齡と教えられてる風邪十日

人妻を見ているだけの昼の月

弘前市 小寺 花峯

繰り返す喜劇で明日をまた信じ

海鳴りが近づき川が澄んでくる

春乗せてからの自転車春を行く

黒髪の女は風を放さない

笹舟に乗せる小石が重すぎて

弘前市 高瀬 霜石

ブレーキを踏めば一ミリ歳をとる

杯を一時伏せてみる勇氣

氣がつけば下り電車の列にいる

働きものの妻のいびきに目が覚める

子に跳べと跳べない親がなぜか言う

五所川原市 斉藤 島

恍惚の碑あり雪が積ります

お茶碗につがるおとめが香るなり

父さんがくれた私にだけの辞書

鶴住みつく村のお人柄

表彰状手に定年も近くなる

横浜市 菱田 満秋

子の式で孫の名前を考える

参考にバブルの頃の時価を言う

忘恩を喪中はがきになじられる

けちんぼのさす目薬も溢れ出る

手も貸してくれない影は従いてくる

京都府 稲葉 冬葉

全快へこころに刻みおくことが

森は文化で静脈を保つなり

水仙が香る野仏地藏様

いもたゝなんきん孤独を食べて生き

産室で力むのは妻だけでよい

和歌山市 堀端 三男

謝り方が悪いと文句つけられる

規制緩和 横文字の棚増えている

忘年会忘れられてもないらしい

会費だけ出しとく会が多くなる

驚天動地の平成七年さようなら

和歌山市 福本英子

春そこに去年の傷も癒えてゆく

約束の指が反省ばかりする

破る子も居ない障子を張り替える

国宝になって檀家が疎まれる

桃 柿に植え替え余命との賭に

和歌山市 田中輝子

十二月繕うことはなかったか

いつもと違うドレスで火の粉受けている

川下にすんでしっかり生きている

枝払って払って一人前になる

一本の樹が目指してる遙か沖

和歌山市 木本朱夏

病む人に旅の紅葉を贈らむと

りんご拭く罪の匂を確かめて

胸の釘ふたつはずして人恋し

思ひ出し笑いの好きな唇を拭く

警笛がまだ鳴っている耳の底

岡山県 二宗吟平

憎まれ口 年を問うたら指を見せ

わが書いた字が踊ってて読みとれず

功績章撫でると亡妻の顔が浮く

孫よりも若い講師へメモをとり

自転車で転んだ事は伏せておく

岡山県 山本玉恵

三度目の椅子に命をあずけよう

行方不明のままで私は居たかった

平凡な幸せで居る母の椅子

本番でポロリと仮面の行方不明

散りぎわの本音も彩もそれぞれに

竹原市 小島蘭幸

長女一女 我が行く末の波高し

ふるさとの山と無欲になっている

私しかあなたの良さはわからない

昼はひとり らっきよう梅干しいりこ味噌

春の色紙に古希青年と書いて欲し

鳥取市 両川洋々

秋は必ず僕を詩人にくれ

産んで育てて母の帳尻なぜ合わない

気を抜くと世界の核が目覚ます

鬼だっけ情けが欲しいから甘え

男ですオスです欲が捨て切れぬ

米子市 林荒介

雪は燦々驀進するD51

同じ道を辿る親と子の絆

枯れ木に吊る父たちの虚像

背伸び続くショーウィンドの反射

人ひとり消して乾杯のグラス

米子市 林 瑞枝

冬の海は男で白く絶叫す

手の届かぬところで朱鷺は舞っている

幕末と重ねて沈む陽が真つ赤

花魁の柄のドレスも着てみたい

火も水もくぐって屈託ない壺よ

米子市 政岡 日枝子

布団干す 終日何も考えず

難しいことは考えない初春

ブランコを止めて考え込んでいる

考えることを忘れた棚の本

地吹雪す 考え直せというように

米子市 木村 富美子

ごしごしとシルクで罪を拭いている

変りなし昨日と同じ顔を拭く

両手からこぼれる数を生きて今

雨の日はゆっくり瘤をなぐさめる

パーティーで借りた着物が目立ちすぎ

鳥取県 新家 完司

冷蔵庫開けて思案をするなかれ

家中の蠅を叩いてお留守番

ピヨピヨ鳴くいのちがひとつ五十円

にんげんの貌をしている裸の木

裸木は詩人か星と語り合う

鳥取県 鈴木 公弘

冬眠のできぬ賞与をありがと

幸せは比べたくないクリスマス

時を追う人は哀しい生きもののよ

支払いを済ませた後の玉子酒

帳尻はどうあれ除夜の鐘がなる

鳥取県 西原 艶子

魂をこわしてまでも酒を酌み

尖り過ぎ無邪気な犬に教えられ

円ふたつ重ねたように性が似る

故障したらしい体の音がする

犬のこと忘れて朝寝してしま

鳥取県 土橋 はるお

年金がやがて貰えるので死ぬ

婆さんが呆けた袋を提げている

父の木にいつも追い越しかけている

有料の自動ドアがありますか

残業の灯が一つずつ消える

出雲市 園山 多賀子

ひら仮名のやさしさに遇う亡母憶う

偽らぬ生活と憶う和顔愛語

スカーフと遊ぶ女はきらめいて

掌に残る温み孤独と対峙する

夕茜 終着駅の曼陀羅華

島根県

小砂白汀

香川県

川崎 ひかり

新庭へ威儀を正して散るもみじ

ラヴコールすれど雷鳥しやがれ声

日々太る大根大地をおしわけて

楢山も混んでおりますお釈迦さま

ばばあ抜き希つて子育てノイローゼ

島根県

松本文子

枯芒が似合う五度目の年女

淋しくて袋たくさん持ち歩く

他人の瘤もじつくりと見ておこう

いっそ枯れて昨日の思い断つことに

寒気団ガンバレなどと言わないで

香川県

木村 あきら

裸婦像に鳩が止まっている平和

ライバルの逃げ道塞いではならぬ

松葉湯で少し長生きしてやろう

網棚の過去が時々落ちてくる

松消えて地球いよいよ世紀末

香川県

工藤 吟笑

お茶習い我が娘にお辞儀してよばれ

老夫婦年金暮しの寒い初春

落ち込んで助け舟にも逃げられる

極楽へ行く近道は何処かいな

バアちゃんのへソクリ借りて生きのびる

逃げるふりするのも恋のかけひきか

お世辞など通さぬ父ののどぼとけ

胸のうち空いた徳利が知っている

ふところが温いと外へ足が向く

いい案が出ないが先ずは飯とする

松山市

宮尾 みのり

平行線の先は枯野があるばかり

吊り橋のほど夫婦試される

バブル崩壊その後逆玉弾まない

単純なドラマだったら出る涙

葬式で涙が出ないのも困り

今治市

越智 一水

十二月八日見つめ直して 空仰ぐ

老春へ陽を吸い込んで掌を合わせ

大地の恵み大根捨てるところがない

芽ぶかんとするその枝のひしめきよ

うち そとの孫が風糸からませる

今治市

野村 京子

やわらかき未来とあかご遊ぶなり

一合で力のいらぬ米を研ぐ

無風地帯 男に力瘤がない

大根をざっくり切って女足る

温かい言葉へすねてみたくなる

砂川市 大橋 政良

十和田市 小笠原 敏人

壺一つ笑い話がこぼれ出す

どの顔もお人好しだな羅漢さま

虹のある一つ一つのシャボン玉

甘えてるようにネオンが灯り出す

ずぶ濡れの捨猫愛想鳴きをする

弘前市 中山 雅城

一本のこよりを信じ切っている

基会所に顔を出してる里帰り

いやあになるほどえらい年でした

シクラメン清く正しく散ってゆく

さあ次は日本人の改造だ

弘前市 相馬 銀波

味方にも軽いジョークのジャブが来る

根回しの汗 年末は乾かない

裏切った背中黙視に耐えている

こめ減反 家計費の枠ままならず

真冬日の靴テクテクと始発駅

弘前市 蒔苗 果林

降る雪がつむじまがりの背を伸ばす

掌の中の雪は命の雫のよう

出稼ぎに津軽の血潮売りまくり

生甲斐も冬夕焼のような老い

長電話 大吹雪から回嵩む

抵抗を感じるもののコンピュター

秋野菜 雪の下から問いかける

朝茜 今日の運勢映してる

一〇二歳 文明開化が続いてる

水を飲む蛇口が軋む一人居て

静岡県 蘭田 漠 吝

母の逝く頃は母の日無かったな

書棚から句集幾つか夜の長し

草笛を吹けど周囲はビル谷間

大ニユースのそれぞれの顔考える

寒月が天心に来て邑鎮む

羽咋市 三宅 ろ亭

インタビュー雅号のいわれ聞いたす

一仏を信じて他仏信ぜぬか

日記には意気揚々の字が失せる

わが愛す川土堤にも春けはい

路のとうわが老残をなぐさめよ

大阪市 津守 柳 伸

晩秋のそぞろ歩きは寡黙なる

霍乱の風邪 食欲は倍加する

哲学の道 文化とは未来とは

留守番をさせるインコのひとつがい

資源ゴミその気になれば揃う家具

大阪市 本間 満津子

頭痛する世相めがねの度が合わぬ

すこし汚れて気楽に被っている帽子

世の中は我慢の人も居て回り

無視されたら無視して守るマイペース

鬼も福も仲良くうちでくらしてる

大阪市 板東 倫子

ロッカーで携帯電話鳴っている

十大ニュース暗い話が多すぎる

背の赤い毒持つクモは未亡人

白昼夢だれが吹くのかもがりぶえ

見物に行つて迷つたディアモール

大阪市 大塚 節子

小豆粥ふっくり炊けた古希の春

殻と身が残る小さい蜆汁

小指骨折 我が身のもろさ思い知る

ギブスとれて心細げな右の足

黒雲が徐々に夕日を蔽いたり

大阪市 玉置 英子

友達友達からの見舞状

同じこと言うても何とおだやかな

お幸せ言われてみればほどほどに

たのしみに少し苦勞がついている

摩訶般若あなた十年経ちました

堺市 黒田 真砂

頼られてまた頼り切り老いの坂

積木くずれて恋の破局を予感する

さあ三時 心のお茶をいれ替えよう

満員車で眠気を誘うシャネル5

秋天に心洗われ 萩 桔梗

大阪市 大河 未佐子

付き添つて桜の道は菊となり

宗春の人形 黄菊使いいきり

棒鱈を上手に煮ればお役すみ

捜し物 前に捜したものが出る

ひと言の思いも言えず年は暮れ

大阪市 小糸 昭子

肌に添う亡母の指かも掛布団

納豆の糸引きそうな仲でいる

ワープロはコーヒータム取りたがり

モカの香がシャツに沁み込む朝の幸

名を挙げて低い頭のいぶし銀

堺市 吉本 菁風

欠点を探す目になる男親

停年や妻がF A宣言し

子育てが終り主人が物たらず

失恋や演歌が少し解りかけ

年寄を乗せて長閑な昼のバス

高石市 浅野 房子

吹田市 瀬戸 まさよ

天井で今年の抱負聞くねずみ
見栄だけでつながっている家族

早々と歳暮促すコマーシャル

男手とお金も欲しい十二月

後悔は先に立たない花手桶

豊中市 滝北 博史

庭を掃き散る紅葉待つ茶の心

雪柳も紅葉すると知った朝

窓ガラスぼくが拭いたら年の暮れ

空缶を蹴って転んだ十二月

鬼たちを笑わせながら来年に

箕面市 岩津 ようじ

コンピューター阿吽の呼吸飲み込めず

足音で私がかかるポチだけが

カラオケのない二次会にしてみらう

胃袋も忘年会と気づく酒

油断して美女うたた寝をする車中

箕面市 椎江 清芳

初雪の知らせスキーが騒ぎ出す

湧き水を地蔵が守る過疎の村

中流の列へ背伸びのカード族

村捨てた過去の記憶の秋祭り

耕せば土に恵みの陽の匂い

いいですね希望は作るものと言う
もやもやの世界に生きてなお希望
人生を自画自賛して消えて行く

泣きましたテレビ大地の孤児の旅

冬いちご冷たい顔でクリスマス

茨木市 井上 森生

激動を生きた証の過去無用

宮仕え終りになって掴むこつ

丹田の力が足らぬ年の功

行く歳のかげりも夢も酒と旅

松明の火の粉待ってる冬の空

茨木市 堀 良江

顔を見せにおいでと母の大きな字

添え書きに本音が少し匂うてる

潜ったつもり太い尻尾をつかまれる

ローカル線 向かいの少女と分けるチヨコ

出発の知らせはしない一人旅

守口市 結城 君子

暖房の部屋で樹氷を観ていても

「大地の子」の放映時間はあけてある

洗い物まだ干しきらず冬の雲

よき友が周りにいる町動かれぬ

主婦の用事に雑用はない水の音

守口市 森川 まさお

もてなしの栗飯の栗 盛り上がる
ふかし蒔 悲喜こもごもの五十年
老いの耳わが町の音聞きわけ
白い月 冬は気持がしんとする
底冷えの仕事場 忘れものはない

寝屋川市 江口 度

ハンバーガー好きな娘の細い顎
大根は値ぎりコーヒー値切らない
行き先が決まる妻のひと言で
あくびする前にコーヒーでる我が家
からすにもきつと居るだろナルシスト

寝屋川市 柴田 英壬子

冬の字に風が一阵 墨の舞 (町春草芸術の世界)
憂きことはさらばとはるの豆を煎る
陽は昇るどんな噂も気にしない
万歳の腕すつきりと伸びる古希
天命のままに回向の日々を積む

寝屋川市 平松 かすみ

新婚のはち切れそうなねずみの絵
大作を頭へ描く古都の春
好きだからいつも見ている飛行雲
千円を過ぎてタクシー落着けず
無口なら美人にみえる僕の妻

寝屋川市 堀江 光子

書架に今も玉と砕けた人の手記
財よりも事業残した志
逢う度に仕事変っている男
本ものの玉の静かな光りよう
分らない残り時間をうかうかと

東大阪市 指宿 千枝子

初空に真実一路飛行雲
奇数ばかり並ぶ私の生まれた日
コーヒー代借りてることを思い出し
雪道の夜は怖いよバスの旅
旅仲間コロコロコロとよく笑い

藤井寺市 中島 志洋

鬼は外 心の鬼も飛んで行け
千鳥足帰った顔へ鬼は外
仕事の鬼マイクで歌う別な顔
二代目をじつと見守る鬼瓦
芸の鬼 舞台に立てば腰が伸び

羽曳野市 吉川 寿美

虫のいい願いを神に叱られそう
途中下車むかしむかしに逢えそうで
生きてゆく証に靴を光らせる
それからの冬の出方待つ螢
子に見せる背中時には鬼になる

藤井寺市 田中透太

欲ばかり絡んで折れた金の斧
熟れ過ぎて木の実が一つ渦の中

お喋りな女と秋の風の中

逢えばまた淋しさだけを置いていき

どうしても橋を渡ってくれぬ人

八尾市 宮西弥生

明日見えない地平線だからきれい

まだ過去にしたくはない仏の日

思ひ出が背負いきれずに旅に出る

お陰様の言葉がほしくなる師走

おんなひとり弾むところは持つてよう

八尾市 高杉千歩

歳豆を数える一袋では足りず

煙草の輪 鬼は内なり日向ぼこ

大空を讀えた軍歌耳朵にあり

大人にはなりたくないの愛し子ら

ロボットに命令されている未来

八尾市 宮崎シマ子

ふるさとはやんわり温い薪風呂

千手観音へ一つを願う初詣

極楽へ夫婦の予約席をとる

子をみんな味方に母は太ってる

潔く負け自覚して引き下がる

八尾市 高橋夕花

オリオンの空に祈って亡母に遇う

華やかな声する方にシクラメン

さざんかもバラもわが家の女の子

絵ガラスの内なる母は苦労性

ふる里の記憶たどると時計台

岸和田市 芳地狸村

池の美を隠す蘇鉄が憎らしい(桂離宮 二句)

ようお越しと衝立松に迎えられ

丁髷が似合うお寺のたたずまい(大覚寺)

人力が昔の顔でいる嵯峨野

素うどんの素直な味が好きやねん

岸和田市 島崎富志子

ワープロの助けを乞うた年賀状

好きだった趣味もボツボツ欠いて老ゆ

バスデーケーキ孫が作った温い味

いい婿が吞んべの夫と対に吞み

びっしりの予定に主婦の顔がない

岸和田市 古野ひで

紅葉踏むこの哀しさを知る山路

逝きし母 思い出させる冬の雲

入口も出口も広い方が好き

くつろいで明日へ命溜めている

小走りで従いて来る妻いとおしみ

岸和田市 高須賀 金太

やれやれ平成七年が終わった
案内が上手 食いだおれの人形
大阪はやっぱ関西煮きでっせ
薄口やさかいうどんが美味いねん
暖かくなったら発芽しなければ

岸和田市 三輪 通彦

ギャンブルを蛇蝎の如く嫌う妻
ライバルが大きく見えて負けている
主義主張拘りすぎて浮き上がる
息災を祝して弾むOB会
おいそれと買えない孫のおもちやの値

岸和田市 長谷川 呂万

APECたこやきだけが目立ちすぎ
古希迎え自分の殻が脱げてくる
衛兵の交替もショー忠烈祠(台湾観光)
日月潭おかゆがうまい旅の朝
中正堂二十世紀のピラミッド

富田林市 片岡 智恵子

百態の風から貰う思慕の中
生きている一途に背負うわたしの荷
妻の愚痴ひとりで苦労したように
借景の織りなす足立美術館
美術館の庭園もまた名画なり

富田林市 松本 今日子
チヨボチヨボの友情だから永つづき
群羊にオーストラリアの茜さす(オーストラリアにて 三句)

ユーカリ広々として眼の底に
片言の英語の中で笑い合う
十二月非常袋も四季を見た

和泉市 岡井 やすお

冬ひらく駅伝レース花ざかり
二枚減り三枚ふえた年賀状
ひたすらに前へ前へと行くといふ
厳しいが楽しい傘寿からの道
よいことがどんどんふえろねずみどし

河内長野市 井上 喜醉

少しずつ歩いた道に妻がいた
食べるより老いの道楽湯につかる
せつしょうなドック出た日に矢を背負い
二次会へ指名されずに無視される
裏表ない富士山の素顔知る

大阪府 八十田 洞庵

まだ耳に残るカチューシャ亡母の歌
涅槃図のうしろの闇に亡母も座す
洒落一つ言わず居職の手が光る
退院へはく靴下のこざっぱり
食堂へ脱ぐヘルメット汗を拭き

神戸市 木村 貴代子

追い風を待てばうすれる闘争心
品種改良リングの気持さておいて
おそろしい兄弟げんか入試前
すんなりと納得されて落ち着けぬ
海辺にて幼き夏の我に会う

西宮市 西口 いわゑ

助かった命だんだん欲がつき
強かに生きよう星が光ってる
有頂天ぼろり本音をさらけ出す
冬の天 有無を言わさぬものを持つ
ステレオの前でひとりの音楽祭

芦屋市 黒田 能子

爪まるく切って赤ちゃん抱いている
ウインドー町のコントを映し出す
オルゴール壊れた部屋で捻子を巻く
一年中の菊も秋はことさらに
鈍行の旅に加速度少しつく

伊丹市 山崎 君子

ダイエット今朝のリングはみどり色
冬の雨小さなオモチャ残されて
渡り鳥 遠くの空が暗くなる
切符もつ手がかたくなる待ち呆け
屋久杉の生きる音きくみぞれ降る（屋久島で）

宝塚市 丸山 よし津

母よりも長く染まった姑の彩
二時間後 見事に焼けた骨拾う
逆風の中ではほほ笑み忘れない
バナナでも食うかと二本平らげる
あの星は留学の子と決めている

宝塚市 吉田 笑女

前かがみに歩く師走の風の街
寒風に押されて進む八十路坂
前向きに歩こう過去へふれないで
食欲が進み気になる血糖値
聞き流すことにもなれて髪をすく

宝塚市 中田 純次

父母恋し庭に鈴なり柿映えて
よろこびもまた悲しみも菊の花
銀行が怪しく見える十二月
ブラウン管の窓は浮世の泣き笑い
小賢しくしぶとく臭くバツジつけ

京都市 松川 芳子

よいいどん朝のカーテンさつとあけ
視界から弘法さんの塔が消え
車椅子きびしい母でいて欲しい
家庭とは別に男の顔がある
カタログへ弾む女の胸算用

京都市 都倉求芽

街路樹に今年を清算させる風
拍手だけうけて正論消えてゆく
遠慮しても開き直っても下座
再生紙ほどの余生つて無理ですか
平成七年の7は終始アン・ラッキー

京都市 山海友熙

春一番誠心しかと胸に抱き
寸時もつ玩具もあわれ孫の顔
冥利得て二ヶ月無事に福寿草
どの部屋も遺墨の軸に梅を添う
早春の旅恋うこころ地図広げ

奈良市 宮口笛生

畳替えした新春の畳の香
たこ焼きが好きあつを持ち帰る
神木の太さが歴史語る村
水臭い酒やと足をとられてる
なんだって愉快な仲間ムツゴロ

生駒市 北山悟郎

土壇場でパワーふり絞る歳の暮れ
小商人必死 声からす歳の暮れ
家のポチ素知らぬ顔の十二月
罪捨てに迷いに迷う白い雪
苦労を神様じいと見て給う

大和郡山市 坊農柳弘

一日分 損得どうあれ閏年
銘柄の数だけ酔える缶ビール
厄除けのぜんざい下戸が嬉しそう
何度目の見合いか娘年女
抜擢されてウサギは月へ行つたそな

大和高田市 岸本豊平次

十二月八日の喝采が侵略に
飼い犬も命預けた人と知り
小児科で悪いところはババの所為
草枯れて孫の無くしたボール出る
窓ごしに二上山の四季と住み

奈良県 長谷川春蘭

家事というきりなき業の十二月
忘れぬことの多きも年忘れ
どの重箱もまばらに残りおせちかな
老い愉し枯木清しと見えしより
冬暖かく老いての幸を聞くは良し

和歌山市 垂井千寿子

鉄砲伝来 護身の道具と見る平和(種ヶ島旅行 三句)
ロケットも観光ルートで一儲け
屋久島の箸置き踊る皿洗機
米をとぐ背なに素直さ滲ませて
太陽を独り占めして日向ぼこ

和歌山市 池 永 正 雄

蜜豆もお酒も欲しい娘たち
エピローグ道の銀杏蹴りながら
スナックに燃料らしいボトル棚
民謡のあとジャズを聴く国際派
紅葉が新緑になるまでの忍

和歌山市 玉 井 豊 太

祝盃の席誰とでも笑い合う
手に余る夢のひとつで生き甲斐を
大胆な風わたくしを連れてゆく
夜あそびは男にあった時間表
やんわりと外堀埋める握手攻め

和歌山市 細 川 稚 代

霜柱踏めばまっすぐ歩けそう
MRI忘れたきずにくれてくる
鉢植が増えて独りにならされる
吉宗に似た武者もいる松屋町
ネックレス亡姉の残り香抱いていた

和歌山市 北 山 好 笑

福は内ぐらいじや福は舞いこまぬ
嫌な事みんな追い出す豆を撒く
古いねと言われて黙るほかはなし
しなだれてチラシの指輪見てる女
春の声行ったり来たり身の回り

和歌山市 榎 原 公 子

釣り上げた男に振り回されている
喫煙ののろし夫の灰皿に
蛇口ひねるとわっと地球の涙
米の生命 魚の生命をいただいて
職人の悲哀 仕事が楽しくて

和歌山市 岩 本 美 智 子

冬の蒼さを突きぬけてゆく鳴咽
諍いを包みこんでる冬の芽よ
わたしの画布の隅におく負のページ
反核の祈りは深し森の白
開けてみようか扉のむこう春の音

海南市 三 宅 保 州

魂はクロノメーターたり得るか
万病に効くのには効かぬ
病氣したときから惜しくなる命
援軍は期待どおりに来ないもの
それにしても有無を言わさぬ改札機

岡山市 井 上 柳 五 郎

日の丸は罪かぶされて五十年
大正の胃はまだ飢えた目を偲ぶ
自由への怖さを逃げた籠の鳥
これからりハーサルなない老いの道
老いの齒に焼するめ味もう噛めぬ

倉敷市 田 辺 灸 六

罪いくつ捨てて七十路の寺参り
恍惚の視点に古きよき時代
かすがいの錆は涙の跡だろう
敗者復活鋭意作戦熟慮中
考える暇をくれない豆鉄砲

笠岡市 松 本 忠 三

役付になった途端にクビになり
振出しにもどる賽の目ありません
かといつて私一人で逃げられぬ
偶然の一致におどる裏表
ゆきあたりばったりその他大勢で

岡山県 萩 野 鮫虎狼

後押しの妻が倒れる老いの坂
柚子一つ増やし風邪引き湯に浸り
あつさりと首を切られてから歩く
前歴を秘めて女の薬指
顔中を崩して折れた蟹の足

岡山県 矢 内 寿恵子

四海波静かなれかし初光
正直に生きて貧しい風の中
程々の煩惱足るを知らされる
身も蓋も要らぬ無何有の郷で生き
つばき落つ我が結果もこのように

広島県 森 田 文

一幅の絵を見る如き厳島
落ち栗を拾う子もこぬ冬の入り
戴いた香水五年開けぬまま
懸賞マニアおいしい話ばかりする
睡蓮も鯉も黙して年の暮れ

廿日市市 林 野 甦 光

酔い醒めにガード下なる雪景色
鯊釣りの子供の列に父がいる
腕まくりして酒席に座す若さ
古里の便りを聞きに雲走る
松の内 見合のはなし娘に届き

竹原市 森 井 菁 居

脇役で良し一流になれば良し
がんじがらめを抜ける術なら知っている
病院へ行く日程の○印
屈辱の罵声をビエロ忘れない
出むかえもなくふるさとの無人駅

広島県 藤 解 静 風

沖繩のいたみ解つてない政治
震災で明けてオウムで暮れた年
へそくりでも迷っています預け先
手心を加えた枝は折れやすし
裏口に回ると裏の貌がある

柳井市 弘 津 柳 慶

鳥取市 岩 原 喬 水

強がりもそこまでついに崖つぶち泣き言に母も少し持て余し

金見ると妻のお天気晴になる老夫婦喧嘩白紙にすぐ戻る

粹がつて恥の上塗して終い

平和ボケ地下の戦友泣いている紅葉散るけれど女は散りません

疑心暗鬼 会談燃えに燃えている

月給日居酒屋男の城になる

下関市 石 川 侃 流 洞

鳥取市 美 田 旋 風

嵯峨野路へ竹の音聞く妻と旅

横道で人間らしい顔に逢う

わからず屋だんだん屑に近くなる

パソコンが老いては子らに従わす掘れば出る遺跡の村はまた赤字

年金へ働き足らぬ悔いがある

ポイ捨てを山のカラスが見張ってる

ふるさと恋し楊貴妃像が西を向く

神々が守るカイロに陽が昇る (エジプト旅行)

仏の掌に乗る幸せのお身拭い

鳥取市 武 田 帆 雀

倉吉市 野 中 御 前

小細工はすまい美点が皆消える

干涸びた瘤がときどき顔をだす

第一条第一項が気に食わぬ

いつも何かに見られている鏡

ばくばくと飯食う妻が主人公

頭陀袋へわたしの虹を抛りこむ

頷いているよで話聞いとらん

終着駅が恥の数など考えぬ

十本のマイクに強い大田知事

袋からうっかり恥が転げだす

鳥取市 西 村 黙 光

倉吉市 松 本 よしえ

昼と夜 逆になるよな予感する

北側の壁にいくつも傷がある

齢ですな布団の中で飲酒事故

お金持ち必ず豊かとは言えぬ

真夜中に現場検証鬼がする

逆光の中で女神と間違える

終身刑 酒は即座に控訴する

美しいイクラ悲しい色に見え

被害者が時計の捻子を巻き戻す

頂上に続く道だと思ひ込む

倉吉市 野口節子

私小説 平らな道で書きづらい
冬木立そろそろ春の絵をかこう
頼られてそれから弾むまりになる
どん底を抜けた両手は温かい
許せとは言わずダイヤのプレゼント

米子市 石垣花子

十三回忌 耳底に亡母のいくさ唄
童話の嘘みんな知ってる子供達
玄関を狭めはじめた子等の靴
隠居所からまだ指揮棒を振りたがり
歳月の重み白髪が増えていく

米子市 澤田千春

太陽でなくては拭けぬ空の雲
手袋よひと日の温みありがとう
陽に干そう借りた傘からまつさきに
窓拭けばいくさに散った兄が来る
いつもの顔が揃いみかんの皮をむく

米子市 金山夕子

八合目 前も後ろもよく見える
筆をもつといつも緊張してしまふ
決めつける男 私は大嫌い
闘牛士のマンボに乗って大掃除
悪役の裏はきれいに拭いてある

米子市 茂理高代

十二月になると背中が丸くなる
雪の冷たき趣味捨ててからじんと来る
糸を巻く遠い想い出めくるよに
あとわずか渡る橋なら汚されぬ
裏ばかり見て暮すから笑えない

米子市 中井ゆき

父の樹に鳥が残したメッセーじ
いつもながら雪が来るまで支度せぬ
無位無冠 借りのないのが勲章だ
仕合せな顔は犬にも分かるらし
てのひらに何時も昔のままの母

米子市 川上より子

歌おうか音符のように大根干す
日を置いてたたむ余韻の客ぶとん
長い時間は化けきれぬ女の背骨
胸奥の瘤はわたしの存在感
第九も歌いかぶ菜も漬けて年暮れる

鳥取県 松下たつみ

また同じ町長が出て町平和
万一のその一があり自粛する
てれかくし一言花をほめておき
いじめが続く坊や大きくならないで
結論は同じことだが動と静

鳥取県 谷口次男

鳥取県 上田俊路

のどほとけ本音の泊る常宿だ
補聴器は要らぬ丈夫な壁の耳
絵空事 平和の二字が宙に浮き
気まぐれの上司がつける査定表
あの部下がスパイと分かり青くなり

鳥取県 大角幸代

鳥取県 石尾かつ乃

今もまだ迷いながらの今日明日
産衣をたたむとてもやさしい顔をして
爪を切るいのちをどうもありがとう
バラ一輪 窓際におく嘘もおく
淋しくて昨日の嘘を抱いたまま

鳥取県 田村きみ子

松江市 柳楽鶴丸

待合室借りマフラーを編んでいる
フルートの響きが好きで目をつむる
陽のあたる窓で大きな欠伸する
元気ですかと電話をくれる絵はがきの女
ラクダ見に行こうか寿命延びるかも

鳥取県 羽津川公乃

松江市 舟木与根一

祝いごと三つ重なる春を待つ
愚痴を吐く袋は二重底にする
降る雪へ気張って見ても一千歩
馴れ合いに妥協の出来ぬ自尊心
やがて時効 枕を少し高くする

もう一度花を咲かせる風を待つ
稔らせた稲穂に土は満ち足りる
コスモスの風に幸福揺れている
落ち葉踏む道は檜山まで続く
繋がった首でボーナス諦める
励ましをいっぱい貰い快癒する
あの日から背負う荷物はほどほどに
孫の嫁そのあと曾孫見るつもり
落ち葉掃くつるべ落としの陽を背に
思い出をなざるとみんな昨日のこと
土に還るまで椿の身嗜み
地球上に男女の外にニューハーフ
妻がいたから表彰状感謝状
連続でイエローカードの十二月
中八を嫌ってら抜き使っている
余生などと思えば田圃広すぎる
山消えた故郷少しも落ち着かぬ
根性を先ず叩き込む拭き掃除
古希という洩垂れがいる老人会
初日記 楷書で寝正月と書く

出雲市 伊藤 寿美

十二月八日 戦を知らぬ孫が生まれ
無人駅一本道は老母へ着く

喜々として童女の老母は紅をつけ
子無き娘の淋しさ何もしてやれぬ
超速球スローボールの後に来る

島根県 西村 早苗

雪舞えばひとりまぼろし寄せ集め

初春の耳 朗報計報の風を聞く
一人ではもろいが束で来るひ孫
念を押す事のみふえて喜寿の春
チンと鳴るレンジ牛乳バン一個

島根県 堀江 正朗

暮れの町 八十路もきつい雪を踏む
あられ降る音とちびちびうまい酒

幸せを考えながら聞くニュース
握り寿し指の感からくるうまさ
まだやれるそんな心で八十五

島根県 堀江 芳子

海潮温泉嬉しさ夢のようぬくめ (薫風・鬼遊両先生
カルチャーの方々と 二句)

たぬきならもつと美人に化けてます
美容院となりの椅子はおしやべりで
だんまりの背ながら寒さくる炬燵
子のようにすかし爛する阿呆らしさ

島根県 藤原 鈴江

さようなら病院ふり返りふり返り
亡夫の影いよいよ濃くなる五十年
若き日の恋のカケラを抱いて病み
年老いて独り芝居の気楽さよ
リハビリはそんなに楽な芸でない

島根県 佐々木 鳳笙

山彦がメシニスルゾー山の畑
人生観変えたといんどから帰国
他愛ない話へそれで老夫婦
ムルロアへ行く角出した魚達よ
岩海苔を送ると届く吊し柿

香川県 成重 放任

飛車角が逃げて行き場のない王将
育んだ家庭の温み残したい
懐の寒さにしみる寒の風

熨斗受けてやつと我が家に春が来た
十七字 夢の中で連れてゆき

香川県 池内 かおり

厄日だな顔から先につんのめる
あらうれし万年筆が出てきたよ
消しゴムと2Bが好きな家計簿だ
行列の出来るタコ焼屋に並ぶ
ここという時は女も飛び下りる

松山市 白石春嶺

通された部屋にたじろぐ虎の皮

気位が高い本家の茶が苦い

みの虫がのん気に春を待つ個室

三日月が刃物に見える寒い窓

酒ぐせも掌握人事課のマル秘

唐津市 久保正剣

バツイチも表示をしたら再生紙

年甲斐もないとは幾つかからです

沖縄の知事にはあったバックボーン

すんなりと逮捕許諾に起立する

うらぶれたママのショールが消えた路地

唐津市 山口高明

福寿万来 左馬の湯吞を買ってくる

やんちゃ者 肚の中でも大暴れ

演習に気合が入り撃墜ス

白秋の故郷で食べたセイロ蒸し

観覧の美人も霞むボタン園

唐津市 浜本ちよ

半端な日 半端な時間持て余し

鏡見て母の顔そこにありありと

見事な菊 老いの武骨の手によりて

大好きな秋は短く冬長し

洗っても洗っても足りぬ狂気なり

弘前市 岡本花匠

原発へ抗議のなみだ寒立馬

凡夫ひとり思い過ごして冬の闇

やさしさを下さい寒い地吹雪よ

薪くずす音に目覚める冬の蝶

弘前市 一戸ツネ

黒人霊歌 重い鎖の音がする

百日忌ころ残りの飛行雲

交差点 口笛吹いてとおりゃんせ

霊柩車 信号待ちで世を惜しむ

弘前市 須郷井蛙

羽根布団 重みがなくて寝つかれず

朝昼夕 飲んで楽しい旅の友

この小島轟沈しそう客の数(礼文島)

花の名も覚えて帰る北の旅

黒石市 相馬一花

臆病な猿は渋柿買いにゆく

若い振りして水割りで乾杯す

銀行で熟女も外すサングラス

十和田市 阿部進

禁煙の人に流れてゆく紫煙

仕合わせは夫婦で健康競い合う

喜寿なれどまだまだ元氣畑仕事

愛だけで夫婦の城は守れない

野良着きた父の背中に隙がない

青森県 諏訪柳々

無縁仏遊女や哀し法戒名（福井県小浜市にて）

無縁仏遊女の手にも曼珠沙華

遊女泣く日本海の波しぶき

香焚けば遊女は踊る弥陀の舞い

八戸市 島田昭治

義理がたい男と言われ貧の中

棺持って最後のお別れ心から

噛むほどに南部せんべいいい味が

せんべいの味は能弁でない知り

仙台市 川村映輝

母を越え父まで越して九十二

余るほど豊作の米値下げなし

パン食に切り替え米にこだわらず

本山と積んであるのに非常識

静岡市 安本晃授

空白を埋める故郷の山の装

妥協して時流に乗れる切符買う

歯車を止めると天が広くなる

老梅の花芽たしかに天を突く

富士宮市 渥美弧秀

敬老の湯吞茶碗に艶が出る

雲霽れて富士は白雪けがれなし

病床で廉太郎の曲口読み

妻の十八番 愛の讃歌の終い風呂

富山市 酒井輝

ゆっくりと振り子と語り独り住む

年金が出て厨房にふたり立つ

子と孫に一日ずつを育てられ

キャンドルが揺れコーヒーも揺れる恋

大阪市 上田柳影

蝸牛もう上がらない青い天

金バッジいけしやあしやあと国泣かす

さざんかの道でつらさに耐えている

スランプを癒す田舎の饅頭など

大阪市 河井庸佑

野次馬根性持って火の粉を被る破目

相手立て自ら生きることを知る

調子良い話へそつと距離を取る

平穏を願って一步退くとする

大阪市 町田達子

恐いこわい一年でしたと告げている

池のアヒルが突然に歌い出す

鳥語わかれば実に楽しいかも知れぬ

若者の仲間入りして足る茶の間

大阪市 稲本凡子

早い一日 遅い一日 十二月

洗濯機 夏の疲れが出たようだ

花時計 千支のねずみは愛らしい

親切が空回りする毒舌家

大阪市 神夏磯典子

人の世もかくありたしや銀世界

地震 雷 寒氣 突風 吁自然

欲の無いお人で席をすぐ譲る

世界の文字覚えて欲しいランドセル

大阪市 井上白峰

厳冬に耐えて春待つ北の島

理想論唱えて爪を研いでいる

忘れたいことが心の隅に棲む

目の高さ変えて広げた老いの視野

大阪市 松尾柳右子

鼻汗もかかぬ美人のおちよば口

長寿国 美人薄命 死語となり

美人風呂オバサン達の姦しく

一つでは済まぬコタツのみかん好き

大阪市 清水利武

鼠取ること忘れてるねずみ年

温かい政治届かぬ仮設住宅

身内より他人気にするインタビュ

知事さんの足引っぱっている仲間

大阪市 寺井東雲

新築の隣の家と比べられ

大胆に脱いでも誰も見てくれず

被災地は言葉はいらぬ金がほし

漬物と味噌汁だけは娘に教え

大阪市 藤田頂留子

電ノコをこばみつづける父の斧

役立つと思つた時は捨てたあと

過去をぬりつぶして咲かすネオン花

わざわいの口で椅子からころげ落ち

大阪市 北勝美

おいしい昼 食後に忘れた飲み薬

朝日射す紅葉に映える窓明り

ぎこちない忘れた杖の膝がしら

その都度に番号繰ってる電話帳

大阪市 渡部さと美

世に媚びぬ父を尊敬できた娘ら

有頂天になりすぎ風がひっかかり

返せないご恩せめてものゴミ拾う

酒ビール揃える先ずはワインから

大阪市 川端一步

病人は勧進帳と知っており

非を詫びて一丁の豆腐つつき合う

長生きが出来そうだいとも空腹

若者がわんさ賑うお大師さん

大阪市 奥田良子

お書初め初孫の名を書いてみる

若松を生けてはすまぬわび住居

夢の中 亡母は光の輪に在す

咲き終えて花は静かに夢をみる

ちやぶ台を囲んだ頃の子の育ち 堺市 柿花 紀美女

子等巢立ちもとのふたりで見る大空
一瞬のさみしさ一人のエレベーター
社会人となった子眩しく見てるだけ

堺市 一瀬 福一

もう夢はためてはならぬ適齡期

噛み切れぬ話が奥にある入歯

エブロン of 白さに今日も乱れまい

ふしくれた指に光っている指輪

堺市 中野 樺子

悲しみを消そうと伸ばす丸い背な

嫁姑 価値観違うゴミの山

孫以外おばあちゃんとは呼ばないで

心の脂肪やと落せて広い視野

豊中市 江口 明光

結びあう命 手綱が太くなる

晴天だ老婆の背が少し伸び

器からしみ出る味を持つもの

本の虫 今日漫画を読んでいる

豊中市 辻川 慶子

人間も渡り鳥にも電信機

友達が友達来て来て小半日

落葉道歩くと足が温かい

寅さんのこれが最後と言わないで

菊人形しみじみと見る菊師の手 豊中市 三宅 つえ子

ふとみればそこかしこも冬の音

雪の日にしみじみと読む山頭火

目薬をさし読み読んだ罪と罰

豊中市 湯浅 馬洗

天安門広場人人人は十二億

毛沢東 天安門で齡とらぬ

早彫りのハンコに魅せられた一つ

風林火山 怪訝な顔の孫子出ず

豊中市 月原 方郎

自分史のピリオド早く打ち過ぎた

ピリオドがコンマになって長電話

はやばやと計算済みのお年玉

老いらくの恋は純粋二人とも

豊中市 稲葉 眞郎

体重の話禁物孫娘

窓から外ばかり見ている独り旅

別れた後 余韻の残る美しさ

鍵束を探し老眼鏡見付け

箕面市 坪田 紅葉

紅葉客 全然駄目と商店街

言わざる聞かざる老いのぐち話

一人住む誰かに会いたい外は雨

久し振り話す言葉も里なまり

池田市

岡本吉太郎

寝屋川市

北岡波留吉

うす味になれ物の味わかりかけ
味な事 上手にしすぎて嫌われて
混沌の渦の中より希望の芽
故郷の空限りなく青かった

吹田市

茂見よ志子

枚方市

前 たもつ

雁の寺 此処がモデルか等持院
危惧してた土砂降りに傘持ちし甲斐
片隅という安らぎの場所が好き
荒城の月なら吹けるハーモニカ

茨木市

藤井正雄

交野市

福崎しげお

派手な過去誰も知らない車椅子
取り急ぎ要用的みと命令形
ときめきの音で閉じてるコンパクト
定年の支線ヘレール敷設中

茨木市

島元ふみ

藤井寺市

高田美代子

無人売りの台に小菊も置いてある
宿場町出ると枚方菊人形
バラで結ばれ菊で別れるこの世かな
いたわって失礼らしい八十歳

寝屋川市

岸野あやめ

藤井寺市

福元みのる

淋しさにチーズひとかけ食べてみる
鯖ずしの国籍問わぬ秋祭
カラオケで唄う阿呆に仲間入り
一年でようもこんなに老けたこと

信心の深さ錫杖知っている
牡丹鍋 一味違う吹雪の夜
頭上の花 京を彩る大原女
さあチャンスこころで靴を履きかえる
極寒に耐える裸木の落ちつきよ
心の隅にいつも自慢の郷が生き
コビー屋で釣書と句集鉢合わせ
真夜中の電話は切れて眠れない
湖に母恋う雪が吸い込まれ
干柿ののれんが揺れる日向ぼこ
夢追うた過去を夢みて生きる老い
塩盛ってビルの谷間に守る味
サイタサイタから始まったわたしの読書
呼び止めたら叱られそうな歳の暮れ
割りこんだ席で小さくなっている
しばらくは九官鳥がおめでとつ
七人掛けに着膨れ五人居眠りす
腹の虫みな二次会をねらってる
Jリーグ速さについてゆけぬ歳
やっと座れた何とこの駅降りる駅

羽曳野市 榎本吐来

岸和田市 岩佐ダン吉

秋深し今宵も酒とふたりいる
意地悪い話が好きな夜の蝶
結論は明日にするという睫毛
年金が師走の風を避けて行く

羽曳野市 酒井一壺

階段をゆっくり上り答出す

ボチボチとマアマアで無事年が暮れ

岸和田市 寺田甚一

階段の途中で内緒話する

APEC大阪の街金しぼり

浮き沈み重ねて着いた岸に住み

五十年マグマ噴き出す基地の島

岸向けて我武者羅だった若い頃

兄弟対決 長幼の序が守られる

八尾市 山下美津留

紅葉散る露はらはらと顔にくる

重ねばきしても夜警の胴震い

岸和田市 田中文時

作品の鼓動を確と絵の個展

同じ風受けて上がらぬ風もある

いそがしい夫婦でいまだ綻びず

ただひとつ誇れる日記半世紀

初笑い今年も酒はやめません

身に覚えあつて迫力欠く意見

八尾市 吉村一風

よく笑う妻に半分運もらう

バス旅行ガイドの旗が急ぎすぎ

岸和田市 井齋一齋

母の味 免許皆伝おりぬ妻

舌の先 嘘をつく度伸びてくる

花生ける束の間 年を忘れてる

利子だけで食えた時代は夢に消え

ひらがなのくらしと思う母と妻

子の寝顔 別れ話が切り出せぬ

岸和田市 原 さよ子

女の旅 食べて喋ってくつろいで

久方の出逢い打ち解け熱い燭

和泉市 西岡洛醉

お見舞にいつて血圧語り合い

老いの一徹 中途半端が許されず

振り出しの二人に戻るフルムーン

万歩計 一歩前進朝焼ける

御開帳 秘仏は紅をさしていた

一日が平和に落ちて夕焼ける

大阪府 榎山 隆
相槌を打つてゐる妻があくびする

虎落笛あれは笛吹き童子だろ
三歳の身にもつけてゐる処世術
お賽銭投げて決心つけました

神戸市 山口 美穂

北風も散歩の老母を避けて欲し

老母の背に同じ道ゆくわたしみる

雑木林は明るく冬陽いただいて

地震から時計して眠る癖がつき

尼崎市 田中 薫

冬かもめおんなの首のさびしきこと

赤ワインとろりとろりとおんなの耳

初冬のものみな音を失えり

老いてゆく指押しつけて米拾う

西宮市 林 はつ絵

再会の教え子に聞く人生訓

ふところ筋を曲げない風を抱く

すこしでも歩数少なく曲り角

兄嫁に盛っていただく亡母の味

西宮市 菊池 トミエ

コスモスと背くらべする般若寺

バスツアー リンゴ畑で食べた味

効きそうで効かぬ目薬買って来る

箒目を入れた紅葉の寺に座す

朝風呂で私のリズム整える

今夜なら心の色が明かされる

お色気がたった一つの武器らしい

山ひとつ越えたら母の海に会え

西宮市 池田 善守

初詣も一つ頼むえべっさん

納棺へ親父の硬い爪を切る

無理きかぬ年と言いつつ午前さま

妻の辞書ごめんなさいの言葉なし

西宮市 亀岡 哲子

陽に映える紅葉に何故か涙ぐむ

たくさんのお餅の中のおぬくい風

もう一度ほっぺつついて笑わせる

西宮市 山本 義子

山ひとつで雪降りしきる旅のよき

車窓から雪を楽しむ無責任

忙しいもストレスひまもまた困り

年明けはと自分に自分言いきかせ

宝塚市 嵯峨根 保子

言訳の出来ぬ瘤です孫の守り

憂き事に石もてあそぶ川の岸

ふるりの秋がこぼれる宅配便

師走風もう空っぱの福袋

川西市 氏 林 洋 敏

ジングルベルうんざり聞いているケーキ

俗人の暮らしを神もうらやまれ

ふるさとで必ず食べる豆ごはん

カレンダーわが家を飾る美術品

相生市 中 塚 礎 石

切っ先で回り続けるコマ静か

喪の家で菊の大輪咲きほこり

いたずらの葉書を捨てる気になれず

独り者同士で秋の長電話

奈良市 天 正 千 梢

正月だ頭にしみる本さがし

入り口の工程いっちょ大事にし

辛口の批判はつきり切られたよ

軒毎に柿をつるしてぬくい冬

奈良市 米 田 恭 昌

六根清浄 仏師の心澄み透る

フルムーン今更ときめくこともなし

たこ焼きのサムライボールと言う出番

毒グモも地球の仲間恐れまい

天理市 飯 田 昇

地下足袋が不況の底であえいでる

雪しんしんぬるめの燭がもの足らぬ

祈らねば此の世は解せぬ事ばかり

夫婦別姓 家族の絆思う日も

奈良県 上 田 翠 光

こんな事書くから朝日アカと言う(朝日新聞一九九五年二月八日

南無三 七三一が血迷うた

七三一よ天にツバする面よごし

戦友の死を国辱にする七三一

和歌山市 山 田 高 夫

栄転の席 異端者の目で見られ

飽食の口に馴染まぬせち料理

屠蘇を酌む老いには誓うことも無し

風車子安地藏の手に回る

和歌山市 青 枝 鉄 治

六頭身の妻だが心あたたかい

雑魚ばかり揚がる港に舞う小雪

ダルマへ目もう政治家の顔をする

イエス・ノーだけの語学でパスポート

和歌山市 福 井 桂 香

何やかや言うて一月もう半ば

そおとと撫でる新しい日記帳

いやなこと笑い飛ばしているパワ―

この道を歩きつづけた自負がある

和歌山市 山 口 三 千 子

遣り繰りは知らず車を買ひ替える

人生とは忍の一字か走馬灯

訂正印ばかりわたしの設計図

冬の絵の中で耐えてる木守り柿

和歌山市 田 中 み ね

お膳立てきいて会議のリズミカル
ここだけの話ができる友の居て

底無しの胃袋家計脅かす

いい歳をしても居ります好きさひと

和歌山市 堀 畑 靖 子

憤り木枯し三日吹き荒れる

笑止千万わたしがピエロだったとは

眼を閉じて開けばそこにあった愛

虚空幻影おろかな夢を見ました

和歌山市 玉 置 当 代

スーパーのチラシに負けるグイエット

寒風を突つ切り孫に逢いに行く

しおらしくひいらぎの花 鬼門除け

どん底で薬稽さえも見当らず

和歌山県 小 倉 ア サ

コミカルな風半分はわたしの掌

日溜りで消えてたはずの夢に逢う

白い鳩出るまで辞書を買ひ漁る

はぎれ良いテンポへ冬の力こぶ

岡山市 川 端 柳 子

難を言えば少しよそみしてほしい

いまが一番しあわせという短さで

読めた読めたと優しいパパの物わかり

色紙に山あり谷あり花開く

岡山市 時 末 一 灯

追いつめず笑顔がかえってくる不気味

声のない笑いで内へ投射する

否定する強さが疑惑誘ってる

オヤジ殿 価格破壊で小さく見え

倉敷市 小 野 克 枝

負けて勝つ勇氣五歳の齒が白い

自我を捨てると夫婦の壺が光り出す

長風呂を氣遣う声があり平和

一つの鍵で長い月日を支え合う

岡山県 小 林 妻 子

落日へ夢は明日が駆けめぐる

指定席埋まり夕餉も恙なし

こめかみのあたりでいつも迷うくせ

喪中乱着あああの人もこの人も

岡山県 花 田 たけ志

良い方に解釈しても悪は悪

雑念の嵐がすさぶ風邪の床

高齢も担う福祉で若返り

きびしさが所作から口からにじみ出る

岡山県 岩 道 博 友

年の暮れ多忙の字だけ大きくなり

天国で句集を出そうか溜めておく

収入源無くて寄付だけ取りに来る

戦後五十年 遺髪を埋めに訪ね来る

散り残る錦の紅葉惨めとも

昼寝した夜は眠れぬ不眠症

ローン終りやつと安らぐ俺が城

つけ足しのような小さな茶碗むし

岡山県 池田半仙

痛恨の拳で拭いている涙

夫婦舟 苦労は波の数だろう

借りたとは思っていない息子達

離農する決意が鈍る母の咳

岡山県 福原辰江

白い雲 私に何を言いたいか

裸木の無口よ僕と同じだな

割り切れぬ数字なんかは考えぬ

まだここに落ち葉が踏める古都の冬

竹原市 時広一路

還暦へ祭りばやしの笛を吹く

還暦の宴は妻の酌が良い

立春へ笑い上戸の鬼が寄る

冬至の宴かぼちゃと妻の二人きり

竹原市 古谷節夫

泣くなども泣けとも言わぬ夜の月

全自動なんよと夫に教えとく

全身麻酔 何か忘れて来たような

満開の笑顔いそいそ退院

竹原市 岩本笑子

山茶花の熱い思いを踏みしめる

留守電へロボットのようにつしかけ

冬の陽にモナリザに似てたまつばき

てんてまり唇寒い立話

竹原市 石原淑子

玉手箱あけないままに共白髪

紳士録 仮面はずせぬ人も載り

陣痛を知らぬ女のしゃべり過ぎ

今なにを言っても無駄な青リンゴ

宇部市 平田実男

麻酔からさめてみだらな夢だった

仰ぎ見る銀河よむなし世紀末

役職がつきそれなりの貌になり

悪あがきは止せよ柩が置いてある

美禰市 安平次弘道

今年こそ確かなものを残したい

ていねいな化粧 樹木へ雪が舞う

想い出を燃やす手元がよく止まる

好ききらい主張し自分取り戻す

鳥取市 春木圭一郎

トップニュース明るい初春の灯をともし

正装をすると黒髪映えてくる

初心にかえり拭き掃除から始めよう

藪椿みんな一人と知っている

米子市 野坂なみ

米子市 白根ふみ

生も死もまっ赤にとけて熟柿食む
母はいつも独り占めする辛いこと
住みなれた場所で方位のこと言わぬ
仏さんを拭くとわたしが生きかえる

鳥取市 小谷美ツ千

最高の舞台は雪が降りはじめ
胸のかたりのもぬけの殻の影法師
偶像の毀れる音よ絹の服
しばらくは男に逢わず愚を通す

倉吉市 最上和枝

幸せの甕からいつも洩れている
ペンだこが生きた証の父という
子ネズミがブランド品をつけたがる
墓石に許せと花を手向けても

倉吉市 米田幸子

あこがれの君も近頃背を丸め
嫁姑 遠くにあつて他人めき
平和ボケするには欲が多過ぎる
屋台骨も大黒柱も黒光り

倉吉市 淡路ゆり子

黒を着て答の出ない列に居る
親族を集めて過去をしゃべらす仏
思い出をたたみ直している古着
捨てようと思った鍋を五年も使う

米子市 青戸田鶴

干支を買う今年も無事であるように
償うと肩の力もぬけてくる
借りた本で私の部屋に灯がともる
予感あり家族一緒に写真とる

米子市 光井玲子

とじ蓋の役目そろそろ限界に
アドリブを本音に取って蹴躓く
さすが先輩まるくおさめて呵々大笑
差し引けば少し多いな悔いの数

米子市 田中亜弥

結論を急ぐとみんな風になる
化けたかたがまずいと親分が怒る
この道は生者も死者もよく通る
種火なら子の数だけはちゃんとある

米子市 菅井とも子

鐘の音をかぞえ終って幕が開く
老い二人少くなつた餅の数
鶯が来たので正月ホッとする
春浅い杏の里の旅想う

米子市 寺沢みど里

約束の数が日毎に重くなる
今日よりも強くなりたい紙袋
拭くほどに底びかりする皮表紙
その度に位置にこだわる箸まくら

鳥取県 林 露 杖

立春は八十回目の誕生日
諦めとやりたいことが交々に
ハードルを下げて明日を考える
凶年を議員逮捕で締め括り

鳥取県 乾 隆 風

ふくよかな乳房を台なしにしちやう
阿弥陀さんにごめんなさいと言えますか
じいさまもやがて四つん這いに戻る
極楽へやがて芽吹くか裸木よ

鳥取県 さえき や え

仏さま干し柿に粉がふきました
祖母はりつ おばの名みやでわたしやえ
ああ二月 消化不良の出納簿
花ゆずをもらう約束雪となる

鳥取県 岩 崎 みさ江

背をみせている信頼は裏切れぬ
頼杖で遠い昔に会いに行く
黄昏れてようやく解る母の愚痴
人生の節目に母の黒羽織

鳥取県 西 川 和 子

預金帳タイアモンドに化けました
点滴に昨日の元氣なつかしむ
ふっきて今日自転車よく走る
大胆に的をはずして盛り上がる

鳥取県 大 角 正 道

酒を飲む今日のドラマを消すように
命をかけてふるさとへ戻る性
失敗をしたのはお前だけじゃない
弓を射る方向さえもわからない

鳥取県 土 橋 睦 子

たこ焼の匂 炬燵に花が咲く
焼いもに孤独を語りかけている
保護色でいよう優しい愛だから
苦労した涙の粒がいま乾く

鳥取県 黒 田 く に 子

年金を貰う日 寒さ苦にならず
付きそいの方が胃薬飲んでいる
文明文化進みつかれてくる地球
無理するなするなと孫をおしつける

鳥取県 幸 家 単 車

溜息を吐いてショックをやわらげる
御免ねが言えず心に蓋をする
帳尻を合わす魔術にボロが出る
影法師 必ず俺の味方です

鳥取県 乾 喜 与 志

老人ホーム親しい散歩道になる
美味しさも忘れたような喉になり
焼き鳥賊とワンカップだけ買ってくる
お握りにコーヒー添えてさあどうぞ

鳥取県 石谷 美恵子

切り捨てごめん大根の首はねている
自論吐く男へ椅子が温もらぬ

生涯を素顔で父は海に生き
あしたまた逢えると思う傘たたむ

鳥取県 津村 八重子

母の背にいつもかがやく愛がある

お年玉 孫は地蔵の顔で受け

よくなれて猫も家出をして困る

古毛糸 亡姉の思い出玉に巻く

鳥取県 太田 幸枝

水だけは無料と言ったその昔

必ず通る浄土の道に花植える

おろおろと入った嫁が胡坐かく

傷いやし心もいやすドクターだ

出雲市 久谷 まこと

わが心晴れぬ一日術もなく

洪帯に勘忍袋しめなおす

発車ベル涙こらえた手が温い

一行詩どこまで明かす胸の内

出雲市 板垣 夢酔

二等兵 社長になれたのも平和

椅子深く定年辞めたくない心理

蟹見つめソロバン玉は鯛指す

汽車に寝て影は宴会まだ座り

出雲市 吉岡 きみえ

向こう岸の花を手折りにゆく話

木枯らしの街で募金の小さい音

他人には見せぬ傷口抱いている

天秤にかけるとどちらも捨てがたい

出雲市 竹治 ちかし

片棒をカニに担がす村興し

勲章は欲しいが本気にもなれず

冬眠も春眠もあり妻元氣

客が居る時には頼まぬ酒も出る

出雲市 岸 桂子

母の背に学ばなければならぬもの

中流の意識の中にある不安

動かねば今日一日が惜しまれる

その人を偲んで聞いたエピソード

出雲市 小白金 房子

古き友つなぐ恩義はわすれない

嫁ぐ娘へ障子張り替え新春を待つ

ひと言のやさしさ老母を喜ばせ

ふる里の風にたわむれ春を編む

出雲市 小玉 満江

私へ使命と思う委嘱状

私に安楽椅子は似合わない

古里の夢に目覚めて夜半の風

サングラス外せば意外おじいちゃん

北風と春のことなど話し合う
出雲市 石倉 芙佐子

白梅にだんだんなつく鶴
どんよりと出雲の空はまだ晴れぬ
またしても地吹雪立てる六十路坂

出雲市 富田 蘭水

すらすらと時々指がうそを書く
酔いさめてまた悩み事一つ増え

大皿に私の好きな秋を盛る

自己嫌悪そろそろ先が見えてくる

島根県 石飛 水煙

植樹祭 天皇はるかに植え給う

語り継ぐ飢えた戦時風化する

筆持てばめたい文字も書いて見る

長い道おかた越した八十歳

香川県 山地 マツエ

近づけばまた遠ざかる虹の橋

六十の手習い夜更けの墨をする

虎落笛一人の夜を深くする

若者の嗜好に流れ行く厨

今治市 矢野 佳雲

一億の中から君を探し当て

逆さまのコウモリ正當かも知れぬ

ついて行くひとに当った玉のれん

お手植えとある碑の松たしか

祖母に手をとられ接待大師様
高知市 北川 竹萌

初日の出 今年の姿もう決る
指切りの物捜し当て曾孫呼ぶ
運転免許更新叶う八十三秋

高知県 小澤 幸泉

腹這いの奥から何も聞えない

三病をあたためている新春三ヶ日

定年の先はこの橋渡るだけ

十二月わたしの手帳予定なし

高知県 赤川 菊野

住みなれた町で異郷の風に会う

一世紀昔がそこに過疎の村

灯を消すと亡き母のこと亡夫のこと

案山子にも流行がありミニロング

福岡県 横地 東川

手品師と社長のポケット底がない

マイホーム主義の夫に友が来ぬ

写真焼く遺影に言葉かけながら

低金利 銀行は懸賞の糸垂れる

熊本市 永田 俊子

やさしさを貰い過ぎると重くなる

梅檀の万の鈴が降る童話

捨てられた石 拾われて力み出す

トップの座へいつか夕日がさしていた

岸和田市 藪野 けい子
 日曜日 暖冬うれし十二月
 大そうじ主婦が主役の日曜日

植村 喜代
 バタバタといつもの電車に乗る通勤
 河内長野市

西口 忠雄
 耳飾りの可愛さ鼻飾りの痛ましさ
 次の旅その次の旅みな余生
 いらいらとする娘 少し気にかかる

和歌山県
 初心者に手ほどきするも皆おんな
 誉めことば重ね女に気を揉ませ
 区切らない酒に夫婦の溝がで

鳥取市 前田 一枝
 街角で暗示がやつと判りかけ
 ご破算に願ひましてのくり返し

赤鬼も青鬼もない豆つぶて

水 煙 抄 (追 加)

芦屋市 藤井 千年

乗り継いでな臨終に間に合わず
 死化粧 まだ温かな母の顔
 働いて働いて母は一人逝き
 出棺を待っていたよに驟雨来る
 青白く母の遺品を焼く焰

川柳但馬 100号記念 第9回 但馬川柳大会

と き 3月17日(日) 午前10時開会
 ところ JR豊岡駅前・ホテル大丸
 兼題と選者(各題2句)

「穴」	遠山可住選
「円」	小林妻子選
「噂」	来住タカ子選
「音」	和田恭生選
「九」	奥山晴生選
「命」	森田勢津子選

事前投句「鍵」 山本美代子 共選
 遠藤小夜子

◎2月10日までに〒668 豊岡市小田井町
 14-22 但馬川柳協会へ

前夜祭 3月16日(土) 午後6時から
 会費 2000円(前夜祭10000円・前夜祭
 と1泊2食16000円)

『川柳大学』創刊句会

と き 2月11日(日) 午前11時開場
 ところ 楠公会館ホール(湊川神社内)
 祝辞 全日本川柳協会会長 仲川 たけし
 会費 2000円

題と選者(各題2句・午後零時半締切)

「雪」	斎藤大雄選
「土」	大野風選
「文」	尾藤三柳選
「手」	磯野いさむ選
「紫」	橘高薫風選
「命」	藤本静港子選
「鐘」	小松原爽介選
「愛」	寺尾俊平選
雑詠	時実新子謝選

ごあいさつ 時実新子 開会午後4時半

主催 川柳大学事務局

自選集

恒松町紅

元旦の千木 柏手の和む音
夕映えと城が自慢の橋に立つ
涙もろい背が丸くなる電話口
見覚えはあるがと恥をかいている
老いの手が墓へ詫びてるほど多忙

黒川紫香

今年もう恩師の賀状届かぬままに
ピツタリと合うて形見の靴貰う
震後一年 更地の夜がまたふける
蟹の身をさせるほんとに旨そうに
よく肥えたシェフ四十階のレストラン

有働芳仙

ジングルベル子供に夢の膨らむ夜
雪しんしん櫓の鈴の音 夢に聞き
里帰りしんみり除夜の鐘をきく
マツチ売りの少女いるかも雪の街
除夜の鐘ききつつ美容院を出る

小林由多香

手抜きして暮れのポーズを整える
期待する実りへ汗を積んでゆく
することもしない残業をして帰る
酔いぎめの冷たい水に悔いがしむ
返す金借りて傷口深くする

正本水客

一夜千しのカマスが朝の風にゆれ
幻の瀧 クロベの奥の奥の奥
ずぶぬれになってみたいと女が思う
何もすることがない日の花が咲いている
柿をむく皮がうつくしい

野田素身郎

働きすぎへ黄信号の頭痛でる
言語障害 怒りの言葉ぐつと飲み
これ以上着るものがない寒波くる
去年のことは忘れてほしい年賀状
人の世の無情を言いあう法事

藤村 女

憧憬の女すんなりと老い給う
ふところに山の絵がある旅がある
風は無情で他人の噂置いて去に
好きなひとまだ見つからず孫独身
思い込むほどのお方にまだ逢えず

遠山 可住

ほんとうの歴史に老いを攻められる
ばあさんと昔の話くり返す
ポスターの裏がもつたいない女
集金力 勝負はとうについている
結論はいつでも僕が悪になる

奥谷 弘朗

朗かな男に明日の顔がある
出し合つて百にする気の夫婦です
顔出しておく だけですむ顔に成り
女房には俺の心が透けて見え
意地のない男相槌ばかり打ち

辻 白溪子

本当にするから試すのはよそう
応待の出来る言葉を仕込まれる
バイトピラ貼つて大した店でない
主婦たちの噂にされている夫
肚据えた喧嘩と相手も知っている

久家代仕 男

野茂ほどの特使 日本に有りやなし
せつかな気性を妻になだめられ
さりながら所作に倣りはなかりしや
思いやりない直言とどやされる
お昼すぎ妻道草か戻らない

松川 杜的

新聞を読んでいるのはおばあちゃん
四面楚歌もう人間なんてやめようか
めでたさもちよつぱり百歳の喪の知らせ
イチロー二億へえーと言つたまま
三番叟か俵に迷うねずみの絵

月原 宵明

鯛すでに覚悟ゆつくり浮く生簀
幾度か修羅抜け出した座りだこ
もの溢れ男が着てる割烹着
暫くは財布に寝さす外鏡
イチローの契約二億コップ酒

野村 太茂津

枯野茫々名前忘れた風が吹く
失うたものを拾うた去年の道
玉虫色の餌に釣られてぶら下がり
ばろばろの身を悪友に救われて
枯野茫々やつと思響越えて来て

工藤甲吉

デメリットばかりが多く齡をとり
死亡欄 輪廻の世界きょうも見る
飲み過ぎて飲めない人になっている
実は実は実は実とは本音吐く
二十三回忌 真つ赤なシャツが忘れられず
(妻二十三回忌
二月九日)

金井文秋

もの言いたげな顔をさがしているマイク
厳しさと甘さ情けを使い分け
巢立ちする雛へ貸さない手の情け
老いたとて動けるうちは好きにさせ
手料理で充実感のある粗食

藤井明朗

ふる里に古戦場あり過疎すむ
母親を泣かせた運は下降線
政府予算 数字は魔術のように見え
ほんとうの瘤は夫婦で治めとき
般若心経唱え一年の無事感謝

児島与呂志

友情を真つ二つにした若い熱
好きだとも言わず小さい胸に秘め
新しい小さい命抱く毛布
子ら育て上げた母さん旅に出る
シヤリシヤリの水菜 鯨のうまい店

波多野五楽庵

死の出会い生の出会いのむずかしさ
海峡線 冥土の音で走り抜け
王手飛車もう逃げ道はないのだよ
過去形で話せば暗い事ばかり
ふて寝する本音を雪も知りません

西田柳宏子

世間並み師走せわしい老いの杖
どれがどう効くのか薬たんとくれ
一日は長く月日は早い老い
ああ言えばこう言う老婆の確かなり
毒グモも二世三世日本産

高杉鬼遊

平成八年くすりを飲んで生きている
元気かと問えばゲンキと電話口
魚の目を削るいとしき足の裏
役人と思ひ悪人とも思ふ
約束もせずに久しく会わずいる

小出智子

灯を消すと遠いところで雪が降る
北風が呼んでいるから冬が好き
たとう紙をほどいて思い出と出会う
将棋でもするかふたりになったから
雪んこが来ているらしい亡母の部屋

大空の、、ろ

(61)

橘 高 薫 風

二月号に路郎先生は「女性川柳について」と題して書く。

一昨年亡くなった近藤飴ン坊君が曾て「女性川柳一万句」という四六判横綴の句集を刊行したことがあった。書名から考えると、女性に詠んだ川柳を一万句宛めたようにうけとれるが、事実は女性を詠んだ句を宛めたものであった。本の名をつけることもなかなか難かしいことだと思つた。

女性を詠んだ川柳も宛めて見れば面白いに違いないが、私は女性の詠んだ川柳の方に、より多く興味をもっている。私にも少し時間の余裕が与えられるならば、女性の詠んだ川柳名選のようなものをつくって見たいと思つている。(中略)

姑の日なたはつこは内をむき 古 句
数珠さらくとおしもんで小言なり

糸巻の向ふに亭主踊つて

亭主が死んで賑かな家になり

というような句を詠めば、なるほどどんなにお人よしの姑さんでも御機嫌のよかりそつな

筈がないから、世の婦人達の考え方も一応はうなずけないことはない。

が、こうした婦人方にも一度静かに川柳を

見直して欲しいのである。

川柳家は決してツラ当てに川柳を創つてゐるのではない。不平不懣の塊を川柳の形式を藉りて爆発させてゐるのではない。川柳家はこつそり皮肉つたり、諷刺したりするほど、それほど弱い人間ばかりではない。川柳家はもつと大きな心で川柳を詠んでいる。たまたまモデル問題を惹起しそうな諷刺や皮肉な句を詠んだからとて、それ事態が目的でないことは昔の落首のように匿名でないところから見ても想像は出来よう。川柳家は大局から物を観ようとする。高所から、或は側面から観ようとする。従つて自己省察でも明透である。

冷徹である第三者の立場から物を観る訓練に熟達するために、時に人間的に冷たく感じられることがある。しかし、これは人間性を深く掘もつとすれば自然の帰趨と言えよう。

私は、ずっと以前に

果敢さは車掌の恋の利那主義

という句を詠んだことがある。この句を読んで車掌を侮蔑したものと言われては助からない。私の知人にも車掌をしているものがあるが、それらの人達から、路郎は怪しからんと、ネジ込まれた覚えのないところを見ると、彼等はこの句が自分達を侮蔑してゐると思つてゐないのだ。

キリストは目で見て、いい女だと思つただけでも既に女を姦してゐると言つたそつだが目姦は人間の持つ大きな弱点かも知れない。私はそこを詠んだものである。そこに自己省察が行われる。人間性の陶冶が行われる。又一面には止むに止まれぬユダの反逆性も見られるのである。川柳を味わつて興味の深いのも、そこにあると言わねばならない。

私達は人情の機微を穿つた川柳から更に温かい情熱を誘導せしめられる。自然を詠んだ美しい情景からは人の世の汚濁を漚返すことが出来るのだ。

だから私は言う。世の婦人方は俱れず憶せず、川柳を創られたらいいだろう。

路郎がこれを書いた昭和九年とは比ぶべくもない多数の女性が川柳をたのしんでいる現在だが、婦人方ではない若い世代の「女性川柳」が男性を刮目させる日が早く来てほしい。

草刈蒼之助

東野 大八

「草刈蒼之助とは何だろ。たとえば河野春三は、蒼之助のことを『蒼鬼』と呼ぶ(『色即色』付載「解題」)。時実新子も同様に「ニヒルで豪胆なそのくせ繊細な神経の鬼と呼んでいる」(『青鬼とわたし』川柳ジャーナル通巻一一九号)。彼自身、鬼といえはその自句

孤鬼庵の灯よりも雪は豊かなり

(孤峰院鬼烈蒼涯我なり「戒名の記」)

新川洋は、むしろ蒼之助は「鬼になり切れない、隠者である」(『群』22号)と言い、松本芳味は「反体制者・叛逆者・破滅者・無用者としての鬼を再生させ得るとしたら、その相貌の一端をたしかに蒼之助は具現しているかもしれない」としながら、「しかし鬼本来のイメージである、荒々しい凶々(まがまが)しさ、攻撃的な能動さに欠けるゆえ、ともす

ればただの世捨て人なり、逃避者に堕しかねないと言を呈しておく」(川柳ジャーナル通巻二二〇号)と書いている。

現代川柳派の各柳誌上のエッセイや、彼らの人物評に興味を持ち、近傍の清水汪夕居を訪ねた折、試みに彼の名付けた「孤鬼庵」なる陋居を訪ねたことがある。

彼は、筆者の名をよく記憶していて、一度会いたいのと思っていた―をのつけの言葉に、しゃべる、しゃべる。現代川柳論をタテからヨコまで一瀉千里ととつとつと論じぬ。

玉ネギの薄皮を剥いだようなぬめぬめした青い顔には、ささえのような大きい補聴器が両耳にへばりついている。一種の妖気漂った貌だ。その上に止処もない饒舌である。それにへきえきして早々に引き揚げた。生前の彼と

会ったのは、あとにも先にもこの一回きりであつた。

彼の句集は『草刈蒼之助集』(私版・短詩型文学全集38(八幡船社・昭和48年刊)と『色即色』(風発行所・昭和55年刊)の二冊だけで、その巻末の略歴をそのまま書いておく。

大正二年一・二生れ。十三歳に母を喪つ。

爾來五年、生死彷徨の病癖あり。父の看護を受く。文学の放浪始まる。姉の狂死・弟の出奔自滅・父の爆死等、肉親の壊滅続く。放蕩無頼の青年期を経て三十歳、今井鴨平の知遇を得、短詩型への関心はじめてわく。その主宰誌『無形像』に作品を発表。以後、清水汪夕と『創天』、『腕』を占拠して川柳模索の一時期を捉う。五十歳、畏友河野春三にめぐりあい、『馬』への寄稿を契機に、傾倒融合して今日に至るも、歳月を病苦と酔溺に埋めて、作品活動極めて薄きを愧じる。

鴨平らの話では、彼の生家は岐阜市内でも知られた富裕な機織業「丸房」の長男で、結構なお坊ちゃん育ちであつたが、肺患で死亡した母親の血をひき、彼も肺病で病臥し、十八歳ごろから病床でなじみ、『文章倶楽部』等に散文を投稿したり、西条八十の詩誌『草の丘』へ詩を送つたりしていた。

その頃の彼について花田俊典の『川柳サーカス』14号草刈蒼之助追悼号を以下要約。

「叛く血の鼻の穴までこみあげる
洗面器この血は母も喀きし血か
食い殺したは何 唇の血漉ぎけり

こうして文学熱は昂じるばかりで、二十歳の頃に親の金をこっそり持ち出し、文学仲間と小説主体の同人誌『文学新人』を発刊。同時に「改造」へ百枚前後の作品を応募して予選通過。『文芸首都』にも投稿して、編集顧問の広津和郎からも期待されたという。

しかし、こんなことで家庭は姉弟の相次ぐ死によって惨状を呈し、その暗闇の中で父とも対立し、睡眠薬自殺を図り、結局死に切れず勘当されてしまい、家を追われた彼は、ついに自暴自棄となり、酒と女と賭博に溺れ、バクチのもつれから、一年ほど他国を放浪する破目に陥り、文学どころではなくなった。

賭博のはてお尋ね者に名を連ね

風呂敷を抱え無明の橋わたる

心身ともに荒廃しつくした彼に、やがて大きな転機が訪れた。それは現代川柳作家連盟（昭和32創立）の委員長をつとめた今井鴨平との出会いであった。

彼はその出会いについて鴨平主宰の『川柳現代』に「不死身の詩鬼、鴨平の妖氣にうた

れた」と述懐している。この頃に結婚もしたことで、鴨平との親交を通じて、次第に現代川柳の世界へのめり込んでいった。年来の不眠症や、やくざ世界の執拗な恐怖性から、彼は鴨平の根氣づよい無言の励ましに動かされ、川柳とのかかわりがつづいていった。

昭和39年2月、その「不死身の詩鬼」鴨平が頓死した。彼はひそかにここが潮時だと、軽蔑していたはずの川柳との訣別を誓った。

しかし、この鴨平の葬儀に偶然、隣り合ったのが河野春三であった。

「まるつきり陽気と縁のない男、春三は甚だ僕に酷似していて、その人間的な弱点や欠陥を含めて、その小さな五体に満載した人間臭あふれる人間を発見して、急速に意気投合していった。」（川柳現代）

莫迦と違うのか俺と歩けり

これに対し春三も「色即色」にこう書く。

「現実の蒼之助はこよなき善人である。何の私心もない。それ故、一寸した他人の親切にも真心から応えて踊る。そしてすぐだまされる。このような繰り返しの反応から、彼独自の嫌人性が根を生やし、孤独の闇に彷徨していく。今はもう誰一人信用せぬ一匹狼として、自ら自宅の三方本棚に囲まれた四畳半のベッドに横臥して孤独の鬼となり、誰も寄せ

つけない。

彼は若い頃からの肺疾は不治の病であるし、眼はレンズのようで、難聴は補聴器をかけてもききとれない。彼の孤独なその生活は生きていること自体が地獄だ」

火を噴いて死んでみせたい蝸牛

痰にまみれていつまで生きる蝸牛

ベッド浮かべて海の広さへ帰ろかな

「草刈蒼之助は、いわゆる川柳界の外にいた。結社の大会などには批判的で顔を出したことがない。長年病み伏していたこと、ひどい眼疾、極度の不眠、その上食事よりアルコールでは外出できる日常生活ではなかった」

（『川柳サーカス』13号・石田柊馬）

彼の本名は下条房一、筆名を草刈蒼之助と考えたのは、「蒼空の下で草刈る鎌の音」という十七字が自然に浮かんだので、そうつけた由。平成四年八月九日、肺患の身をアル中で浸して昇天した。享年八十歳。

彼の死に対し、川柳界では「草刈蒼之助追悼号」を出し、その13・14号で心からの悼文で埋めたのは石田柊馬と松本仁の二人誌『川柳サーカス』だけであった。遺句

透明に舞うのはアホウの風車

冥界はどんな模様だ赤トンボ

▼次号は「広江天痴人」

柳籠裏三篇研究 (二十八丁)

七久保博・岩田秀行・紀内恒久

西原 亮・瀬川良夫・青木迷朗

佐藤要人・八木敬一

鈴木倉之助 故岡田 甫

373 生酔ともに百巻人り置いてにげ 石斧

岩田「辞彙」(ひやくひとり)の項に、本句を揚げ、「不明の語」とするも、正月、百人一首の歌歌留多であろう。つまり、歌留多の場に、ぐでんぐでんに酔った礼者が入って来たので、女子供はカルタを置いて逃げ去ったのである。かるた(百人)＋生酔(一人)＝百一人となる。

生酔に百人置いてみんな逃げ

安六仁一

屠蘇の生酔百人を相手取り

一〇九一九

西原「賛」ご明解。「川柳年中行事」に、

逃げたあと生酔共に百一人り 天八・八・一五
なる句も見える。

鈴木・岡田「岩田さん」ご明解。

374 たばこやの新米雨を吹いて居る 狸声

岩田「江戸川柳辞典」に「刻煙草に霧を吹き目方をふやす」と註する。その文献を見つけたことは出来なかったが、

たはこやハ目をむき出してきりをふき

一六三

からして、そういうことであろうと考えられる。

「新米」は現今の用例どおり「新参者」である。新参者だから、こまかく湿らぬ程度に

「霧をふく」ことができず、大きな水粒を吹いてしまふ。それを「雨を吹く」と表現したところがミソ。

西原「賛」「霧を吹いて目方をふやす」のは

どうか。「塵塚談」や「嬉遊笑覧」に「多葉粉刻みやう」が出ているが、その時の刻みやすすくするための霧ではないか。

夕立を吹いてちんこにしかれる

安六信四

青木「礎賛」。「霧を吹く」のは、西原氏説の如く刻みやすすくするため。

佐藤「西原・青木説がよいと思う。刻み煙草に霧を吹くのではなく、干してからからになった煙草の葉に霧を吹いて庭に寝せるのである。こうしておいて、ちんこ切りに切らせるのである。霧を吹いてある程度の湿気を与えないと、粉々になって、薄切りにできない。

主題句は、新米の雇い人に霧吹きをやらせたところが、その加減が分からず、煙草の葉をぐつしより濡らしてしまった、つまり「雨を吹いた」と洒落て表現した句である。西原さんのあげた例句も大体同様の句である。

鈴木「西原・佐藤両氏が正しい。」

岡田「賛」。

375 さげ切の跡でぐふたらべへを買い 石斧

岩田「薄雲。伊達綱宗は高尾つるし斬りのあと薄雲に通ったという。こちらは高尾と違つ

て綱宗の意のままになったのである。

二度目には薄雲といふぐにや女郎

天五智 5

うす雲は当世高屋古風也

二四 22

「ぐふたらべへ」は「ぐうたら兵衛」で、

しっかりしていない人をのしる言葉である。

男だけでなく、女に対しても用いた。

西原〓賛。

薄雲で少しは晴れたお胸なり

四一 6

鈴木・岡田〓賛。

376 どこでかりても壺丁は同じ傘

石斧

岩田〓越後屋の傘。

一町ハさせはせ傘に、つてる

二一 17

一町でみんなおんなじ傘を貸

第一 42

駿河町一町は皆越後屋であつた。

八木〓賛。駿河町は一丁全部が越後屋で占めていたようだ。間口がえらく広い店であつたから、店の何ヶ所かで傘を貸したのであろう。それを「どこでかりても」といったのであろう。

鈴木〓賛。ご存じのように越後屋は駿河町の通りをはさみ、本店と向店とがありましたから、町内、「どこでかりても」同じ傘。八木さんのお説のとおり。

岡田〓同。

377 富士ハあつち吉原ハこつちがよし 石斧

岩田〓「富士」は江戸よりも駿河がよく、

「吉原」は駿河よりも江戸がよいというのである。

江戸の富士は、奥山六郷邸前にあり（限定せずに、諸所にある富士を指すとした方がよい）、駿河の富士は勿論「三國」の富士の山である。また吉原は駿河にもあるが、江戸の吉原は絢爛豪華な文化の中核、かの遊廓の吉原である。

ふじとよし原ハ江戸でも近所也 二〇 12

江戸の富士よし原宿クへすべりをち

二三 10

紀内〓賛。ただし、江戸の富士と限定した方がよい。江戸と駿河、あつちとこつちである。

西原〓賛。同じ「吉原」でも、富士山を見るにはあちらの、そして、吉原はやつぱりこつち（江戸遊里）がよい。

鈴木・岡田〓賛。

378 智恵が出てお袋を先ツ手なつける 雅情

岩田〓遊ぶことも遊びたいし、さりとはまた勘当をされたくもないとなれば、これをつ

まく立ち回る法を自然と身につけるようになる。それにはまず母親に取り入っておくこと。そうすれば、金の工面がついて、親父へのとりなしもつまくできるというものである。

いかなることがあろうとも決してうらぎることのない母親の愛の有難さに気づくのは、親が亡くなってからであらうか。ここはまずドラ息子ばち当りの場というところである。

母おやハもつたないがだましよい 初 36

御袋のかたなどむすこもむやつさ 傍一 46

青木〓賛。「智恵が出て」は遊び慣れて来て身についた悪智恵を言っているのであろう。

この程度ならば親父の癪癪玉は破裂しないだろうが、苦虫噛み潰したような顔が見えるようだ。

八木〓賛。青木説のニュアンス。吉原通いのドラ息子のような気がする。

鈴木・岡田〓同。

大阪川柳の会 2月2日（金）午後5時、

サンケイビル3F3222号室。宿題・ささや

く〓選者当日発表▽決め手〓亀山緑▽繋ぐ〓

阿萬萬の▽計算〓磯野いさむ（各題2句）。

午後6時締切、会費500円。

秀句鑑賞

同人吟 西田 柳宏子

—1月号から

信号機の真つ赤を今日も信じよう

木村 富美子

大阪人は特に交通信号に性急です。作者の「青を信じよう」とせず、「赤を信じよう」と詠んだ所にひかれます。前掲の句に続いて心に沁みた句です。

癌のままで生きていいのよねえあなた

千葉 風樹

ドキッとさせられ、夫婦愛の筆舌には表現できぬ麗しさと言うか、心打つ秀句と思います。何ら多言を要する所ではなさそうです。心情を思い、一日でも永く元気に過して頂くことを心から祈ります。

主義主張あるからカニも横にはう

川崎 ひかり

思わず作者の観察に驚きました。カニは横に進むものと決めつけていたが、カニの主義主張を認める作者は立派だと思えます。

親の背を見ずにテレビを見て育ち

竹治 ちかし

痛烈な皮肉、批判に喝采を贈ります。昔の子育ての是非、可否は別にして現在社会問題となっている非行、いじめ等の青少年問題も恐らく刺戟の強いテレビの影響が多く、若い親たちも、どちらかと言えばテレビ見て育った世代と思われます。

激動の平成七年（乙亥）一九九五年も強い寒波のうちに終りを告げようとしている十二月も二十日を過ぎたころ、この秀句鑑賞（新春二月号掲載）を感慨深く書いています。すでに新年号の執筆も触れているかとも思いますが、時期的に私にもお許しを頂いて懐旧の弁を述べさせて頂きます。

年頭その激しさに日本中を驚かせた阪神淡路大震災に幕を開け、邪教オウム真理教の地下鉄サリン事件を含む数年前からの数々の誘拐・拉致・監禁から殺人が次々と発覚し、さては麻原尊師とかのボア指令等々、遂に年末になって宗教法人解散命令になり、結末がどうなることか……

また、東京・大阪のタレント知事誕生、ハイジャック等や豪雨禍と本当に荒れた年、締めくくりにセアカゴケグモの毒グモ侵入が愛嬌を添えたようです。

私たち川柳塔には何と言っても前主幹西尾栗名譽主幹の逝去は本当に悲しい出来事と言えます。あとを享けた橘高薫風主幹以下

常任理事、役員諸氏並びに同人の皆様方の絶大なご支援の下に、川柳塔まつりが華やかに举行されたことは、明るい話題を提供したと言えましょう。

また、十一月四日、高野山の川柳塔碑に栗名譽主幹以下十一名の物故者合祀も無事終了したことは、担当責任者としてご協力に感謝します。

本年も同人・誌友の皆様方のご健勝ご健吟を祈り、いっそうのご支援をお願いします。

前置きが長くなりましたが鑑賞に移ります。
自転車で転び天から叱られる

二宗 吟平

思わず頭をガンと叩かれた思いでこの句をまず拾いました。早くも二年を経過しましたが、自転車で転倒して大腿骨複雑骨折で四か月入院、今なお金属を埋めたままでリハビリに精出し、どうやら日常生活には杖はついてるものの、元気に各地の句会にも出席するまでになりました。吟平さんの方は如何でしょうか。

質素倭約ケチでなかったおかあさん

堀 良江

これも親の背を見て育つ一面をえぐっていると思います。この句の場合、子どもに母の質素がケチに見えていたが、いつか子どももこのも含めてボンと気前よくお金を出したお母さんに感動をもつて「吝でなかったお母さん」と言わしめた……いい句ですね。

使途不明 億と家計簿つけてみる

福本 英子

くすぐりの効いたユーモラスな句。恐らく川柳でもやっていなければ、こんなジョークは思いつかないでしょう。ちよつと新聞記事になる横領や使い込みから贈収賄、女子職員でさへ億の金です。えー！うちの使途不明金三円―三億と書いておこう……判るわから。

信号の向う側でも欠伸して

田中 叶

長い踏切信号……電車は未だ見えない。信号機は鳴り続け遮断機は降りたまま、慣れた地元の人々は急きもせずじつと待っています。一人が大きな欠伸をするのを見ていた向う側にいた一人が、釣り込まれたように欠伸を移されていきます。面白い句と言えましょう。雑踏の都会から見れば実のどかな写生句と言えましょう。のんびりしたユーモラスな句。

出る杭は打たれ上手になっている

川島 颯云児

実感句と言え失礼かも知れないが、川柳塔常任理事会で総務部長の難職を担当している颯云児氏にして生れた句と言えましょう。傍目には出しやばつていっているように見えますが、出しやばらねばできないのが総務部長の仕事。だんだん打たれ上手な頼りがいある総務部長になっています。

地球には核より怖い人が居る

中山 雅城

地球上より核絶滅を叫ぶ人類の願いを無視して反対を押し切り、というより無視しての核実験を強行する核保有国の横暴には肚の底から憤りを禁じ得ません。そうした実験強行するの人も、核自体を作るの人も、本当に怖いのは人そのものではないでしょうか。

七輪で焼くから出来るサンマの詩

池永 正雄

最近では電気・ガスの調理器の普及で、サンマも煙も出さず、油もはねず、きれいに焼いてはくれますが、やはりサンマは七輪に炭火で団扇でバタバタ煽いで、ジュージュー油が焼け、煙が漂うところに季節感もあり、私たちにも懐かしさを覚えます。そこにサンマの詩があると嬉しい句になりました。

賞めてから叱るとちゃんと聞いてくれ

江口 度

今の子どもはただ叱っても納得しなけれはなかなか言うことはきかず、時には食ってかかることさえある。ここで作者の賞めてから叱るは仲々微妙な言い回しですが、その辺のことをうまく言っていると思います。賞めると言うよりも、行為そのものをやった動機、あるいは考え方は認めてやり、それから悪い点を叱れば理解を示すのが今の子どもです。タコ焼を食べて名士も笑つて

清水 利武

先のAPECでノック知事、盛んにタコ焼をクリントン大統領に食べてもらいたかったと大統領の不参加を残念がっていました、やはりタコ焼に気取らぬ大阪の庶民の味があると言えましょう。

さわがしいだから大阪好きなんだ

榎本 露児

何によらずワイワイ気取らぬ浪速っ子、口は悪いが人情深い河内弁、だから私たちはみな「好きやねん大阪」「大阪咲かせOSAKA ASAKASO」を合言葉に、二十一世紀を目指しています。私たちが「好きやねん川柳塔」を合言葉に、さらに明るく楽しい川柳塔に発展するようご協力をお願いします。

水煙抄

西田柳宏子選

成田市 斎藤房子

寝屋川市 後藤黎之助

さよならは木の芽もわらう春がいい
一億のひとりと添うて半世紀

小春日和 妻とままごとしています

好いて好かれて夢が舵とる夫婦舟

雪のんのん亡母から届くメッセージ

富田林市 藤田泰子

初みくじ末広がりという数字

山越えた数だけものを識っている

噂より性善説を信じてる

晩秋の旅 思い出はあたたかい

友達に男性ばかり家の孫

伊丹市 樫谷郁子

痛む足 杖が一番知っている

書と別れ琴とも別れ今ひとり

りハビリで昔を偲ぶ人と会う

年賀欠礼 枯葉のように計が届く

散る落ち葉 詩になりそうな音で燃え

人の世とあきらめ犬がついてくる

大漁も新聞だけの台所

国際化 毒も薬も海渡る

紅葉を知らぬ木の葉が舞い落ちる

生き延びた手術のあとをなでてやる

増長天に許し給えと鬼庇う

しぶちに相続税の忠実さ

竹人形 水上勉の城まもる

飛行雲乗って行きたい亡夫の国

四次元に嵯峨野たそがれ柿一つ

高槻市 芦田静江

増改築まだまだ生きて行くつもり

過疎の地に大声が飛ぶ農繁期

もう十年生きるつもりの日記買う

待つ母がいるから足どり軽くなる

だあれもが貰う賞状だけもらい

兵庫県 安達厚

西宮市 古谷 ひろ子

夜更けの電話ぶきたの詫が長すぎる

肉身の情に溺れて長い冬

たまに啖阿で子とのキズナを締めなおす

三役を降りる長生きしたいから

忘れるために暗記しているわが暮し

島根県 菅田 かつ子

香水を閉めたまんまで年が明け

銀杏がちよこんと氣どった茶わんむし

白いバラ咲いているのに放つとかれ

梅活けた小さな部屋に春がくる

輪に入れてもらってうれしくリスマス

寝屋川市 宮崎 菜月

山茶花が咲き満ち冬日あたたかい

大観の生生流転に教えられ

帯筋はしかと地震に耐える家

縄跳びに打たれ蕾を持つてかれ

いつまでも心の風邪が治らない

八尾市 大内 朝子

春の絵を夢に描いて種をまく

信頼の絆 本音をぶつつける

水面下恥じらう恋が渦をまく

人生のラストへ悔いを残すまい

今だから言える話に艶の花

今治市 渡辺 南奉

病氣した時に夫婦だなど思う

寝る起きる食べる満足しています

時は金なのに歯医者で待たされる

無知だから気楽 番茶でこと足りる

新年の計立てないと気がすまぬ

米子市 足立 由美子

出直しの窓をきれいに拭いておく

いつもとは違った顔で逢いに行く

お辞儀する形で母が老いて行く

蓋あけて貝は時々世をのぞく

一日の終りに今日を拭いておく

寝屋川市 太田 藍子

黙っていたら本当に後回し

金持ちの話 時々泥だらけ

京あたりから薄墨色の冬に会う

スキーから荷物も娘も着払い

みかん箱 行ったり来たり宅急便

兵庫県 円増 純子

とつとつと話す言葉を信じよう

あからさま気持ぶつける友と居る

土に親しむ伴せがあり鉄洗う

土産物あさって景色眼に入らず

土産より温い言葉を待っている

今治市 塩路 よしみ

絵画かともごう尼僧が落ち葉掃く
握手したぬくさ信じていいですか
生きざまを見たく手頃な木に登る
善人で答がすぐに顔に出る
未来への夢をいだいて葱坊主

八尾市 村上 剛 治

疲れたらちよつと休んでまた歩く
今やっておこう明日はきつと雨
何事も無かつたように散る枯葉
人間の都合で松をねじまげる
すぐ本音吐いて世間を狭くする

島根県 森 茂 美

母看取る五度目の冬へ覚悟して
用意した別れの言葉いえぬまま
ポケットの中で賽銭値踏みする
平和憲法その原点を問いなおす
占領がまだ続いてる基地の島

十和田市 阿部 喜久江

耳だこができるほど愚痴を聞かせられ
大自然好きで選んだ山仕事
かばい合い二人でのぼる古希の坂
お若いと言われて心弾んでる
健康で身辺整理できる倅

寝屋川市 酒井 勇太朗

予定欄ぎつしり詰まる果報者
札を欠くヤングが親となる怖さ
快楽を追って破滅の白い粉
宮仕え終って青春取り戻す
青春の二文字 初老の血がたぎる

和歌山県 中 後 清 史

輪を描いて翔べるとんびに自負がある
裏がありそうな話で旨すぎる
聞いている振りだけしてる膝小僧
知っている振りが迷路で行き詰まる
叱られた孫から受けるとばっちり

和歌山市 津村 武 春

おもちゃ買う孫の粘りに負かされる
この火種 灰になるまで消しはせぬ
人生に我慢の壁がいくつある
月賦でも下駄をはかせて儲けてる
検討はするが実行見送られ

河内長野市 柏 本 靖 子

いろいろな風が私を攻めにくる
プレゼント可愛い指と約束す
良い知恵を出し合いながら三世代
嫁がせて夫婦の会話弾まない
包丁のリズム確かな母の朝

河内長野市 大西文次

夕焼と明日の約束して帰る

喧嘩する相手がいると羨まれ

踏台にのれば宣誓したくなる

何のかの言うても家で食う茶漬

鳥取県 山内芳江

何もかも隠さず吐いて楽になり

夫婦独楽軽くぶつかり合う刺激

支度しているとも知らぬ梯子酒

旅立ちの老母へうつすら紅を引く

和歌山県 杉山精子

甲乙は皆つけがたし菊花展

善意まだある日本の丸い風

一期一会 歴史の中の風になる

有終を飾ろう今を生き抜いて

大阪府 一本勇太

建て前と本音ひそかに研ぐ矢尻

放流の雑魚は自由と思ひ込み

妻の火が飛ぶ標的の花名刺

ジंकスを語る古老の目に負ける

和歌山県 古久保和子

しまい風呂 首の骨からまず弛め

貧乏神来そう障子の破れ貼る

まな板のくぼみに染みた母の味

底なしの欲だと思ふ神頼み

八尾市 平川幸枝

陽に焼けた巫女は祭りの顔で舞い

活発な娘は父さんのご意見番

暖かい涙もあつた年の暮れ

なみはやへ熱い視線を注いでる (八尾国体)

米子市 林風子

駆り立てるものあり海は冬怒濤

迷彩服で化けても神様には見える

南天の実はたわわなり再挑戦

富貴ともいう寒牡丹いけ終る

和歌山県 太田木管

髪の毛と共に中味も薄くなり

居眠りも上手下手ある講演会

犬の餌啄む雀見てるボチ

依怙蟲肩 神ほどひどいものはない

寝屋川市 籠島恵子

逃げ道にえらんだ森でまた迷う

もう悔いはないと唇かんでいる

これが噂のクロワッサンの列につく

空手二段いつも不在の用心棒

秋田県 湊修水

長生きの国 長生きをもてあまし

年金で屠蘇を祝えるありがたさ

気前よく憂さを晴らしたカラ財布

一億の出たところで買うジャンボくじ

寝屋川市 森 茜

いざという時 善人は目を伏せる
あろうことかなわたくしことが洩れてゐる
独り旅 毀譽褒貶は捨てたはず
結論を急ぐと甘くないぜんざい

新潟県 高 野 不 二

失敗談ばかり話していて好かれ
酒税しか納めていない年になり
契約金俺の一生ほど稼ぎ
信用を削って今日も生きている

和歌山市 木 村 親 路

旅立ちの朝の植木へ水をやる
風雪に耐えて渋柿甘くなり
出来ぬことばかりがたまる目安箱
渋滞へ翼が欲しい救急車

熊本県 高 野 宵 草

手書きから先に見てゆく年賀状
退院の予定が延びた窓に拠る
食後とは夫婦でくすり飲む時間
テレビだけ勝手に喋る夜の孤独

大阪市 中 田 あい子

一人居も小豆粥たく小正月
すぐれたる頭脳持つ子が親泣かせ
あやふやな答弁しかと身を守る
亥の年は地震オウムに蜘蛛もんじゅ

大阪府 澤 田 和 重

和解してからの笑いが弾みだす
謙遜の言葉うのみにされている
グーばかりだして出世に遠くいる
爆笑の余韻がこころ温める

尼崎市 野 瀬 昌 子

こつこつと築き動ぜぬ母の席
一人住む心閉ざした訳でない
責任のない噂話に花咲かす
子を叱る逃げ口一つ開けておき

尼崎市 的 場 十四郎

病院へ通う日課でいて達者
残り火のあるうち立てる旅プラン
一言が過ぎて今夜も責められる
乙女座の笑い上手を嫁にする

富田林市 欄 智 久

十二月 夜逃げのように移転する
道標に犬は手頃とマーキング
ありがたい法話寝ながら聞くラジオ
男なら二の足踏むなと妻の激

今治市 中 村 好 恵

方円の器へ謀反考える
呑みこみが良すぎて話聞きもらす
生涯をポーンナスのない小商い
声高に受賞を告げる電話口

横浜市 保田絹子

同じ過去持った論しが身にこたえ
済みません言う眼は睨みかえして
赤ちゃんに戻った祖母さまいとおしい
苛立ちを笑いで誤魔化すもの忘れ

寝屋川市 瀧本八十八

踏む土が減っていじめの子が増える
濡れ落葉ここに小さなわが歴史
大田知事 筋金入りのよき頑固
豊作へ祈りが届き過ぎました

兵庫県 森脇和子

励ましの一声沁みる車椅子
モーニングカップ素的な恋をする
輪の中ではずんできます生きてます
まさかとは思うがカルテにある汚点

静岡県 中西雅

女盛りとつくに過ぎて悔い残す
うっかりをとばけ上手でうまく逃げ
淋しさに話相手のほしい宵
子離れの出来ぬ母です娘にすぎり

富田林市 山原昭水

さっそうと行けば北風よけてくれ
駅前の居酒屋 妻の顔がきく
愛の鞭いまは判って感謝する
孫誕生 南天 万両 実が赤い

高槻市 小林一閑

長生きの代りに日々を大切に
転院の望み叶えて下さいな
三つ目の眼鏡はどこへ隠れたか
まさかまさか自分が癌になろうとは

日立市 加藤権悟

五十年 残留孤児と呼ぶ不幸
這い回る花野で母は虹に逢う
アルバムを開くと昭和史が疼く
ひたすらにたえた昭和の芋のつる

岡山県 福原悦子

寄り添うて軽い寝息という安堵
降る雨に孫と童話を暖める
隅に居る意見も数のうちなんだ
影だけはいつも私を裏切らぬ

鳥取市 植田一京

神様に今年こそはと無理を言う
矢印は危険な方を向きたがり
逆光に裏切りの陰出てしまふ
有難い競争できる友がいる

尼崎市 尾宮弘治

さりげなくジーンズ老いに席ゆずる
毀誉褒貶 気にせぬ母でお世話好き
指切りをしたのに川が渡れない
久方に叱られに行く母の墓

兵庫県 西井つや子

古希過ぎてなお忘れない身嗜み

来年の暦へ黒丸氣が重い

夢抱いて世間を広く泳いでる

荒れた掌に苦勞の歴史が載っている

岡山県 国米きくゑ

妻の掌の上で泳いでいる平和

野菊ほどの倅でいい細い肩

古里の自然に抱かれ蘇生する

喝采のないまま峠下りはじめ

島根県 松本聖子

空耳へ大きな返事してしまい

ドクターの言葉の裏へ氣がまわり

やりくりも下手ですけんかも苦手です

七十でようやく角がとれはじめ

和歌山県 久保ふみえ

想い出も中に織りませ生きて行く

郷愁を誘うツバメの巢を望め

今の子はどこで遊んでいるのやら

故里で母の想い出持ち帰り

八尾市 村上ミツ子

もらい物 値段をつけてみたくなる

お互いのごめんなさいが握手する

たとえ話に本音をちよっと織り交ぜる

無記名でも本音はやはり隠しとく

河内長野市 水谷笙子

旅の朝 夫を呼ぶ間の冬の虹

うき晴らし蹴る石もないネオン街

私には私の歩幅 余生踏み

ムルロアへロタンは首をよう上げず

兵庫県 高見末野

老いの身を背筋伸ばして生きてゆく

散歩でもついつい走る癖が出る

美しく生きる余生を行く旅路

ふり向けば追って来そうな寒い空

和歌山県 吉村さち子

釘一本抜いて迷路が見えてくる

悲しみも怒りも生きている証

帳尻の合う人生と信じ切る

結論を急いで心見抜かれる

米子市 小塩智加恵

職業は無しより主婦と書く自信

孫娘 私に似てゐるこわくなる

地球儀の日本にレンズあててみる

夫婦仲 孫の話で世間なみ

岡山市 藤原一平

嘘を盛る皿を一枚また増やす

六人も生んで農継ぐ子がいらない

矢印が少なくなつた父の地図

胃カメラに腹の黒さも写される

尼崎市 森 安 夢之助

叩かれて踏まれて明日の灯をともし
割り勘の未収のメモがある手帳

腹の底から笑うた日はよく眠る
点滴がポトリ木枯らし聞きながら

八尾市 神 原 まさと

息抜きに市場を回るとはかなし

誕生日祝いにジャコと万歩計

低金利 粗品色々つけてくれ

許してるけれど怒った顔でいる

愛媛県 中 居 善 信

雑魚は雑魚なりの友達持っている

雑魚だからひとの傷みがよく判る

カナリアが籠の広さを疑わぬ

窓際にまだプライドが棄て切れぬ

鳥取市 藤 ふうこ

自分史に花を一輪添えました

背を向けた姿で心通じあう

余命表今はすんなり領ける

地酒うましわが故郷に酔いつぶれ

今治市 越 智 青 園

正月をどこへ逃げようパスポート

元旦の小言アクセル加減する

添削をされて私が消えて行く

元旦の計をくすくす笑う鬼

松江市 松 本 知恵子

山低く能登はやさしい顔をする
冬に来てあんずは蕾 犀星碑

借景のやま雪になり父母想う
星の数増えて淋しい冬の天

東大阪市 谷 口 義

肩の力抜くと前が見えてくる

今日一日なんとかなるさ花を買う

金借りて大きな話して帰り

三時の茶 妻の帰りを待っている

静岡市 大 村 正 雄

学校のいじめ気になる子の寝言

手打蕎麦 問わず語りの村自慢

山雀に芸仕込んでる日向縁

移り住み郷にしたがうお正月

高知県 細 木 子 龍

沈黙のファイルが語る舞台裏

小刻みに春へ燃えてる千枚田

反省の割に酒焼けたお顔

朝早く動く女の特売日

鳥取市 山 口 しげる

パソコンへ脳細胞が後ろ向く

竹の子で暮らした末の着道楽

父に似た器で蓋がしまらない

聞いただけ重荷になってくる内緒

大山市 早川盛夫

目と耳と口ごまかして生きている
似なくてもいいところが似て親子なり
イヤリング深くこだわる人でなし

岡山市 中嶋千恵子

金婚へ心の鍵は開けたまま
いつか咲くその日へ耐えたこぼれ種
南無大師となえ我欲の遍路旅

羽曳野市 芦田絢子

無理のない歩幅やさしい風に会う

齒科予約 一週間の早いこと

坂のある道を選んだ古希の自負

島根県 児玉幸子

初雪へ今年は雪が多いかな
水鳥が宍道湖へ冬運び来る
長い夜 昔話で孫と寝る

鳥取市 津村静枝

情報の海に溺れてよく転び
何事も無かったように母の海
来る年を胸ふくらまし大掃除

熊本県 岩切康子

頂点を目指して動く蝸牛

虹色の恋ははかなく消えました

時どきは私の悪魔がサイン出す

広島県 森川抜智
スケッチを忘れて酒のむ紅葉谷
酒のんで油絵描いて昼寝する
一合のお酒でこんなに上機嫌

出雲市 浜圭三

私の余生を刻むこの時計
薬湯を飲んで今夜は忘年会
近頃は僕に忠告多くなる

和歌山県 村中悦男

役員にもれた人から長電話
聞き上手相手段々熱をおび
日と曜日忘れて野良に立つ夫婦

河内長野市 印藤智子

ぼてぼて茶 話の種に飲んでみる
どきどきとわくわく連れて一人旅
膝枕 夫の重みに堪えられず

神戸市 向井泰子

六甲おろしに耐えて立つ桜苗
漫画本仮キオスクでよく売れる
お雑煮が東と西の夫婦仲

和歌山県 上岡正直

長い列 先頭の蟻どこにいる
ヒヤカシの客も拒まぬ自動ドア
並走のマラソン選手チャンス待つ

藤井寺市

楠

昭子

和歌山市

木村初子

鮮やかに負けてにつこりするゆとり
繁華街背伸びしている青リンド
しなやかな女の芯は折れにくい

唐津市

山門

幸夫

羽曳野市

西村りつえ

三日月が丸くなる頃母が来る

みかんさし自由のメジロ飼っている

ポチ君は家族のランク知り尽し

今治市

村上

久美子

鳥取県

藤山弘子

妥協ぐせついて自分が見当らず

耳打ちは困る大きな声が好き

ヒトよりも猿が人間臭くなる

倉吉市

山本

玲子

羽曳野市

徳山みつこ

口下手をえくばでカバーしています

リハビリと知らず手を貸すおせっかい

へそくりの羽根でどこまで飛べるやら

堺市

志田

千代

摂津市

井上源一

今もまだ焼けばつくいを抱いている

すみずみは見えないふりして渡らねば

亡き姑へわび状の菊絶やさない

柏市

上鈴木

春枝

尼崎市

河津正治

年賀状届く去年の良い出会い

消しゴムで消せる程度の恥をかく

本心をチラチラ見せているジョーク

燃え尽きてしまわぬように火種抱く

顔よりもここに刻む老いのしわ

逆境に耐えて鍛えた粘り腰

腹よりも皿がたまった出石そば

福耳は今にきつとと運を待ち

誤解あり思いやりあり嫁姑

二歳児が母の真似して飾り出す

年金で着飾りそととショッピン

昔から正直に生き無位無冠

今日も行く病父喜んでくれるから

家内安全至難となった神の鈴

戦も恋も峠の千年杉は見た

独り身のずばら便利に置き炬燵

言い訳が浮かんだ夜の千鳥足

胃の中で酒に泳いでいるおでん

磯笛が岩場に憩う艶ばなし

蛇足だと断わる言葉核を衝く

捨て石の一つは父のポーズかも

阪南市 正 橋 正

納得の行くまで人間続けたい
割り切ればバリツと竹の悔いの無さ
強引にわが道を往く自負憐れ

札幌市 三 浦 強 一

居酒屋で友と十歳若くいる
居酒屋で無口の友がよう喋る
居酒屋で性善説を信じよう

鳥取市 近 藤 秋 星

枯れそうで枯れぬ老梅花を付け
何となくぬくい気がする冬の雨
大相撲 父をテレビが放さない

松江市 安 食 友 子

火の見櫓を憩の場所にしてる雪
いざさらば匂袋をぶん投げる
食い意地がいけしやあしやあと試食する

松江市 浦 辺 静 江

嫁の趣味じっくり読んでいる漫画
じっくりと考えたくて爪を切る
無駄話 今日も夕方やって来る

唐津市 岩 崎 實

こだわりの中で名人生きていし
自転車を押して師走の頬被り
少しずつ会得していく手の習い

大阪市 福 岡 雅 子

この押し葉遠いあの日の寺の庫裏
酢の物にするにはちよつと惜しい菊
菊花展子育てふつと交差する

羽曳野市 川 田 晋

カルチャーの日は念入りに髻を剃る
限界の呂律は妻が心得る
マラソンへ六十路に騒ぐ血が残る

尼崎市 軸 丸 勝 巳

大根引きよう出来ましたと穴も見せ
一泊で唄も覚えた箸袋
計算のない母さんに子は群れる

島根県 三 代 朝 子

暖かい布団くるまる今朝の冷え
四季の絵と人情が好き過疎の村
ささやかな粗品に添える走り書き

大阪市 鈴 木 トヨ子

背を伸ばせ論してくれる友が居る
磨きかけ一つでも光りたく励む
はばたけばまだ舞えそうな老いの羽根

堺市 桜 井 莊 次

故里の話欲しがる国訛り
行き過ぎて途方に暮れる早合点
旨そうな話に寝た子起される

砂川市 武田正美

冬將軍びゅうびゅう風と妥協する

思ひ出が私を責める夜の深さ

別居してから寝言多くなる

鳥取県 山本正光

極楽で酒買う金は貯めてある

病む妻にひと匙ずつの粥はこぶ

泣きに來た森で樹々から叱られる

河内長野市 妹背尽呂久

なるようになれと明日を突き放す

定年後自己取り戻す積極派

玉に傷 美人の背丈高過ぎる

島根県 今川三津江

おっちゃんに戻って町長たこ焼屋

もの忘れしなけりやばあちゃんらしくない

ユズ豊年 遠い亡夫の贈りもの

唐津市 浜本治幸

老いてなお生き甲斐夢を持ちつづけ

若者のUターン祭り盛り上げる

みぞれ降る静けさ冬の顔が好き

尼崎市 立谷勇次郎

吸い溜めをして乗り込んだ禁煙車

老妻もやはり女か長電話

コマーシャル トイレ行くには短すぎ

和歌山市 山根めぐみ

かたくなに心開かぬ磯さざえ

オフレコの話がもれる風通し

酔もずくに磯のかおりと波の味

鳥取県 橋本多哥由

あとがない命だ派手に振る舞うか

流木も浄土めざしているらしい

日の丸の旗も平和にゆく道だ

富田林市 大橋鐘造

海鳴りに心の底をのぞかれる

三匹の猿と手を組む保身術

忘年会 本音を吐きに二次会へ

泉佐野市 稲葉洋

マスコミの取材心理が垣根越す

求人に中高年という関所

出世運無い者同士氣勢あけ

大阪市 川内叭笑

クツワ虫 夫婦ばなしの邪魔をする

基地なくせ核もなくせと泣く大地

民謡に明け民謡に暮れ行く民謡の旅

鳴門市 八木芳水

迷うならあなたの森で迷い抜く

だまされることにもなれてずるく生き

相づちを打つ浮世には借りも出来

八尾市 鷺 見 章

故郷をまた夢に見る丸木橋

着膨れて診察室の十二月

紫が好き竜胆が好き妻が好き

高槻市 江 原 秀 夫

箸紙が見事に並ぶお正月

仕事より趣味の賀状の温かさ

ほけたかな「あれ」ではことが通じない

島根県 岩 田 三 和

米俵積んで豊かに越冬記

かんろ煮で蜂の子うまい味保存

かなしみを通りすぎたらバカ話

今治市 野 村 清 美

路地裏に雨が忘れた水たまり

亡父さんが丹精こめた冬のバラ

年金の許す範囲の趣味をもつ

綾部市 藤 田 芳 郎

フルムーン阿吽の呼吸整えに

倍になる話に鬼が背をつつく

貸してからあいつと飲んだことがない

和歌山県 中 村 君 枝

通ぶって恥をかいてる舌の先

無関心などではおれぬ銃社会

愛情が溢れ子離れ出来ぬまま

八尾市 與 田 明

激怒した心の隙を狙われる

年寄りを犬が散歩に連れまわす

飽きもせず上達もせず老いの趣味

大阪市 川 原 章 久

今日一日ゆっくり生きてぬる目の湯

学校も知事もいじめの記事しきり

泣き笑いまた或る時は怒る日々

高知県 百 田 幸

祝宴の主役は奥で寝ています

くたびれて向かう鏡に亡母が居る

敬語には舌がもつれるわたしです

尼崎市 松 下 比 志

動かない妻のいない朝の空気

親父似で吾が道を行く頑固者

古びたがほころびもなく古希迎え

兵庫県 北 川 とみ子

一筋に逝く道照らす菩薩の灯

輪の中で捨てた言葉を拾ってみる

挨拶の途中で涙が邪魔をする

大阪市 三 浦 千津子

地獄まで堕ちる気のない恋終る

すかたんで回転木馬に乗ったまま

控え目な位置で優位に立っている

鳥取市 坂田 和歌子

宝塚市 黒台 伊佐武

神社から見下ろす海へ手を合わす

今日もまたお水供えて無理を言う

まあいい蓋で世間の波を避けてます

鳥取市 福永 ひかり

ドラフトの自信億をも袖にする

生真面目の視野目くじらを直ぐ立てる

どこ着くか分からぬ舟に乗っている

福岡市 井崎 ミサ子

笑い声出すと幸せ寄るようで

冴える月仰いで今日もしまい風呂

深入りはしない私は恐がり屋

鳥取市 岸本 宏章

過疎の村へタクシー連ね嫁が来る

福耳の俺が貧乏ばかりする

お隣の犬に見張りをしてもらう

鳥取市 岸本 孝子

テキなんぞごめんこうむり茶漬食う

つくろつていたのに友が本音吐く

目薬を落とす前から目を閉じる

倉吉市 高多 博丈

忘年会五つこなして年が明け

豊漁の鮭がハマチの餌にされ

いのししを待ち受けている牡丹鍋

憎しみも逢えばたわいもなく消える

七割を無駄と思えば気が楽だ

ときめきの文読みかえす菊の縁

大阪市 尾崎 黄紅

利用され利用している差に負けて

頼まれた無理を頼みに走る老い

美しいなあと聴こえるように言い

和泉市 横山 捷也

ひなたほこベンチと枯葉と老人と

泣き声に負けて寒空 孫の守り

朝焼けを電車の窓を額にして

青森県 西谷 鐵郎

佳句一句せめて一句の夢を追う

この道のほかに道なしけもの道

吹雪くとも妻のこの手を放すまじ

和泉市 中川 楓

ひと言の電話へ料理あたためる

ちぐはぐな返事へ妻の目が笑う

無理しないようにと便りしめくくる

岡山市 清水 金太郎

幸せは何時ものリズムで過す日々

働けば食えると言うが職が無い

薬局の主人は遠くの医者へ行き

兵庫県 玉田 三重
頼かむりこれも明治の生き残り

自信なく他人の機嫌を取りたがる
年の暮れ隣の犬はよく吠える

尼崎市 田 辺 鹿 太

名物に旨いものあり柿すだれ
生きている証 水虫痒くなる

なめらかな舌でポンポン嘘が出る

兵庫県 倉 垣 恵 美

今ここであんと叱るといいのだが

おみやげはいいよと言っただけのこと

洗うてもまた洗うても軍手なり

横浜市 清 水 潮 華

腰痛に湿布の後がかゆくなる

聞かれたい項目のないアンケート

年の数口ウソク乗らぬデコレーション

香川県 山 崎 はつ 恵

二三球見逃し待っているチャンス

人恋し温い手恋し亡母恋し

温めた椅子がくると横を向く

島根県 福 間 博 利

アンビシヤス私はわたしの棒グラフ

いい夢が見たくて今日も昼寝する

ジングルベル鳴れば湯豆腐欲しくなり

島根県 武 島 ちよえ
私の影がわたしを持てあまし

人柄の良さが裏目に出てしまい
瘦身の骨にこたえる向い風

東京都 清 原 悦 子

お返事に困って私も苦笑い
夕焼けがなぜか寂しい都会の陽

ファックスが里との距離を近くさせ

島根県 谷 岡 ふ み

木守柿残し鳥の思案顔

裏山の裸木風が筒抜ける

竹の雪 跳ねる強さを見ていたり

島根県 安 部 恵 美 子

母さんの笑顔はいつも温かい

湯煙に友とおしゃべり旅楽し

人情を出し合う温い義援金

唐津市 市 丸 晴 子

母さんの指に受難の冬が来る

冬の海に見果てぬ夢を捨てに行く

失語症の夫婦テレビがよくしゃべる

唐津市 宗 弘

六十になって童話にはっとする

孫来れば意外や妻の身の軽さ

今年また計画半ばの年が暮れ

十二月逢いたい人は皆元氣

神戸市 船津 とみ子

地震以後 家のありがたさが分かり

セーターを編む気になつてめがね拭く

富田林市 中井 アキ

紅一点お茶汲みばかりして居ます

誘われてやっぱ嬉しい女です

乳房より枯れ始めてる菊人形

鳥取市 山宮 愛恵

家たたむ辛さ笑顔で過疎を出る

家計簿へ明日の幸せやりくりし

昔話が明日のような老母と住む

米子市 木村 春枝

耳に蓋 噂の中をつつ走る

ご破算で仕切りなおしの春が来た

間魔帳わたしの場所は空いたまま

枚方市 森本 節子

靴の紐 結びかえれば力湧き

犬なだめながらえんえん立ち話

たとえれば柚子を忘れた茶碗むし

海南市 谷口 義男

大言壮語 独善過ぎる手前味噌

肩で風切った議員の逮捕劇

早起きし隣近所に気兼ねする

和歌山県 藤井 春子

頂点に立てば総てがかわり出す

腹立てた友の忠告生きてくる

ささやかな仕草 悦びあふれてる

鳥取市 杉本 孝男

いい話聞くと胃腸も笑いだす

道連れにするなら若い美女がよい

夢一つ男は後ろ振り向かぬ

愛媛県 安野 案山子

遠回りしてもいいから歩こうよ

リストラヘトーンを下げた労働歌

溜息を聞き飽きているショーケース

出雲市 川島 和歌子

白い紙 気の向くままに運ぶ筆

風呂上がり明日の予定を立ててみる

寒い夜ねぎらう嫁の健康茶

福岡県 本田 忠男

馬耳東風 噂はすきなようにさす

正直なところが似てきた孫育ち

節約の終りに派手な服を買う

和歌山県 福重 美子

本番に出せぬ力のじれったさ

寒気到来 風に負けないだけ着込み

発車ベル パンとコーヒー駆けてゆく

大阪市 池田 一男

リアリズム鏡に映る老いの皺

鳥取県 山本 崇

世渡りの下手は遺伝か親譲り

レントゲン胸の痛みは写せない

聞かなくてよいこと聞こえ嫌われる

冷たい手 炬燵の櫓握りしめ

尼崎市 中澤 向西

ワープロに慣れて夜なべが多くなる

愛の鞭ここで許せば水の泡

岡山市 山磨 行子

残り籤 引けば石鹼一つだけ

気がつけば還暦の視野せますぎる

ピンチ抜け自信が覗くVサイン

杵づかもまだまだ確かボランティア

尼崎市 長浜 澄子

埋められぬ淋しさ風に逆らつて

自分史のいやな所はみな忘れ

取るに足りぬ愛が私を眠らせぬ

年金の暮らし肩書きなど要らぬ

あつたことさえ忘れられてる古時計

食べすぎる今日は医院の休診日

倉吉市 田中 八太郎

観光に悪い天気がよく当る

仏像も欲があるのか手を受ける

アパートから通勤してる高級車

大人びて乱用するなり黙秘権

焼肉の遠慮が残る二ツ三ツ

ふところの都合で変る風の向き

兵庫県 大谷 幸次郎

残業が減つて土日をもて余す

夏の咳 冬まで続く保険証

小ねずみが肥った猫を愚弄する

生きている証の痛みそつと撫で

残業をボケットに入れ赤のれん

養殖のはまちを舌が信じこむ

松江市 佐野 木みえ

雪の中 沈丁花咲く庭の隅

一度だけ酔う母を見た目出度い日

電話口 娘に風邪を見破られ

疑いもせず点滴へ腕を出し

寒しじみ朝の御飯の待ち遠く

来し方を思えば老後夢のよう

羽曳野市 麻野 幽玄

岡山県 大石 あすなろ

いいムード消した隣の咳ばらい
待つことの美学知ってる花時計

正座した律義な膝が痛くなる

熊本県 大川 幸子

粗大ゴミ主導権は妻の手に

ゲートボールの味 肩書を捨ててから

ゆずられた席はやはりそんな齡

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

宣告をされて病氣の手記が生き

無理するな口ではやさしい父恐い

年の暮れ妻とて女ディナーショー

東京都 瀬戸 きん子

のぞみ一番 麦踏む人の影もない

どなられて頼りにされて船頭役

富士見ればいい日になりそな通勤車

高槻市 乙倉 武史

裏話聞いて驚くことばかり

即答は困る家には妻がいる

出たがりの万札十二月の財布

香川県 高橋 たみ

そうですかそうですかとて龜になり

木瓜の花 大好きなにもいわないで

年輪をかぞえてみれば同級生

鳥取市 田中 友子

白壁が風景画から消えてゆく

言いすぎた昨日の顔をよく洗う

昨日のこと忘れる妻で暮らしよい

弘前市 櫻庭 順三

吹雪から守るこみせの城下町

雪のんのん こみせは話すこともなく

雪のんのん地吹雪やがて津軽三昧

寝屋川市 坂上 高栄

言い訳をするほど心寒くなる

満願の心安らぐ百度石

土いじり花と対話をする陽気

熊本市 北川 一進

歌うのが好きですマイク放さない

気分だけ若い積りの万歩計

米を研ぐなれたと夫の水加減

倉吉市 山中 康子

お正月 初心忘れぬ姫鏡

五感まだ人並だけどつまずいた

葉牡丹に母の匂をかいま見る

静岡市 松下 正枝

この小さい種に不思議がつまってる

一言でまた外交がぎくしゃくし

ざわめきをしんと静めた咳払い

吹田市 西岡 豊
酒ちびり唄と踊りで若く生き
敬老は真つ平ごめん喜寿の艶

鳥取市 富山 雄幸
老いたかな愚痴を肴に般若湯
指切りゲンマン可愛い契り実を結ぶ

岡山県 土居 ひでの
六十歳の手習いコーラス燃えている
交流の姉妹縁組ぬくい風

米子市 池尾 保子
袋戸棚 父の歴史がこぼれ出る
太郎はいつも苛めに耐えているようだ

八尾市 生嶋 ますみ
悔いのないラストを飾る柿もみじ
風下にいたばかりに聞く本音

田辺市 大峠 可動
岬の灯 父にも子にも母の色
人老いて罪の数だけ歯が抜けた

豊中市 岸田 知香子
晩秋の茜に染まる古都の寺
復興の街に帰れる有難さ

鳥取県 橋谷 静江
残業の疲れ軒で知らせてる
残業で稼ぎ時には羽目外す

池田市 木村 一笛
あきるほどもいつも見ている古女房
晩秋に野菊が誘う散歩道

米子市 服部 朗子
荷が着くやリングが薰り心満つ
手習いへ心機一転決意する

出雲市 加藤 スズコ
京の旅夢を残した人力車
コスモスが肩を振りふり秋の歌

大阪市 川久保 睦子
冬の朝 鶴が古巣に舞い戻る
合格のしらせ手にして舞い上がる

松江市 小西 素子
畳替え昔を偲ぶ掘り炬燵
名月や壺いっぱい芒生け

横浜市 行方 しづこ
ブランドがねじれあつてゐる通勤車
盛りあげるつもりひんしゆくかっている

横浜市 後藤 早智
到来物減って停年間近知る
本当はと笑いはじける四月バカ

交野市 山川 日出子
自己流の折紙一ぱい外は雨
お隣の国際電話祖母と孫

東大阪市 松山 隆

あいまいなこの世の水を飲み生きる
ねじ曲げる花が泪の華道展

唐津市 山門 タミ

猫カルカン鼠ゆっくり通り抜け

古墳出たさわいだ後が分譲地

千葉県 大川 晩翠

先導に犬は喜び駆け回る

内助の功 控え目の妻活躍す

松山市 丹下 美津子

節水の誤算 水道料値上げ

逃げ出すと餓死につながる籠の鳥

泉佐野市 大工 静子

子の代は昔の袱紗隠居する

目の保養トイレペーパーの漫画見る

箕面市 木村 天弘

病める母 騙す一言許される

営業の笑顔はいつも溜めてある

大阪市 今西 静子

配達を終え少年の深呼吸

元旦の計に連休日を探す

貝塚市 池田 寿美子

パソコンは使わなくとも生きられる

約束は出来ぬ山茶花散って行く

和歌山市 楠見 章子

ころろ渴いて風邪ばかり貰うてくる
いつまでも火種ちらつくカレンダー

尼崎市 吉永 伊三郎

おみくじが沢山枝に咲いて初春

二人半迎えて母は祭り寿司

尼崎市 岩倉 キク子

一幕しかない仮の世の舞台

なせ迷う道は一つしか無いのに

松江市 寺本 明子

病院の隣に住んで無病です

母遠し母のリズムで米を研ぐ

鳥取市 石上 悦子

ぬくぬくと育ちわが子に嫉まれ

哀しみの章はたたんで鍵をかけ

大阪府 原 美恵子

お隣へ落ち葉の無礼詫びに行く

余生などと言われたくなし背のばす

松江市 松浦 登志子

ふるさとのみかんが特別うまい味

カーペット買ってうたたね風邪をひく

松江市 鶴飼 陽子

干柿を数えるたびに減っている

夜空見て星を数える子がい

百回忌 仏を置いてうまい酒
幸せな耳でいいことだけを聞く
松江市 福岡佳江

カーテンを引くには惜しい丸い月
和歌山県 吉田武治
鎌を打つ実り信じた妻の汗

油断すな小さな小さな水溜り
宝塚市 飯西ミサヲ
去年より重くなったか漬物石

かもしれぬ話に欲が先にたつ
静岡市 三浦つね
俄雨 隣の干し物先に入れ

掛け引きを知らぬ本音が叩かれる
静岡市 小木久子
めつきりと気弱になって友は病み

満腹の時の約束いい返事
静岡市 佐藤次枝
まいた種 刈りようもなく噂飛ぶ

主婦業の日課 終りのないゲーム
米子市 猪森スミエ
スキヤンダルすっぱり覆う蓋がない

枯葉舞う青い新芽に送られて
河内長野市 木太久正一
遠い娘へ父の野菜の宅配便

拳ほど怒っていない父の肚
旭川市 朝倉大柏
ほめられたことで明日が広くなり

車にも人にも優しく故郷の風
岸和田市 亀井皎月
聴診器 今日とは異常がないと言う

百雷の軒 負けずにかいてやる
高知県 桑名孝雄
人畜無害 情けないけどよしとする

落ち込んで仁王の顔に会って来る
大阪市 中井正秀
独身を天涯孤独と自負する

大銀杏 仁王一色黄にそまり
唐津市 福島紀一
三代目 土蔵の壁は落ちたまま

特権を振りかざすから嫌われる
唐津市 山口ふさ子
独りでも食べることに忙しい

喪があげて軽い気持になる手紙
宜野湾市 杉谷一栄
ちぐはぐな話笑わず老いの友

パチンコ店ボーナス出る日待ちわびる
池田市 藤井計光
学校はいじめ知らぬと逃げ回り

六十の手習い筆が重過ぎる
缶ビール飲んで独りの夜が更ける

兵庫県 西山 八重子

遠くより見守るだけの親となる
許し合う夫婦になれば余白なし

姫路市 服部 一典

冬の夜のバブで女に火がついた
トラックにはねられそうになり聖夜

和歌山市 松本 三九

孫が来て猫が追われる父の膝
あと一歩踏み込む勇気あったらなあ

高槻市 傍島 克治

所詮歩はと金までらし窓際で
お隣は焼肉と知る換気扇

大阪市 和田 和風

泣きじゃくる児の言い分も聞いてやる
ハイキングあつと言う間の握り飯

岡山市 富坂 志重

無事満期 少額なれど保険金
何事も無くて拝まん初日の出

鳥取県 高尾 京

枯れ葉舞う風が煩つべを赤くする
言葉じり何処かで噂されている

島根県 槻谷 仲子

夕焼けに楽しい過去が浮かびだす
生きてこそドラマがあると亡夫の声

米子市 永井 三津子

主婦業の喝采もない差し向い
いやなこと言うまい胸の絵がにこる

徳島県 安宅 美代子

何事もなく終えた日は物足りず
肚割って話せる友がいてくれる

和歌山市 森口 美羽

百歳の苦労は見せぬ笑いじわ
八十路にも彩塗る自負が生きている

東大阪市 今岡 貞人

来年の話を鬼に聞かしとく
クラス会 青春時代かえり咲く

和歌山市 和田 美寿子

説教も心の耳にほど遠く
種ひとつ落とし未来へ芽を残す

羽曳野市 山本 たけし

防寒着重く感ぜぬ今朝の冷え
寒中に氷踏み割り蘭草植え

熊本県 増田 一乗

樵とは哀しからずや東大出
生き給え祖国の大地待つものを

大阪市 岡本 久峰

大阪府 田中 せつこ
爪弾けば心のひだに沁みる曲
艶話 隅に置けない人と知る

大阪府 中橋 恵美子
思い切って捨てよう後を振り向かず
名医より傷口癒す日が流れ

鳥取県 原 みさを
真っ白に凍てて還らぬ北の島
言い勝った体の中を風が吹く

寝屋川市 井上 すみれ
孫びっくり天井にねずみがいた話
長生きはするべしひ孫の百面相

唐津市 松本 圭
陽のあたる場所をさがして待ちあわせ
あごの鬚 電気カミソリ剃り残し

鳥取市 徳田 ひろ子
三十年振りに職業主婦と書く
またひとつ夢をたたんで冬籠り

高槻市 執行 稲子
天体が好きなあの亡子の星探す
夕映えにパゴダ燦々こがね色

宝塚市 永田 暁風
世を捨てた女の箒目がきれい
冬銀河 今年も罹災者の上に

鳥取県 吉田 孔美子
胃潰瘍ひねた守護神かも知れぬ
通帳のマイナス残に慣れて来た

大阪府 平井 露芳
肩書きもやがて取られる肩叩き
輪になって首脳はしゃいだエーベック

静岡市 増田 扶美
坂道が私の老いを教えてる
無駄話できて絆が深くなり

今治市 渡邊 伊津志
父の目に確かな海の彩がある
奥底の知れぬ寒さよ涛の音

尼崎市 向井 末貞一
立つ煙 根も葉もないが辞任する
よそ様の幸せ覗く窓の影

兵庫県 中野 とよ子
窓開けて今日の吉報待っている
老いの部屋 元気に窓を開け放つ

前 月 分
大山市 森 正
ふた股の大根提げた父若い
木枯らしへ背を丸くした妻使い

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 1月号から

河井庸佑

幸せの予約みんなのシャツたたむ

山宮愛恵

日々忙しい家事の中、家族のシャツを畳みながら将来へ思いを巡らせ、未来像を画いておられる様子がよくわかります。「幸せの予約」にその思いが窺い知れます。

山頂に立てば孤独の風が吹く

福原悦子

頂上を目指し、こつこつと努力を重ねて登り詰めると、そこは風当り強い羨望の的地位であり、孤独感が身に迫ります。これも世の常、やり抜く決意を固めねばなりません。

トビの子をタカにしようとした誤算

村上久美子

未知の可能性を秘めたのが子どもです。子どもは、親にも見えない力を持っているものです。子どもを信じ、伸びる芽を大事に育て、成果を見守り続けてはと思います。

幸せは妻と余生の茶がうまい

安宅美代子

ほのぼのとした温さ、いつまでもお元気で。一步引く心に見える風の彩

山根めぐみ

何事も立派な成果をあげるべく取組むに当って、立案・計画・実践の過程の中、周囲の状況を適確に把握するため、一步退き、物事を考える謙虚さが大切です。はやる心を押さへ余裕を持つこの必要性を感じました。

二度とない今を精いっぱい生きる

中後清史

今日という日は再び来ない。分かっているがら無意味に過ごし勝ちです。悔いのないよう過ごすことの大切さを今更のように感じさせられました。

ふり向けばわが足跡の線乱れ

松本聖子

生きていく上において、何事も前向きに考え進んで行くことは必要ですが、時には立ち止まり、反省する姿勢がなければ、より良い成果は望めません。作者は足跡を確かめることにより軌道修正されたことでしょう。

妻に言うただ有難う有難う

小林一閑

円満な家庭を築き、明るい日々を送るにつ

いて、妻の役割はたいへんなものです。その苦勞に對し率直に有難うと言うことによって心から感謝を表わし、夫婦の絆も深まり、お互いの信頼関係もより緊密になります。ほほえましい、爽やかさを感じました。

クレヨンを持ってば広がる子の世界

権代康女

子どもの絵の世界は、大人の想像を絶しています。クレヨンを持って無心に画いて行く世界、理屈ではなく、どんな思ふがままに画いて行く。夢のある楽しい世界、それが子どもの絵の世界です。

反論もせずに笑って聞くゆとり

井崎ミサ子

論争となれば違ふ意見には直ちに反論することが多い。相手の論をじっくりと聞くことが必要です。いきなり反論する効果よりも、和やかに静かに相手の言い分を聞くゆとりを持つことによって心の広さを感じさせます。

ふる里が心広げて待ってくれ

徳田ひろ子

ふる里はいいものです。懐かしい風景、過ぎ去った思い出、親、兄弟姉妹、親類の人々がいるふる里へ帰り、身も心もリフレッシュし、新たな気分で有意義な日々を送るよう心がけてください。

沙湖抄

小出智子選

後頭部に積む流木の一本 二本
故郷を遊ばせる白黒のネガ

年ごとに春待つ心こまやかに
のこすもの思い切るもの焼却炉

仕事納めに郵便受けを掃除する
わたくしを吐く煙突のすす払い

割れる音をしっかりと抱いて冬の壺
いっせいに知らんぷりしてユリカモメ

彫りなおしほり直した面つけて
冬帽子深めにかぶり夫の喪

この指に誰も止まってくれなただ
わくわくと夢を集めたのは 昔

躓いて黙々と銀杏を拾う
ビー玉を透せば遠い兄がいる

枝打ちをされないままできたわたし
あの時の哀しみだらう瘤がある

めもと独楽田周率が出てこない
風鈴を外した窓がくしやみする

初雪は幼いままの手で享ける
目に見えてわたしの朱が減ってゆく

米子市 林 荒介

和泉市 中川 楓

鳥取県 鈴木 公弘

宝塚市 永田 暁風

尼崎市 田中 薫

米子市 中井 ゆき

高槻市 守先 伸子

寝屋川市 岸野あやめ

尼崎市 春城 年代

和歌山市 福井 桂香

豊中市 辻川 慶子
寝屋川市 龍島 恵子
島根県 松本 文子
砂川市 大橋 政良
尼崎市 春城武庫坊
兵庫県 倉垣 恵美
八尾市 高橋 夕花

ガンペルを買った時には燃えていた
雷雲の下を猫背になって行く

万歩計の一步に銜いなどはなし
去年と同じところで笑い小出しする

たんこぶを撫でて終ったひとつの愚
窓あけて誤解に風を入れてみる

生きたとは待合室が混んでいる
ハードルを越せる間はまだ未熟

親の目の届かぬ弓を引きだした
元日の生れきりつと足袋を穿く

笑う種泣く種私のまいた種
女人高野へ程よく老いている人と

あの人もこの人も淋しい目をしてる
醜さを知らないてっぺんの熟柿

本棚のこけしが雪を恋しがる
平成七年九官鳥も笑わない

歯が緩むわたしの芯も揺れている
花屋さんに私の場所が空けてある

雪吊りが雪の降るのを待っている
磐梯山しばらく亡母と温泉にひたる

軽いかるい話に揺れもせず芒
万葉の里へ逃げ場をまたひとつ

川が澄んでいるこの街の身だしなみ
やわらかい紐を境界線にする

中之島ひとりで薔薇を見えています
花道はつま先上がりのゆるい坂

枚方市 前 たもつ
青森市 工藤 甲吉

堺市 桜沢あかり
和歌山市 田中 輝子

大阪市 西出 楓楽
米子市 政岡日枝子

海南市 三宅 保州
尼崎市 田辺 鹿太

鳥取県 西川 和子
和歌山市 松崎 幸子

香川県 川崎ひかり
寝屋川市 森 茜

大阪市 板東 倫子
鳥取市 武田 帆雀

今治市 中村 好恵
和歌山市 福本 英子

西宮市 牧渕富喜子
米子市 金山 夕子

大阪市 榑本 路児
弘前市 佐治千加子

富田林市 池 森子
八尾市 宮西 弥生

五所川原市 齊藤 島
和歌山市 木本 朱夏

西宮市 奥田みつ子
富田林市 藤田 泰子

喜びも幾度かあつてまだコンビ
 何時来ても殺風景な囲碁の席
 旅に出て夫婦の話題合つてくる
 とときは校歌を思い出したまゑ
 芽出度さも少し霞んでくる傘寿
 絆断つ私流の解釈で
 責任を果すおとこを父と呼ぶ
 雑談になると割り込み電話くる
 居酒屋のおやじと同じ国訛り
 満員の車内で猫が鳴いている
 両方の耳で確かめ合つた愛
 流れ星予感当りませぬように
 赤ちやんを賜りました女の子
 これ以上無理をさせたくない地球
 沓脱ぎ石は放浪ぐせを知っている
 実らない思い五線紙に埋める
 冬木立膝に溜まった水抜きに
 明日の日に何起つても柿の味
 居すわつて何 wait てる寒気団
 テレビ観る側で私は本を読む
 木の葉散る何をあわてている歩幅
 白い鳩少なくなつたなと思う
 みかん転げて昔話を喋り出す
 時効にならぬ科白を妻が持っている
 立ち直るまではドレミを杖にする
 ところを得て銀杏たわねに実をつけた

広島市	森田	文
弘前市	中山	雅城
兵庫県	遠山	可住
寝屋川市	平松	かすみ
香川県	木村	あきら
和歌山市	堀畑	靖子
鳥取県	土橋	螢
西宮市	亀岡	哲子
横浜市	菱田	満秋
横浜市	清水	潮華
和歌山市	吉村	さち子
西宮市	西口	いゑゑ
八尾市	宮崎	シマ子
茨木市	堀	良江
米子市	林	瑞枝
尼崎市	長浜	澄子
松原市	玉置	重人
吹田市	栗谷	春子
出雲市	久谷	まこと
芦屋市	黒田	能子
和歌山市	古久保	和子
寝屋川市	江口	度
羽曳野市	芦田	絢子
羽曳野市	吉川	寿美
弘前市	相馬	銀波
米子市	寺沢	みどり

サバイバルゲームだ古希のクラス会
 鈴つけるほどの勇氣もないねずみ
 きびだんご貰つてからの仲間です
 しっかりと覚えています母の膝
 ホッチキスで留めるわたしの欲の皮
 期待外れてわたしの影が寒そうだ
 ご高堂なぞと賀状のこそばゆい
 迷いから覚めてやさしい顔になる
 来るものはそう遠くない冬銀河
 雑草を抜いてやるのにバラの棘
 南無阿弥陀仏 女ひとりが昏れてゆく
 まつとうに生きて彼岸はまだ見えぬ
 明日という言葉に頼り過ぎないか
 ふる里の山は無口な亡父に似る
 歳月やいろいろあつて今ひとり
 風の夜はひとりに耐えることと知る
 言いたいこと明日に回した胃の凭れ
 お早うの声が澄んでる朝の路地
 ゆるがぬ礎石自分の城をもつて居る
 老人にティッシュはくれぬ駅通り
 客が来て玉露の缶の封を切る
 クラス会背伸びの好きな紙コップ
 人並に空を見上げて背伸びする
 聞きたいと思う口髭刺つたわけ
 ひとり逝きひとり生まれて語呂合わせ
 べカサスも鳳凰もいる冬の星座

黒石市	相馬	一花
和歌山市	玉置	当代
倉吉市	米田	幸子
松原市	小池	しげお
八尾市	村上	ミツ子
大阪市	稲本	凡子
岡山県	小林	妻子
和歌山市	山口	三千子
寝屋川市	堀江	光子
京都市	都倉	求芽
弘前市	一戸	ツネ
阪南市	深日	白光子
旭川市	朝倉	大柏
青森県	西谷	鐵郎
和歌山市	宮口	克子
鳥取市	小谷	美ツ千
和歌山市	田中	みね
唐津市	山口	高明
大阪市	本間	満津子
守口市	森川	まさお
堺市	黒田	真砂
羽曳野市	徳山	みつこ
藤井寺市	田中	透太
和歌山県	村中	悦男
和歌山市	山田	高夫
豊中市	田中	正坊

必ずと親父に言ったのが辛い
迷いながらひとひと日を数えている
秋風に返されてきたスベアキー
娘のために頃合いのくい探さねば

流行を追わぬおしやれをほめてくれ
絵に画いた餅正月の留守電話
目覚しは要らぬ仔犬に起こされる

人見知りする子を無理に抱いている
うつむいているから夢が描けない
ふるさとへ着くと大きな声になる

角にある自販機からも酒が出る
聞き上手な妻でお客が帰らない
苦労した妻へ捧げる一行詩

本だたみ出来る娘になりました
同郷の誼でいつも尻拭い

えいままよ 三時間ドラマにお付き合い
もてなしの一品亡母の秘伝です

夢うつつ亡母に逆らいつづけてる
訥弁に心の窓を開かれる

歳月がしがらみひとつずつ亡くす
人生と言うほど太く生きもせで

子に送るエールだ母の笑い顔
九十の母に五十はまだひよこ

小春日に誘われて行く軽い靴
解るまで卯日めくり繰っている

花作り師走の声を聞きながら

鳥取県	土橋はるお	鳥取県	青戸	田鶴
米子市	青戸	米子市	恭昌	恭昌
奈良市	石垣	花子	越智	一水
今治市	津守	柳伸	西原	艶子
大阪府	松本	主	唐津市	艶子
鳥取県	岩崎みさ江	一風	鳥取県	吉村
八尾市	大山舞鳥影	神夏磯典子	海南市	谷口
大阪府	義男	淡路ゆり子	八尾市	高杉
倉吉市	千歩	結城	守口市	君子
和歌山市	細川	稚代	和歌山市	玉井
和歌山市	豊太	岩本美智子	和歌山市	丸山よし津
宝塚市	山本	玉恵	岡山県	山本
柏市	上鈴木春枝	渡辺	今治市	南奉
貝塚市	池田寿美子	忠雄	和歌山県	西口
大阪府	日阪	秋子		

腕白の穴埋めしてるお母さん
気がかりはそれあれなにで足りること
憎めない女隙間を閉め忘れ
身のほどをわきまえている赤い糸

土踏まず百叩きして父眠る
漬け物の腕がもどった寒の入り
蓑虫がこの世を覗く顔を見せ
数珠はめる両手の罪を認めよう

養子娘の姉は美人のまま老いる
息子と孫くらべて嫁の労を知る
大げさに包帯をして児は安堵

雑魚なりの知恵で精一杯泳ぐ
過去は過去明日の詩を詠むことに
無位無冠自由な風に乗る落葉

嫁姑 二つの役を演じきる
幸せの高さは父の肩車

素直さに負けて毒舌ひっこめる
荒芥さんの句。作者の後頭部には、何時も流木がゆったりと流れて

いる。誰にも邪魔をされることもなく、一本また一本と、流木と一緒に
流れているのである。「白黒のネガ」を故郷とする句とともに、研
ぎ澄まされた作者の世界がある。楓さんの句。しみじみと女性でなく
てはの思いが「こまやか」にあり、「思い切るもの」の潔さが一年を
締め括るにふさわしく、春を待つ思いが見事に。公弘さんの句。日常
茶飯事のこのなんでもない一句に、今年が終り、新年を迎えるとい
うことはつくりと詠まれている。一年の営みが「郵便受」にもある。
曉風さんの句。冬の壺の静けさを「割れる音を抱く」と感じとられる
感性に、作者のきびしきを見る思いがする。

倉吉市	野口	節子
横濱市	保田	絹子
大阪市	一本	勇太
和歌山市	和田美寿子	
岡山市	井上柳五郎	
鳥取県	さえきやえ	
今治市	渡邊伊津志	
鳥取県	乾	隆風
神戸市	船津とみ子	
寝屋川市	太田とし子	
唐津市	浜本	ちよ
岡山県	矢内寿恵子	
阪南市	正橋	正
岡山県	福原	辰江
松江市	松浦登志子	
倉敷市	田辺	灸六
大阪府	澤田	和重

句集紹介

薫風川柳の秀句燦爛

『古稀薫風』に寄す

東野 大八

「窓口談義」句集は作家の魂の顕現――

麻生 路郎

――（前略）――私の門下の若い川柳人が別に何々記念というのではなく、自己の作品を世に問うために、勇敢にも句集に踏み切った。そしてハツラツたる作品が好評を博して、我が社の刊行した柳書中で、一年間の売上げ率ではトップを切ったのであった。

この青年は、既に第二句集刊行に向って前進を開始しているのであるが、彼曰く、

「私の母は私の第二句集刊行の一助にと、毎月五千円宛貯金をはじめました。素晴らしい句がたまるまでに、刊行費の方が先に行くのではないかと心配しています」

というのである。私は思わず熱い涙がまぶたを濡らした。この母の愛情、この子の幸福、川柳人は多いが、こうした親子なんてそうざ

ラにあるものではなからう。句を作ること、句会へ行くことさえも親が反対したり、妻が不満だったりする話はチョイチョイ聞くが、この青年のような話は、永い川柳生活をして

いる私にとっては、はじめてのことである。

句集を何等かの記念に刊行する時代はもう過ぎたようだ。私は必ずしも記念出版を否定しているのではないが、句集はその人の環境によって、経済力のゆるす範囲に於いて自由に刊行するのがいいのではないかと思う。――（後略）昭和38年11月号「川柳雑誌」所載・原文のまま

橘高薫風第一川柳句集『有情』は、右の「窓口談義」の年に生れた。第二句集は路郎師の「視野無限 この言葉に尽く 麻生路郎」の簡明深遠な一行の序文を得て、路郎死去の昭和40年7月に生れた。その後、第三句集「肉眼、第四句集「愛染」が逐次、数年おきに刊行され、それらの秀句集を集約したのが、今回発行の『古稀薫風』である。

この本はB6判二六二頁の箱入り美本の豪華装幀で、箱の帯には、作家田辺聖子女史の次の推薦文がつけられている。

「薫風川柳はその号のようにさわやかですすがしい。平淡だが高雅な味わいがある。気識に富む川柳といおうか。しかし決してかたくなるしくなく、暖かだ。

『桐一葉 猫も座禅の向うむき』

人の世をいつくしみ、川柳でお人柄を練っ

てこられた。川柳歴を重ねられるにつれ、足どりかるく自在に、句境を深められた。

『地震爆んで一輪の薔薇毅然たり』

しらべも流麗で、日々愛唱するに足る。

句格は高いが、愛すべく貴むべき珠玉集といえよう。

田辺 聖子

橘高薫風は、柳界の貴公子と称されているのだが、その彼が今年、人生の古稀を迎えたのを機に、四十年に及ぶ端正にして繊細巧緻なその知的水準高い秀句を一冊に集約したのがこの本である。

恋人の膝は檸檬のまるさかな

労働歌謡が歌えば凄からう

飲む会のハガキは箸で裏返す

妻より水の深さが臍を越す

墓の前もとの子一人母一人

鱗雲一枚こぼれ亡母の窓

睡蓮も輪廻転生の旅か

挙げるに暇なき彼の秀作を挙げればキリがないのだが、母との相聞に涙しながら、彼は

れもんと睡蓮を愛した。節度のある行き届いた含蓄のある諸作品が、多くの彼のファンを魅了して余りあるのを信じる。

讃岐富士一 番星を簪に

薫風

の端正にして気品ある短冊を、筆者は机上に掲げ、もう十年になる。この畏敬する友へのこれが正しく筆者の友情の証である。「視野無限」路郎先生の名序文にあやかり、諸兄の一読を心からおすすめる。

荀香のむ

八木千代選

海底に届く手紙を書いている

螢消えたあたりを一度たずねよう

哀しみを突きぬけて有り冬の天

急速解凍一人芝居が崩れたす

振り出しに戻るに要ったエネルギー

一気に流さねば溜まるもの多し

大切なあやふやなものを貯めている

大空の下 風船心地よく割れる

木霊する遙かな山にとり憑かれ

真結びがきつすぎたかと悔いている

独り旅たんばほどの夢さげて

日かげ道歩く すこし前かがみ

泣き声をもらさぬ森を探している

むらさきのクレオンを折り森を出る

平手打ちあまりに強く立往生

ゆるすぎず痛くないよう丸結び

つらつらとつらつら椿咲く日まで

五臓六腑を広げる場所があればいい

出逢うのは切り取り線のあった道

和歌山市 田中 輝子

米子市 青戸 田鶴

和歌山県 堀畑 靖子

今治市 野村 京子

西宮市 牧渕富喜子

和歌山市 榎原 公子

島根県 松本 文子

西宮市 西口いわゑ

米子市 鹿島 蘭

枚方市 森本 節子

八尾市 大内 朝子

大阪市 鍛原 千里

寝屋川市 平松かすみ

和歌山市 木本 朱夏

米子市 茂理 高代

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 福井 桂香

米子市 足立由美子

和歌山県 小倉 アサ

鶴を折るとつとあふれてくる祈り

木枯らしの連れて来たのは焼き芋屋

たとえばの話にナイフ忍ばせる

潜在意識ゆきふり起こす虎落笛

死んだ振り見ないふりして影法師

どの瘤も分身だから抱いている

キリキリとみぞおち今日もまた雨か

風船は柵の数など気にしない

痴呆の母は幼い頃を遊ばらし

嬰兒の命ふくらむ桃色黄色

どっこいしょと大山を移すバスガイド

騙されて旬を忘れて成るトマト

追越しをかけて急がす冬の月

数にまみれて失いかけた日をもどす

レモン切るそのひと刻を静止する

山になるまで深追いはせぬように

峰から里へもう迷わない雪女

降車鉤にせかされ席がぬくもらぬ

生きるとは森を壊して海をよごして

花ゆずが山ほど届きぬむらせぬ

枯れたまま思い出ばかりみずみずし

サランラップにあしたを包む冷蔵庫

雑音を振り切るまでの背のうずき

沖に出たまままで木枯らし帰らない

物音が途絶えて壁が濡れている

寝屋川市 森 茜

和歌山市 古久保和子

八尾市 村上ミツ子

鳥取県 岩崎みさ江

富田林市 片岡智恵子

米子市 木村富美子

西宮市 奥田みつ子

米子市 澤田 千春

尼崎市 春城 年代

和歌山市 岩本美智子

米子市 林 瑞枝

寝屋川市 堀江 光子

倉吉市 淡路ゆり子

米子市 白根 ふみ

八尾市 高橋 夕花

米子市 政岡日枝子

出雲市 石倉美佐子

堺市 桜沢あかり

米子市 野坂 なみ

鳥取県 さえきやえ

吹田市 栗谷 春子

豊中市 辻川 慶子

岡山県 山本 玉恵

八尾市 生嶋ますみ

米子市 金山 夕子

回り道して夕風へ逢いに行く
サヨナラを積んでも見えぬ向こう側
物差しが交わったことは言っていない
寒の水を飲む父親のすきな水
節分の豆ころころと自己主張
ラッシュアワーわたしの背を見失う
歩いて歩いて立ち止まらずにまた歩く
清濁を併せて呑んで胸が灼け
人百態わずらわしさも湧いてくる
等身大の鏡に自信萎えてゆく
カレンダーあと一枚がいとおしい
まあまああつた運命線は見えない
新しい命と思う暦吊る
まわり道してもいつもの辻に出た
頼りない二人 情けに縋りつく
袋帯思い残しのあれやこれ
小石一つ投げて起こった岩なだれ
雑巾がけ大好き何か満たされる
他人事じゃないわと聞いておく悩み
許容範囲広めにとって平和です
脳味噌も磨もうすくなつて行く
居心地がいいのか根っこ生えてくる
野の花はどんな壺にも微笑んで
神のまま個性に生きる枇杷の花
森しい旅 甘栗が転げだす

松江市	浦辺	静江	鳥取市	石上	悦子	鳥取市	籠島	恵子	神戸市	船津とみ子	米子市	木村	春枝	大阪市	藤田頂留子	大阪市	川久保睦子	葛屋川市	岸野あやめ	米子市	中井	ゆき	羽曳野市	芦田	絢子	和歌山市	福本	英子	熊本市	永田	俊子	和歌山市	吉村さち子	米子市	寺沢みどり	八尾市	高杉	千歩	岡山市	矢内寿恵子	大阪市	本間満津子	米子市	光井	玲子	和歌山市	宮口	克子	寝屋川市	宮崎	菜月	米子市	石垣	花子	富田林市	藤田	泰子	唐津市	浜本	ちよ	米子市	服部	朗子	大阪市	津守	柳伸
-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	-------	-----	----	----	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	----	----	------	----	----	------	----	----	-----	----	----	------	-------	-----	-------	-----	----	----	-----	-------	-----	-------	-----	----	----	------	----	----	------	----	----	-----	----	----	------	----	----	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----

木守柿 巷の噂耳にする
蝶の舞うのどかな春の絵を書きに
古き良き日本を大風呂敷につつむ
柿熟れて明日の命が思われる
真夜中の大根人参ねぎ白菜
沈黙でコミニケーションはかつて
陰になり日向になつて疎まれる
人恋し何度かけても話し中
嘘つかぬ犬でほんとに愛想なし
今頃になつて貴方の良さつくづく
湯のたぎり秒針の外音はなし
残り火を燃やす酸素が薄くなる

和歌山市 玉置 当代
鳥取市 田村きみ子
岡山県 富坂 志重
弘前市 一戸 ツネ
兵庫県 倉垣 恵美
和歌山市 山根めぐみ
和歌山市 田中 みね
米子市 小塩智加恵
茨木市 堀 良江
西宮市 秋元 てる
兵庫県 円増 純子
和歌山市 山口三千子

田中輝子さんの絵葉書は強烈です。絵葉書といえは旅をおも
うのですが、旅人として書く一枚のメッセージに心を尽くせば、
それはじんじん沁みこんでいて、深い碧い海底にまでも届く
に違いありません。勿論、読む人の心の底にまで。青戸田鶴
さんの蛸はなだらかな調べで詠い上げられていて、はかなげな
世界に誘いこまれます。とくに見失った蛸だけれどもまだ喪つ
たわけではない。引き返してあの頃のあのあたりを彷徨うのは
心の在りようでしょう。堀畑靖子さんの天。長い哀しみや苦悩
を突きぬけて安定を掴んだ冬の天です。冷えてはいても大きな
裏切りはあるまいと、澄みきった諦観があります。野村京子さ
んの急速解凍は日常ありふれた事を上手に料理されて成功しま
した。せつかく丹念に用意してあった筋書きや科白でも、慣れ
からくる手抜きや甘えによって無残なていたらくとなる経験は
ありますものね。

景色

武田帆雀選



借景の裏の山から冬便り
造成地景色を添えて売り出され
スケッチの景色郷里に似た所
紅葉する景色に命洗われる
大不況師走商戦冬景色
冬景色へ音も入れたい寺の鐘
故郷の景色優しく僕を抱く
借景の明暗映す昼の月
子離れができないままに冬景色
病む足へ秋の景色を絵に貰う
見逃した景色いじめの跡がある
過疎へひとり置き去りにする母の景
試歩やつと許され外は春景色
五輪待つ長野が見せる冬景色
借景が乱開発にゆれている
富士見せて孤児に帰国の目途ただす
世が世なら桃が流れてくる景色
愛憎を捨ててひとりの冬の海
蘇る神戸に点る冬の景
教会の屋根の白さとなかまど
こころには母と笑つたい景色
ご自慢は風呂から富士が見える寮

たみ 清史 孝男 武史 博友 藍一 愛論 保州 朝子 旋風 希久子 高夫 隆 主一郎 潮華 芳郎 好恵 さち子 ツネ 次男 正雄

四十万に浴びるほどあり冬景色
峠茶屋景色もうまい串だんご
西の彼方に幸い住むという景色
美しい殺意を秘めた雪景色
石鎚が瀬戸を見渡す四季の貌
花園にふたりつきりになる景色
雪吊りが終ると景色冬になる
朝日さす村の景色はみかん色
瀬戸内の夕映え僕も朱に染まる
藁塚の景色は遠い花いちもにめ
眼裏にふるとの景色まぶたの中に生き
水平線どんな景色も叶わない
泣きに來た海に吸われてゆく夕陽
月の雫に感動して冬景色

子龍 美代子 年代 正刺 雪明 富喜子 シマ子 剛治 寿美 狸村 強一 和歌子 達子 倫子 典子 南奉 柳弘 忠男 洋 日枝子 西岡 洛醉

飾る

瀬戸まさよ選



飾らない娘をひきたてる健康美
弔辞では皆善人にして飾る
顔よりもコサージュだけを覚えてる
花の香が飾り窓から洩れてくる
派手好きな化粧回しが土俵入
優しさを遺影に飾る物語
飾らない母の手紙へ自我を折る
着飾ってタコ焼き食べている少女
みこしかく男を飾る汗のシミ
病床を飾るものなし髪を梳く
かざりものだから触って見たくなり
一すじの航跡飾る煎五等
子育ての合間みつけて爪も染め
少し飾って重たい冬を軽くする
精いっぱい飾りたてるも生きる策
笑窪だけなんにも飾るものがない
子供部屋自己主張する飾り付け
飾らない嫁で舅の受けがよい
ペン先で飾ることばを追いつづけ
飾るものないが母の手あたたかい
もつすこし飾ることばはなかったか
功績を飾る言葉が軽すぎる

忠男 喬水 捷也 宏章 雅城 洛醉 鉄治 時弘 清芳 可住 好恵 芳水 めぐみ 朝子 豊 アキ まさと 玉恵 たす子 武春 螢

飾り窓菊一輪という老舗
杜長さん飾りたてられ孤独です
身と心飾りまくって会いに行く
飾らない生き方だけを子に遺す
花道は飾りなんぞはもういらぬ
自叙伝に花飾る章一つなし
両の手に飾る虚栄と言う甲羅
ここに飾るものひとつ持つている
着飾って寒い心をだしている
寒空へミンク着飾る猫柳
子離れの童女にかえる雛飾り
握手したぬくさ言葉は飾らない
農に生き飾りは持たぬ太い指
モンローもマドンナも居る仮装劇
控えめの飾り一つにある品位

佳

終電車心飾らぬ者ばかり
宝くじ当たればお洒落うんとする
俺お前飾る言葉のいらぬ仲
毛をなめてなめて恋猫逢いにゆく
窓際を楷書で飾る宮仕え

人

花——りん飾ると和む風がくる
終章を飾りわたしの本にする

地 天

耳飾りゆれてノラにはなり切れぬ
お飾りの椅子でも我慢する暮らし

軸

吉川寿美

杜 的
吉太郎
圭三郎
俊路
武庫坊
勇 太
冬 葉
寿恵子
清 義
花 匠
よしみ
和 子
一 花
たもつ

みかん

菱田満秋選



みかんには誰も敵意を抱かない
みかん剥く指に女を滲ませる
瀬戸の地にみかんの花が咲いて春
みかんはみかんメロン羨むことはない
産み分けの理屈は問わぬ夏みかん
ふるさとが四国 四国のみかん買
日なたばこしながら妻と蜜柑むく
ふるさとが匂うみかんが匂います
仏にもみかんを供え冬に入る
器量よい方から減ってゆくみかん
一袋ずつみかん食べてる妻の留守
みかんむく指先に春遠からじ
送料で買えるみかんを子に送る
自由化の波がみかんの根つこ抜く
エル寸のみかんも畏まる見合い
貸す金はないがとみかん剥いてくれ
みかん出てお開きという酒の席
小さい孫の口へ小さいみかん選る
おみかんがお手玉になるお正月
夏みかん慶びごとを知っている
山盛りのみかん民話を語り出す
みかん箱卓袱台にした頃思つ

艶 子
めぐみ
あきら
佳 雲
清 芳
大 柏
保 州
落 児
鐵 郎
甚 一
希 久
よしみ
時 弘
重 人
たもつ
あずま
哲 子
倫 子
典 子
ちかし
やすお

佳

中流のつもりみかんを箱で買う
マニキュアを少し気にして剥くみかん
おしゃべりが終るみかんを食へ終る
おみかんでお手玉なつかし亡母想う
まだ夢は終らぬままの花みかん

人

まだ青いみかんシナリオ書き替える
下手な嘘を黙って聞いているみかん
いい話素直にみかんのスジがとれ

地 天

落ち着きをみかんの筋にためさる

軸

松川杜的

四 郎
悦 男
たず子
崇
権 悟
富喜子
日枝子
美代子
シマ子
寿 美
武庫坊
潮 華
一 風
公 乃
まさこ
不 二
一 花
可 住
克 治
玉 恵
さち子
芳 郎

初歩教室

題——許す

吉岡美房

今日は圧倒的に結婚を許す許さぬという句が多かったのですが、いつも言うように第一着想を捨て、第二着想から句にするようにしてほしいものです。題から連想されるものをいろいろと考え、思いつくものをメモにとり、あらためて句にするというようなことも必要でしょう。また、句にしてみても、無駄や無理な表現がないか、あるいはひとりよがりの句で、読む人の理解も感動も得られない句になっていないかなど、よく検討して完成させるよう努力して頂きたいと思います。

添削句

許そうか叱るか胸に手をあてる 孝男

(許す気が叱っている子に読まれ)

なにかも許してくれた母だった 雅子

(許さない父へ庇ってくれた母)

我が子でも気儘放題許せない 因静子

(我が子でも許せぬことのある悩み)

終末の席で許すというドラマ

(臨終の床で許すというドラマ)

歳月が互いを許す仲となり

(歳月が親子の溝を埋めてくれ)

泣きじやくりこめんなさいと許し乞い

(泣きじやくり許し乞う子を抱きしめる)

子を許す親の甘さを見られてる

(許される親の甘さを見透かされ)

もつしない孫の顔を笑顔見る

(もつしない孫をよしよしなぐさめる)

許すとは言わぬが孫を抱いてやり

許さぬが孫の顔でも見せに來い

笑わせる可愛い嘘なら許される

(はじめから嘘と知って孫許す)

孫の名に於て結婚許します

(孫の顔見たくて許すことにする)

お互いに愛があるから許せるの

(愛のある限りで二人許し合う)

許すなど言えまますかいな弥陀の前

(放つとして逝ったあなたが許せない)

酌量の許す範囲の罪決まり

(酌量の余地ない妻が許さない)

許すまい手ぐすね引いて帰り待つ

(手ぐすねを引いて夫の帰り待つ)

許すまい思って座り直してる

(許さない座り直した妻の顔)

美子

行子

一乗

利勝

ふみえ

まさと

ふさ子

露芳

三九

高栄

隆

旭

捷也

許し合いぬくり残した友偲ぶ

(心まで許した友に先立たれ)

御無沙汰をお互いさまと軽いう

(二無沙汰はお互いさまの許し乞う)

握り合う両手で許すひとと人

(友情は消えず許した手の温み)

旅の宿心許して夜があける

(旅の宿心許せる友という)

許してとすがる貴方の胸恋し

(許してとすがった厚い胸恋し)

長所だけ見合っつて許す深い仲

(好きだから何でも許し合える仲)

許したい理由ひとつだけ持っている

(許してる理由は一つ好きだから)

許されぬ愛にまつわる後指

(許されぬ恋に噂がまといつく)

星占い愛の裏切り許し乞う

(星空に愛の裏切り許し乞う)

嫁のミス娘だったら許すかも

(嫁のミス娘だったら許してた)

年金で許す限りのオシャレする

(年金が好きなオシャレを許さない)

堪忍袋許し過ぎてか口ひらく

(許せない堪忍袋破れそっ)

夫癒えて美酒三杯を許される

(病癒え美酒一合を許される)

トヨ子

孝子

タツエ

よし子

ふうこ

志重

アキ

碧

雄幸

美津子

松枝

三重

幸枝

退院の許可が出た日の茜雲

ふゆ子

(退院の許し一日ばら色に)

許される嘘も上手に使い分け

ますみ

(許される嘘もあるはず友見舞う)

良い弟子で奥を許すと天狗なる

多哥由

(奥伝を許して天狗戒める)

鯉料理許しを鯉にしかかる

崇

(活け料理どつかで許し乞うている)

許されて最後の切札風に舞う

美寿子

(切り札にする気ずんなり許される)

勝ち将棋まったを許す王位顔

俊一

(何度でも待ったを許す勝ち将棋)

これ位許す心が怪我になり

タミ

(これくらい自分許しておった怪我)

一人許して一人味方を多くする

忠男

(許したらみんな味方と限らない)

信頼し心許した部下背く

義男

(巧言令色心許していた不覚)

二枚舌使って許し請うてみる

郁子

(方便の嘘も交えて許し乞う)

恩返しせず許し乞いつつ写経する

りつえ

(恩返し出来ず許し乞う写経)

気を許し話したことに尾緒つく

幸次郎

(オフレコに気を許したが運のつき)

許されぬオウムの仕業天罪を

日出子

(神様が先ず許さないオウム教)

カラ伝票許し合ってるお役人

黎之助

(カラ伝票みんなやれば許される)

許認可にとどろ浸って上頼み

辰男

(許認可の利権に浸っている役所)

許されぬまんまで日本五十年

ミツ子

(五十年経っても勝者許さない)

なあなあ美徳世界は許さない

勝巳

(なあなあを許す日本にある不信)

もんじゅ事故ただの事故では許されぬ

真二

(原発はただの事故では許されぬ)

許すには限度地球がゴミに泣く

武治

(許せない核実験で泣く地球)

被爆国原爆実験許さない

睦子

(遠吠えにしない原爆許すまじ)

許したくても許せないこと多過ぎる

正

(許せないニュースで今年終りそう)

表現・着想ともに立派な句

お役所が四角四面の許可をくれ

宏章

許すとは言わぬが父の背を流す

芳水

紅の跡許していいない妻の顔

武春

自我を責め自我を許してもがいてる

志華子

主婦業の免許皆伝遠慮し

方子

やっこさ許してくれた膝枕

碧

許されて許して白髪ふえて行く

高栄

ライバルの独走許す風邪の床

利勝

軽いミスお年のせいと許される

君江

許されぬ恋の二人で燃えつきる

木管

銀婚へ許し許されたどりつく

蕉子

許すこと知って世間が広く見え

よし子

親の沽券許すと言えずすきにせよ

玲子

あやまちも無理も許して君が好き

ミツオ

優等生患者外泊許される

幸子

朝帰り許してくれぬドアチェーン

絢子

許し乞う旅の四国路澄みわたる

仲弘子

許せない居所わるい虫が居る

美恵子

物忘れよくする姑に気を許す

てる代

背を向けた過去許されたUターン

君枝

毒蜘蛛の密航帰化は許されず

幸夫

何もかも許されて行く弥陀浄土

剛治

古鏡心許して向い合う

キヨエ

許されて許す心を知りました

ミツ子

腹の中見せて石榴は許し乞う

めぐみ

雪とける頃まで許すことにする

さち子

小言なら許して鍋が焦げている

淳子

憲法で許されると子の主張

幸次郎

私の句

許さねば終着駅が見えている

私

許されて生きて借りてる命かも

私

題「酒」2月15日締切(4月号発表)

宛先

〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

吉岡美房

吉岡美房

吉岡美房

吉岡美房

老地柳増

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳若葉の会(前月分) 宮崎シマ子報

柿の実の熟れたら責任問うつもり
責任の無いやさしさを皿に盛る
責任が四十の顔を覗きこむ
かまどの火知らずに育つ炊飯器
年齢は増え楽しみは減つてゆく
楽な方楽しい方へと勘違い
楽焼の茶碗に沈む窯の彩
首曲けたままで迎える新世紀

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

農繁のやりくり老いのスケジュール
天高く雲ふんわりと地図を書き
終章を飾る落ち葉の風に舞う
名医でも治せぬ老いの物忘れ
立冬と言えば途端に寒い風
初霜に生き長らえた幸を知る
開究の裸の山と荒れはてる
笹向の山も調査に進みかけ
裏山に小狸時々顔を出し

南正 智世 富士野
のぶ子 光水 楽山
旭泉 千代女
禅心

山彦の声返らない老いの声
親族が山を囲んで夜を明かし
大山の紅葉しばし足を止め
秋の山十二単を着て招く
玄関で来客もてなす山野草
古里の山ふところの温かさ
晩秋の山スニーカーと語り合い
どの山も険しく転んではかり来た
紅葉が一日一日山を降り
順番の列に割り込み知らん顔
順番はジャンケンポンで子等は決め
プログラム順番通り進まない
順番は先ずお爺さん土産物
卵としぶんわりと抱く腕の中

岸和田川柳会

田中

文時報

より広い幅を求める芸の虫
イチローが広い球場せまくする
京間が広く感じるない財布
老夫婦広い屋敷にそつと住み
北海道の広さまっすつづく道
再会へ広いおでこを撫でてみせ
振り出しに戻つて明日を考える
もう一度振り出しに戻りたい人生
振り出しの頃は良かった夫婦仲
振り出しの二人に戻るフルムーン
振り出しは机ひとつの立志伝
便宜上夫を連れて旅に出る

伊久栄 伊久栄
つた子 種子
志重 秀香
すみれ 亜矢
善代 善代
ただし 久子
久子 智恵子
吟平 美恵子

倉吉川柳会

谷口

次男報

便宜上彼と同棲しています
便宜上顧問と言う名の席につけ
便宜上名前を借りただけと言ひ
便宜上善処と逃げるお役人
親類に便宜計ったお大臣
名誉職今も便宜に幅きかす
宿帳に夫婦と書いただけのこと
無職でも誇りにしてるだけのこと
百点を誇らしげに孫電話
株の話にばくの誇りが見えかくれ
ポケットで小さくなつて居る誇り
誇るもの何ひとつ無い類かぶり
顔見世のまねきの顔にある誇り

文時 文時
洋 朝一
辰郎 東雲
一齋 富志子
路子 鹿太郎
一弥 一弥
グン吉 白光子
狸村 狸村

荷物だけ持たすあなたがものたらず
お互いが荷物となれば別れたい
奥さんを荷物にしてはいけません
人生のお荷物孫がまたふえる

肉づきがよくて骨身に滲みにくい
肉体美腹の釦が止まらない
薄くても高価な肉は味が良い
お隣は焼肉らしいカンキセン

一週間に一度は肉が欲しくなる
肉づきのよいねえちゃんに一目惚れ
ステーキは横目でバラに決めている
校庭に未来の地図が埋めてある
庭石にもたれて草の思案投げ首

東大阪市民川柳会 森下

愛論報

わだかまり流してからは無二の友
夜も更けた大人の話でもするか
お嬢さんくたさい深くふかく礼
手垢ついた辞典としかと生きている
十年日記いたり人とわかれしか
いい実りだったと妻にいつ言おう
流れ星あれば亡母への宅急便
安らぎを求める母の背を流す
一坪の庭にも秋の実り見る
晩鐘に実りの秋が澄んでいる
家庭菜園秋には秋のものがとれ
石頭なれどわたしの好きな人
背広着た人を信じる癖がある
盛り場のこんなに変わる朝と夜

御前 天雀 とみお 喜美子 幸子 独歩 智子 秋女 日枝子 寿満湖 康子 黙光 苦句 寿々子 仙吉 朝子 正明 正坊 一志 頂留子 愛論 柳宏子 元紀 シマ子 路児 たもつ 勝美

感情の乱れこめかみ痛む夜
貧しさの中でマグマを抱いている
人形を抱いて出来ない親離れ
夕焼けに染まった海に抱かれない

川柳後楽吟社

從野

人間らしいロボットには氣をつけれ
朝のパン父権薄れて焼きあがる
少年のポケットに金貨一枚がある
あの雲に乗っているかなお母さん
べらべらと喋り続ける負けている
古い二人へ黄門さんが来る時間
好球を見逃がし父権から落ちる
火だるまになって鯛の味を出す
今日も無事夜汽車が響く湯につかり
飲み仲間風の便りにひとり消え
青空にかすかに月の影があり
疑いを心で詫げる置き忘れ
水を差す言葉へ反発心が湧き
もうひとつ聞けぬ本音が胃にたまる
幸せの話の足裏塗ってあり
美しの束縛やがて冬の巻
じつと耐え明日に飛翔の菊日和
助け舟金の無い奴ばかり来る
蒼天に少年の夢描いている
太陽へ豊作感謝の家山子立つ
公園の植木も私も冬仕度
三尺の高さでケジメはつけられる
熟通い青田で刈られる孫を連れ

健一報

雅文 湖風 文秋 度 道博 正秀 拓治 まさお 義親 柳五郎 健一 美智子 美智子 青銅 佐加恵 吟平 哲郎 桃風 博友 幸子 玉水 吉則 邦季 金吾 敏明 草風 鮫虎狼

踏切りを越えて悩んだ自己嫌悪
喧嘩して壊し二人で買いに行き

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云見報

一筋縄でいかぬ女が蔭にいる
担がれて瘦せる石鹼買わされる
宴会の好きな専務を担ぎ出す
定年の出口に落ちていた枯葉
出口までの長さ語らぬ砂時計
山椒魚の吐息が漏れてくる出口
直感で数えて多い菓子を取る
残金を数え思案の旅土産
鶴を折る命をこめて数を読む
多数決古い掟が風となる
欠点を数えて採点差が開く

佳句地十選 (1月号から)

木本朱夏

肋骨の奥で会話を湿りがち
台本にない人生の綱渡り
滝の音誰も責めてはおきません
ゆっくりと噛んで頭に叩きこむ
若者の蔭に影に咲く野菊
野に立つていつか詩人になっている
落ち込んだ私拾って朝が来る
遅い子に合わせしてくれる縄電車
岩肌を削る仏が見えるまで
芸術を語れば歯齧が浮いて来る

照路 秋月 光穂 半蔵門 茶の子 重人 波留吉 惠美子 庸佑 克治 東雲 静江 白溪子 荒介 町子 蘭幸 悟郎 汲香 和子 悦子 はつ絵 艶子 公乃

飯場の灯今日の日銭を数えてる

数え唄母には母の唄がある

小銭数えるわが指は短き指

万札を数えるときのほほえみよ

数え唄祖母が教える菊日和

冬鳥が数えきれないほどに来る

遠慮したばかりに運が逃げました

残る道もつとゆくり行くことに

竹槍で勝つと思つた遠い過去

その人がその人らしく生きる里

逢つて来たはてりを抱いている慕情

やつと義理果たした重い靴を脱ぐ

頼つた涙痛みか喜びか

部屋中を散らかし明日の旅支度

ところどころに汚点もあります日本史

眉つばで敵の揉み手に乗って見る

改札に切符吸われて逢いにゆく

仏壇に賞味期限のあるお菓子

妻の目がいつも刺さっている背中

川柳ささやま

酒井 靖子報

皿洗う大きな夢を盛る皿を

お土産の準備が出来た宿の朝

精いっぱい生きて味噌汁吸っている

本腰を入れる取組む舞扇

本腰を入れる手前にきた油断

ポスターのフランスパンが揺れている

落選をしてもポスター笑つてる

途中下車方針どおり行かぬ旅

杜 的 女

薰 子

節 子

瀧 小

紫 香

ふ み

栄 子

あきら

猿 杓

マツエ

英 一

艶 子

よ志子

萬 的

秀 夫

磯 子

しげお

風云児

純 子

とよ子

恵 美

芳 乃

美智子

多美子

すず子

末 野

方針が決まりひたすら金を貯め

食べ盛り抱えてパート本腰に

ふるさとを売りますポスター佗しすぎ

親の骨抱いて方針考える

握手した手から素敵な詩がこぼれ

ポスターに心の蛇を取りそこね

鉢巻きをきりりその妻がたりだす

かあちゃんか去んで酒宴が盛り上がる

方針はビタリ親父の背に向ける

方針を決めると遠い灯が見える

三幸川柳教室

三宅 保州報

こだわりを捨てた結果の寝付きよき

疑心暗鬼結果は友を見失う

生き抜いて外反拇趾という結果

我武者羅に走り結果を塗り替える

先々の結果は同じ俱会一処

起立採決結果がもたら出る怖さ

新人の足が稼いだトップ記事

昼間の衣装着けても出る育ち

極上の衣装着けても出る育ち

キッチンにやつと馴染んだ衣被ぎ

湯の町は浴衣で客を値踏みする

初めてののおんなの衣や宮参り

更衣室本音もここで脱がされる

衣替えボタンが一つ落ちたまま

転職をする度何か徳を積み

何はともあれ先ずは一服召し上げ

市 三

八重子

素 水

とみ子

つや子

ヒサ子

和 子

芳 郎

富 美

可 住

靖 子

孝 子

朱 夏

秀 男

高 夫

さち子

鉄 治

あいや

木 管

靖 子

嘉 平

美智子

正 雄

和 子

美 子

初 子

何もないだから何にも怖くない

何やかや言うて終着遠からず

おもちゃ箱君は何から手をつける

冷静になれば何でもない話

ベルが鳴る私は何をすればよい

何人を愛し女は弥陀になる

告白がでず灰皿あふれ出す

受け皿がでんと構えている強気

冗談の解る大皿よくもてる

非売品と言えは尚更欲しい皿

脇役に徹し切つてる白い皿

受け皿の絵柄迷つた跡がない

ブランドの皿で秋刀魚がかしこまる

欲望を盛る大皿に底がない

竹原川柳会

時 広

流れ星見たらいいな聖夜の空

虹を見て折りたたんだよ赤い傘

父の眼の中でひょうたんが育つ

秋の彩菊人形は素晴らしい

菊盛りにお墓参りをいたしましう

菊花展見事に育ち賞に入り

一人つ子期待通りに育たない

育ちます食べます中学二年生

伸び伸びと新芽の育つ春がいい

親に似た蛙に育つ蛙の子

子育てを終えて茶の間に二人きり

座る暇ない椅子僕は営業マン

共稼ぎ増えて傾く父の椅子

武 春

三千子

桂 香

当 代

親 路

公 子

めぐみ

み ね

章 子

和 代

保 州

千 秀

町 子

百合子

一路報

高 史

中 枝

蘭 幸

夏 喜

比呂子

明 子

蝸 牛

八重美

一 枝

静 富

房 子

貞 子

正 宏

公一報

虫の音の生きる証と我が余生
過去はかこ余生へ少し色を足す
信じてるからとやんわり釘をさし
民謡の小節も冴える秋の空
老い一人破る子もなき障子張る
ルージュ引く指に女が蘇る
芸一途生きて勲章などいらぬ

川柳クラブわたの花 故片上 英一報

力いっぱい走った孫の三等賞
年寄りのをぞくとはっぱかけられる
逝く前に覗いてみたい閻魔帳
淋しさが覗く赴任のワンカップ
泣いて済むことならドツと泣きなはれ
今日もまた本音言えずに日が暮れる
妻でさえ本音を言えはふくれます
神様ってだと聞かれる七五三
日本の秋をいろどる神おわす
円満な家探してる福の神
神さまはお盆になると留守にする
神頼み神主さんに電話する
行く末は神のみ知るやこのえにし
日に焼けた巫女が祭りの顔で舞う
頭など下げぬ男の神だのみ
神様も赤糸もつれ苦勞する
人間の勝手に神も疲れはて
衣食足り神の行方を見失う
亡母からの神三輪山へ初詣
神風を信じた頃は若かった

春 蘭
達 子
満 津 子
高 栄
八 重
睦 子
公 一

シマ子
一 風
剛 治
君 江
美津留
ミツ子
春 子
朝 子
ますみ
道 子
トシエ
明 子
幸 枝
幸 子
春 江
けいこ
宏
まさと
龍

ばれるまで神に誓えと信じさせ
神様にほめられるほど善人か
マイカーに三輪のおれを吊るしとく
御神鏡のぞけば映るはくの顔

川柳高知

川竹 松風報

魚偏の湯呑みで試す漢字力

吸い殻に男の生き様捨ててある
父さんと呼び名をかえて息子は巣立ち
脇役に徹し主役を盛り立てる
今日だけはあなたが主役入社式
主役の座ゆずると惚けが忍びよる
赤い羽根知人の顔を立てている
点と点結んでなぞが解けてゆく
何不足ないが一人はもの足らず
ガス点火ここから主婦の顔になる
句読点そこから深くなる迷い
参観日子に関係のない化粧
託児所に預けて夜の紅を引く
雪化粧山の男の血がさわぐ

西宮北口川柳会

亀岡 哲子報

通りすぎることが出来ない募金箱
お歳暮の箱あげ底はだれのつみ
弘法市で買った絵皿で猫を飼う
人形の目が媚びているのみの市
お目あてのむかごを買いに市に来る
朝市にエプロン付けた亡母がいる
朝市の土地の情けに触れてくる

泰 成
友 甫
隆
鬼 遊
春 枝
有 佳
幸 泉
佳 風
幸 功
孝 雄
菊 野
千 鳥
圭 風
子 龍
三 郎
松 風
ルイ子
トミエ
ひろ子
鹿 太
泰 子
房 子
香 子

七色をつなぎ合せて女なり
呼びよせて一族つなぐ阿弥陀経
老いの日の迷路でつなぐ掌が温い
人形が亡妻とのつなぎ役をする
命つなぐたしかな乳房には勝てぬ
ちぎり絵をつなぐと母の像になる
まごころでつながれている逃げられぬ
つなぐ手がなかなか天にとどかない
ほどほどに手をつなぐのがよい団地
偶然が重なり命ながらえる
偶然の縁を風に信じよう
偶然の話に日記面白
ほんの小さな偶然でした君とボク
ホールインワン腕より運の見せどころ
偶然がうまく行きすぎこわくなる
筋書になかった人と燃えている
年功序列も危なくなってきた机
瘦身で良し葉ざらいの医者知らず
国際化もいいが毒ぐも嫌いです
夢いっぱい孫から届くエメール
肩書が変わると人柄までかわる
絆とは何と温くて煩わし
仲直りしたのでお茶を足してやる

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

穏やかに笑う母にもあった過去
大胆な意見嵐は末座より
きんさんぎんさんいつも並んでいる笑顔
母さんも隅に並んで写される
めぐみ
光代
太一
紫香

大臣が並んで国の蛇とれぬ

人間に不可能はなしビル並ぶ

年の瀬に詠りが並ぶ夜の駅

四季折々銀杏並木は演じ切る

面目を保つ小皿を並べてる

簪袋並んで昔話する

並び甲斐あった第九に今も酔う

嫁が来て笑いの絶えぬ老いの部屋

笑いかけてふっと真顔になる話

人類の未来を笑う原子核

言いづらいことは笑顔でさらり言う

微笑みが言葉少なき娘を庇う

亡父に似た微笑み羅漢の中に見る

最後には笑う切札胸に秘め

さりげなく夫婦茶碗が笑い出す

その時は大胆だった地動説

大胆になれる根回し出来ている

岩風呂へ来て大胆な首が浮き

大胆な意見で破る古い殻

大胆な恋シベリアの土になる

愛弟子の大胆不敵頼もしい

てつちりを奢りましょうと大胆な

大胆に山を削っていく文化

人間を大胆にする銭の音

大胆に矯めて見守るあしたの芽

思いっきり笑っていたら泣けてきた

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

雨の日を嫌いな車持っている

ふさ子

豊太

輝子

由美子

紀久子

裕美

三枝子

晶子

柳宏子

恵

賢二

好笑

富美子

千寿子

佐代子

誠子

正博

三男

淳太郎

利治

和重

二南

英子

稚代

栄美子

公子

克子

白椿一期のいのち音一つ

卒寿とは思えぬパワーに希望湧く

処分した衣類に悔いが残る日々

佐賀みかん甘くて亡母の味がする

一肌を脱いでみかんは批評待つ

家計簿が見栄は捨てろと独り言

久し振る息子について歩く秋

観光の吊り橋夫が頼もしい

甘いぞと只一言の老父の愛

お迎えを弔句でかざる通夜の友

コスモスは招く桜は人を呼ぶ

乗り降りをする人もない無人駅

またしても追いまくられる夢をみる

座布団が温いと頭呆けて来る

古里の力士勝星まだ一つ

有夫恋マティソン郡の橋に酔う

川柳岩出

小倉

アサ報

来る年へ扉を開く文化祭

先頭が視界に見えてきたゆとり

汗積んで学んだ成果文化祭

和を深め秋を彩る文化祭

つなぐ手でバラを咲かせるイバラ道

ひとひらの善意が人の和を育て

先頭になって気がつく風あたり

ちっけな善意を入れる募金箱

先頭に立つ父さんの荷が重い

先頭を信じる母の力瘤

薫りなきアートフラワー競い合う

紀一

治幸

青琴

ちよ

弘

はる子

タミ

四郎

幸夫

久仁於

あき

圭

實

虹汀

高明

正剣

文化祭人目を引いた趣味の華

さりげない善意に満ちた手話とむ

優しさが善意の席に染み込める

先頭で失つていたい意地がある

先頭に立つ子がいないゲーム族

人様の苦勞知らずに先に立つ

赤い羽根善意の人の胸に咲く

先頭に立つと失うものばかり

先頭に立つとは限らない男

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

来年へ平凡だけを願う齡

来年へ踏み出す靴をよく磨く

八十路でも来年へ夢たんと盛る

来年のことはわからぬ老いの部屋

二次会について行くのも処世術

二次会の虎がダウンして月汚える

二次会の紅の模様で妻が妬く

二次会の財布論吉を妻に請う

二次会へツケがきくと雪崩れ込む

二次会まで覚えているが後おぼろ

はたる川柳同好会

井上

直次報

大往生でかいピリオド残し逝く

我が人生ピリオド打つてもよい年に

柿守よ ピリオド打とう荒れた年

ピリオドを打てば善人ばかりです

煩惱にピリオド打って除夜の鐘

さりげなく会釈でピリオド打ちました

英子

保子

ふみえ

紳一郎

千鶴子

哲雄

春子

アサ

与呂志

定人

鹿太

末貞一

尚利

紫香

夢之助

十四郎

弘治

向西

勇次郎

ただし

吉太郎

馬洗

正安

竹二

つよし

おだやかなじりオド淡く紅をひく
はやばやと後妻すすめる通夜の客
はやばやと遺言書いて無位無冠
妊娠しはやばやこの子東大に
はやばやと遺言妻に書かされる
いっぺんのデートはやばや心決め
はやばやと帰らせた客またすわる
気がかりではやばやと出て待たされる
慣習を破る辣腕上司来る
破れても亡母手作りの襦袢着る
縁談を破って彼へ立てた義理
張り変えた障子破った孫をはめ
りストラのあおり辞令を破り捨て
死ぬ時に破る手紙を持つている
破天荒 人間ドラマ生きている
明け方のしじまを破るオートバイ
老体が落葉しぐれに耐えて行く
荒れた世に僕は平穩無事だった
子も親も一晩だけのクリスチャン
生前葬した爺ちゃんから賀状くる

いずも川柳会

園山多賀子報

雲の峰から亡父のバイオリン
それぞれに越えねばならぬ峰がある
峰々に人の滑った跡がある
ピッケルを愛し歓喜の峰に立つ
うす切りの西瓜の峰が崩れそう
上昇気流チャンス掴んで峰に立つ
あんこう鍋コトコト外は雪

瀧小史 博直次 祥風 源一 英子 久子 キヨ子 螢柳 純次 眞郎 善守 よしろう 喜美子 保子 恭子 明光 方郎 まみ子 郁子

おかゆ鍋コトコト快復期を歌う
鍋の底磨いて師走黄昏れる
ストレスがとことん鍋を磨かせる
紙一つ戦車も千羽鶴も折れ
紙ばかりですと小さい義理包む
旧姓に戻る一枚の紙き
たたくまに伝統守る手漉き和紙
かたくなに男の嫌う白い紙
約束は白紙に還す牡丹雪
紙一枚人生変えた辞令出る
お握りがこんな旨い五本箸
箸を揃えて次の答えを待っている
別姓は意識もしない夫婦箸
箸置きが小耳に挟む裏話
夫婦箸時にはからむこともある
末席で本音喋った箸枕
塗り箸で掴む競技の豆の数
噂が走る女の多い街
子よ走れ二十一世紀へ走れ
走り過ぎ心残りがついてくる
運動会歳考えてから走る
除夜の鐘もつ子ねずみが走り出す

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

永田町にかぶせる蓋が見たらぬ
少しずつ老後の塩を加減する
いじめる塩の濃度が測れない
塩鯖を焼いてミークと夕食に
甘塩の男がはじき出されてる

芳子 篤子 治代 ちかし きみえ 昌枝 満江 肇 芙佐子 勝水 流石 文子 多賀子 まこと 明子 寿美 おしえ れいじ 青湖 しま子 正朗 茂美 日枝子 惠子 壽々子 亜弥 蘭

食塩も戦を越えて自由になる
塩壺が底つかないよう気をつける
泣き別れ手塩にかけた牛の背な
一つまみの塩がいつでも不足する
塩出しを塩として私をやらかに
当り前に塩のお世話になつて
塩分でホウレン草をよりあおく
塩味も薄く一病飼いならす
縁うすき孫あり塩からっ子のまま
ひとつまみ塩が足りない主人です
塩少し足せば私の味になる
心に沈む塩はからいと限らない
美空ひばりはいつも私の塩だった
しばらくは塩ふりかけて石になる
塩を焼く自分の骨を焼くように
粗塩の粒こそこの情けにて

はびきの市民川柳会

榎本

日米に宣戦布告基地の島
APECで挽回はかるノック知事
親四人送ってゴール見えてくる
伴奏が合わせてくれ鐘一つ
役終えた 妻のいきがきすべてです
人生の裏読むポスト赤い顔
庭の菊どれも私の彩に咲き
ウインドウズ平和な列と見ておこう
叙勲には縁のない身の菊いじり
平成七年ジングルベルが唱えない
哲学の道で出会った金髪の人

朗子 八重子 すみゑ 春枝 保子 千春 ふみ 花子 紫布 天雀 晶子 てい子 瑞枝 夕子 荒介 風人 かつみ 昭平 和風 四三郎 俊男 忠宏 辰子 みつこ 聡 美代子 利武

大つばらにヌードを覗く独り旅
中国路秋一番の錦着る

核捨てた地球がさわやかに笑う
だるまの目入れる弁舌さわやかに
願ひ事拝んだ後に追加する

灯が揺れて拝む遺影に秋深む
拝み倒された和解の淡い顔

仏壇を拝んでつづがない暮らし
何にでも両手合わせる無信心
病んでから再起ばかりの夢を見る

もういつべんやれと仏間の灯が揺れる
マラソンへ旗振る街の平和な日
目を入れるまでのタルマの低姿勢

隙のない姿勢を取っている辛さ
アングルを変えても隙のないモデル
肩書きが付くと姿勢も気をつかい

矢面に立って姿勢を試される
魂胆は見抜けなかった低姿勢

京都塔の会
松川 杜的報

栄

波留吉

江美

磯

主坊

年代

武庫坊

弘直

諷云児

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

末一

洞庵

泰子

志洋

敏

ダン吉

吐来

敏子

たけし

晋

金太

扶美代

さとみ

重人

希代司

絢子

一壺

りつえ

整地され建つまで土の深呼吸

姉夫婦に会えば尾をひく亡夫の影

ただ今の寒さへ柚子湯沸いている

幸祈る顔一人ずつ書く賀状

なけなしの財布をはたか年の暮れ

変な国 総理が知事を提訴する

平成七年なんやかんやであしんど

名刺持つ娘も企業戦士なり

変化球を好んだ頃をなつかしみ

おでん煮て妻はうきうき旅仕度

それ見たかもんじゅもんじゅと変な名だ

ひそひそと老母と語らう笹の風

ふと我にかえれば虹は消えていた

無視された腹いせ小石強くける

弓に矢をつがえて狙うものがない

一帯の仮設グラウンドだった冬木立つ

十二月薬屋さんも風邪をひき

サークル檸檬

小林

一夫報

水たまり跳んでみようか 靴よ

嘘二つおいで靴音遠くなる

ガラスの靴のサイズが合ったことがない

もつちよと歩いてみた靴に会う

ヨチヨチの靴は日ごとに弾み出す

目をつぶること多くなり十二月

スロースロークイックのない我が歩幅

嘘っぽい話に結構のついている

青い空の下で君をうらさる

一番好きな場所は誰にも教えない

さと美

絹子

英壬子

光子

久峰

正坊

恭一

恭昌

千梢

みつ子

鬼遊

志華子

希久子

真砂

楓楽

宏子

佳秋

坂の街で乳母車を押していたおまえ

父と子のいて話すべきこともなし

今になって蠢く氷河期の卵

お守りをこっそり持っている力

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

風船と気楽に飛んで消えた人

主婦業は気楽というて叱られる

朝寝して気楽な妻で遅刻する

才能のない気楽さにホッとする

老いふたり気楽に小銭ためている

気楽さはやはり我が家の古畳

孫の指数える先の夢を見る

輪廻の鱗数える仏の手を借りる

逝きてはや満中陰の日が近い

娘の年を数え我が身の老いを知る

老いたとて数え切れない夢を抱く

数えてはまた折る鶴に手を合わす

過去はもう数えはしない紙人形

あれからは逢う日数える細い指

一つだけ傷口のない傷がある

傷口がやすかに痛む青春記

傷口が時々うんで喋り出す

傷口の深さへ春のもどり雪

傷口をそっと隠してくれた人

感性のままにはベンが走らない

赤い字で別れのベンを走らせた

私の心知ってるボールペン

薫

正坊

千代

智子

荇美子

陽子

草丘

螢

きみえ

茂美

ひふみ

雄々

清子

房子

早苗

一葉

みえ

邦代

静江

登美子

蘭水

たつみ

満江

多賀子

静恵

友子

桂子

火種持つ女のペンはよく走り

始末書は書き慣れているボールペン

門の中から和やかな出雲弁

茜さす門から亡友が出て来そう

門番に二度の勤めをする靴

骨埋める覚悟があつて門くぐる

門もまた立派で広い空がある

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

老夫婦息急き切った遍路坂

岐れ路一息いれて語り合う

秋の午後一息入れて女偏

雪霏霏と紙人形と息が合う

吐く息に意地のかけらを忍ばせる

女秘書ひとりになるとポーズとる

風呂上りのポーズ ビカソも真つ青に

五百羅漢の五百のポーズ空の青

すい甘いすべてを知った老いの道

真実の奥を知る道険しすぎ

駅までの道が年々遠くなる

種運ぶ風には風の道がある

つづる道へ男は賭けている

外反拇趾 酒の癖まで父に似る

一枚になった曆に急かされる

山路来て地藏菩薩に掌を合わす

りんごの花をはじめて知った十六歳

真つ二つに折れた煙突月をのせ

新米を掬うてのひらあたたかい

千恵

喜美子

義芳

年代

正子

すみ

まさお

鹿太

武庫坊

渉

瀧小

吉太郎

杜的

昌子

紫香

澄子

光穂

伊三郎

比ろ志

一笛

叮紅

米子

太泡

鶴丸

与根一

佳江

秋にほつとかれたはにかみ屋の紅葉
雑魚なりのポリシーを持つ年の暮れ
形相を変えてブライド發揮する
独り身の掌に焼き芋のあつたかい
雑巾に下ろさるる米屋の手拭い
しみじみと話す言葉にだまされる

川柳大阪

坊農

柳弘報

飾り付け柿も一役買っている
生きがいを共有できる人に逢い
茅葺きに風情を添えるつるし柿
沖繩のリーダーへ私も味方です
リーダーと言われてまずは世話係
見事です渋柿だから眺め良し
黄昏のミナミのネオン泳ぎたい
黄昏の少し手前で悩んでる
指きりは黄昏時の待ち合わせ
一言が効きすぎ絶えず間引かれる
黄昏が二人を映すベイエリア
妻の指私のために柿をむく
黄昏れて女は夜の化粧する
黄昏れて漁火にわか活気づく
セルスの無駄足今日が黄昏れる
黄昏に鼻歌が出る明日がある
別天地探し求める目が生きたる
黄昏れてパートの母待つ影が伸び
リーダーになつて肩幅広くなり
二日酔い黙って母が柿を剥く

キク子 正治 二南 源一 薰 白溪子 河南子 太元 叭笑 多香 かよこ 喜楽 良花 美子 一介 川童 須賀夫 青道 司 雅果 しげお 柳昌 まつお 比呂志 ダン吉

リーダーは小使いですと嬉しそう
リーダーの影で黒幕糸を引く
夕闇の黄昏ときに妥協する
黄昏へ子供と歌に交けて行く
大阪の味だこ焼きに黄昏れる
水死した私が貰う保険金
リーダーを立てる仲間が目が熱い
人生に黄昏はない辞書を引く
木枯らしに耐えて干し柿出番待つ

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

私なら迷わず選ぶ尊厳死
日本の地下にマグマが動きだす
あこがれは子供の夢だすてなさい
親切へ涙が先に札を言う
あこがれはボケずかわいいおばあちゃん
年の功などとおどけてくさるな
結局は親切だった北の風
ふところにもいつと挑戦状がある
Uターンきつと決断しただらう
決断をして松茸を買いました
束の間の温いふところねらわれる
決断をするから三日待ってくれ
ブッキラ棒な親切が身にしみる
ときどきは無茶も許した逞しさ
別嬪に親切なのは生まれつき
決断をしての涙は美しい
母さんが無茶をするなど銭持たす
ふところの忍の一字が縫せて来る

一步 鉄心 与呂志 美津留 洛醉 本蔭棒 金太 重人 柳弘 杜的 小生 寿満湖 柳風 玲泉 明治 節子 秋女 かつみ 石花菜 孝恵 きみ子 喜与志 螢 博丈 勝見 玲子 幸子

川柳藤井寺

高田美代子報

あこがれのハイビスカスも色褪せた
あなたののは親切でなくお節介
水やりを忘れた秋の実にわびる
百歳長寿秘訣は別にないと言ふ
宴席を下戸が彩る隠し芸
ピカソの絵解つたようで解らない
意地になり只のバス待つ五十分
老人会ヤッサモツサのバス旅行
バスツアーストレス消した老夫婦
サア大変乗り間違えたバスツアー
手を挙げて止まるバスです田舎です
大阪のバスですられたあの財布
バスツアーみやげのカニと寝て帰る
紳士淑女飯面を脱いで深夜バス
大穴を狙つて別の穴を掘る
無視すれば狙つた獲物ついて来る
狙つては馬が後ろに走り出す
狙つたら手に入るのがばくの主義
大きいこと狙つた代償が残る
金魚反転狙いが逸れたかも知れぬ
落ちてはいる財布をそつと踏んでみる
淋しさは風に委せて落ち葉踏む
僕の家他人が値踏みしてくる
たましいは売らぬ踏み絵にひきますく
無駄足を踏んでも希望捨て切れず
的になる男の影を踏んでいる
踏み板が外れてからの妥協ぐせ

季芳 弘朗 与呂志 史郎 恒雄 敬一 三郎 キミ子 一屯 悦子 宗一 愛子 和樹 トミ子 アキ 昭水 みよ子 美代子 志洋 鐘造 正一 和子 吸江 花梢 絹子

踏んでいる地球を壊す音がする
踏みつけた倍の力で耐えている
押しピンを自分で踏んだ腹の虫

美房
扶美代
しげお

川柳茗茶の会

宮崎シマ子報

借りに来た嘘を見抜いて嘘を言う
クリスマスえせクリスマスチャン力づく
第九と師走結んだわらべ声
めぐりめぐり今年の旅もあと少し
肌着など買いまして今年が明けるから
地獄耳師走も休みなく突る
日だまりを求めて鳩も十二月
煩惱の渦の中なる十二月
木枯らしが哭いてわめいて十二月

清芳
香住
留吉
千枝子
シマ子
喜美子
欣史子
田実子
弘直

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

木枯らしへ新聞くばる赤い類
木枯らしへ古い甲羅が軋みだす
雪と泣き雪と笑ったもがり笛
木枯らしへ首だけ前へだしたが
木枯らしへ向かう若さにある火照り
ありがたい法話にあくびしてしまい
末席の悔りがたい生あくび
味方の中で思っぞんぶんあくびする
かばのあくびを覗きこんでいる歯医者
雑学も疲れあくびの流つづく
あくびしたくしやみもとと保育室
芸人は野次より怖いあくびです
学校前の地蔵あくびの暇がない

一風
美津留
森子
洋
美幸
弘直
年人
夕花
度
泰
春子
三男
シマ子

愛贈る母は代償など言わず
贈りますきつと貴方に似合います
母さんに贈る言葉は無理するな
庭の柿話したくってお隣へ
走らずに残る人生たのしもう
つつ走る若さ案じる母の文字
伴走の妻とのり切る向い風
白衣ぬいだ妻にはんどのりある色気
本心をのぞいて白い風に逢う
目覚めれば新聞がある白い朝
ああむきになるのは潔白なんだろ

川柳塔鹿野みか月

土橋

せせらぎに耳を傾け生きて
何事も知らない振りをして
川幅が広くなるまでいがみ合
川上で捨てて川下から拾
孝行のかからを流す故里の川
老木が化けている大きな太鼓
居酒屋の串に天下を刺して酔
七重の膝八重にたんで嫁もら
豆絞りおとこ因果の舟を漕
ありつたけの知恵を絞って今日を絞
卯の花を絞り粕とは失礼な
賀状に画くねずみが謀反して困
寂しに画く鼠一族と住んでいる
よく見れば素顔の方がうんとよい
いい心抱いた素顔は美しい
札束を積むと素顔が見えてくる

欣之
たもつ
東雲
宏
和子
頂留子
隆
ますみ
朝子
柳伸
柳宏子
螢報
早苗
百合子
実満
みさ江
三千代
喜身志
明美
幸枝
野草
汲香
節乃
かつ乃
完司
武子
八重子
くに子

木枯しに素顔のままで立っている
まん中に素顔きれいな妻がいる
軒かき眠りこけてるのが素顔
素顔ならミス鳥取に勝っている
あしたから師走だなあと言つて寝る
今日もまた明日の夢をみなくなる
寒雀あしたのえさを貯える
重苦しい話はあしたへとのぼす
残像の椅子にあしたもぶらさが
何してもあしたに回す癖がある
新しい俺と出会えるあした待
骨の音あした砕けるものじやない
あした着る服選つて見る姥さくら
意地悪な風があしたを暗くする

とつとり川柳会

武田

帆雀報

散り急ぐ紅葉に未練断ち切れぬ
かさこそと紅葉散る音冬を告げ
秋風の序曲が好きかな紅葉よ
白いページに紅葉が燃える日記帳
紅葉の残りへ君が美しい
紅葉散る一期一会の舞をして
誰の名を呼んで紅葉は散るのか
地に還る紅葉死ぬなと言っている
大連れて銀行へ行く十二月
へそくりの銀行算簡の底と決め
一円のエラー銀行灯が消せぬ
口下手の銀行員に預金する
銀行へ週刊誌見に行つてくる

睦子
はるお
弘子
大漁
きみえ
香葉
久枝
公枝
天涯
和子
本丸
諷人
きみ子
智恵子
粗粒
一枝
明美
ひろ子
圭一郎
静生
悦子
螢
舎人
銀嶺
喬水
喜与志
一京

世の中が狂い出したか銀行破産
銀行と共倒れる義理はない
田を売った金を銀行吸ぎに来る
銀行が潰れたそうでおめでとう

一夫
正和
帆雀
とみお

居酒屋の口が先に出る
居酒屋の世間話に棘がある

山人
行男

居酒屋につけを払ってまた呑んで
居酒屋の穴場誰にも教えない
居酒屋でチビリチビリもまた人生

多哥由
輪多朗

居酒屋から黄色な声が聞えます
雑学の宝庫居酒屋捨て切れぬ
居酒屋は泡吹く雑魚の吹き溜まり

和歌子
孝男
一瑤

倉吉川柳会

谷口

次男報

ねずみ年わたしは猫が大嫌い
十二支のトップ負けずらいのくせが出る

ゆり子
喜美子

今年から札束くわえて来るネズミ
福ねずみ嫁は我が家に連れて来た

独歩
康子

子福者のねずみが春を待っている
ハムスター何も知らずに実験台

よしえ
康子

同居したネズミ可愛くなってきた
子ネズミの初夢猫に鈴付けた

サエエ
和枝

ご先祖は大黒さんを助けたネズミ
昭和史を繰るとネズミの音がする

菩句
御前

猫よりもねずみの世だよチューパツパ
完了と一はしめを兼ねる子年かな

寿朗
次男

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

中傷ものんびり生きて気にもせず

まさ

ドッコイショ掛声で立つ重い腰
大虎小虎街にあふれる忘年会
真直ぐに生きたつもり背も曲り
香水がロビーの人ごみ縫うて行く

末貞一
向西

スケジュールに追われ重たい十二月
十二月自分の影を確かめる
忠告へ耳を貸さないのも若さ
忠告を素直にうける紙コップ

勇次郎
六浦

忠告の骨が刺さって動けない
なんとかなるだろう余力は溜めている
人徳に魅せられ人が寄って来る
血の絆つかめぬ孤児の重い足

澄子
一閑

七光り親父の駒に未だ成れず
嫁ぐ娘がこっそり盗む母の味
こだわりの料理は客を選んでは
前列で重い荷物を持たされる

夢之助
十四郎

鱈一枚手に求人の列にいる
預け先比べて悩むはした金
大粒のイミテーションがよく光り
それぞれの持ち味あって比べない

夢之助
十四郎

主婦の列きつと安売りかもしれぬ
整然と直立不動兵の墓
いらっしやいませに陳列からはなれ
列島ごと掃き清めたい年の暮れ

昌子
十四郎

最前列で風の痛さに耐えている
整列してる電車入って来るまでは
条件を比べる寒い風の中

弘治
正治

川柳塔おとり
上田俊路報

不覚にも豆腐のかどがぶつかった
冷たい手炬燵の柱握り締め
流れ星冷たい夜空どこへゆく
子の寝顔冷たい仲を温める

冷や飯を食った無念を糧にする
白日にさらす心のわだかまり
言い過ぎて後悔胸に夜が白む
白い歯の奥に笑いが溜めてある

真一
崇

もつ白に戻れぬ道を曲りきる
年金をなだめすかし年暮れる
遊園地暮れてブランコ風に揺れ
盆暮れになると肋が軋み出す

手抜きして暮れのポーズを整える

千秋
余志身

手抜きして暮れのポーズを整える

手抜きして暮れのポーズを整える

静生
由多香

手抜きして暮れのポーズを整える

手抜きして暮れのポーズを整える

孝子
幸次郎

手抜きして暮れのポーズを整える

手抜きして暮れのポーズを整える

文香
春香

手抜きして暮れのポーズを整える

手抜きして暮れのポーズを整える

満州
楓

元氣印の家でクスリが風邪を引く
二日三日ふきんがかわく妻の風邪
流感の床にも燭が顔を出し

無理をしたなと風邪引いてから思つ
あの人がつつした風邪で憎めない
健康の過信不覚に風邪のつけ

たまさかの風邪鬼のかくらんだと言われ
夫婦です風邪も仲良くひいてます
久し振りに逢うたら風邪をつさされる

あの女の土産の風邪を温める
あの時の風邪がなかなか治らない
復興の神戸に流感容赦なく

せきひとつづいてくれる夫がいる
風邪ひとつ引かない人が先に逝く
松あけるとつやら風邪の置土産

鈍くさい正月早々風邪をひく
風邪にでもならねば主婦は寝ておれぬ
玉子酒あるから風邪は苦にしない

貧乏神と一緒に住んで風邪ひかぬ
身に覚えのない濡れ衣で風邪を引く
風邪薬のんで行きやと母の声

どちらかが風邪だと夜が長すぎる
住
大袈裟な風邪だと妻は心得る
肝心な時に風邪ひく癖がある

人形に風邪をつつしている少女
父ちゃんの風邪治るまでやかましい
風邪ひいて漫画の本を読んでいる

人

美代子

絹子

吐来

智子

澄子

友熙

房子

柳宏子

三男

勇太

英子

柳弘

朝子

房子

千歩

落児

シマ子

美津留

弥生

風云児

鎮彦

一步

庸佑

落児

雅文

月子

しげお

風邪三日神が休暇をくれたらし

地
風邪ひきの功罪メロン二個届く

天
学級閉鎖風邪引かぬ子が喜んで

軸
病院が混んでる風邪も流行ってる

兼題「芯」
小出智子選

安らぎが欲しいと思う花の芯

えんぴつの芯まるくなりなごみだす

鉛筆の芯丸いまま年が明け

鉛筆の芯がまさぐる夢の跡

ポケットベルを芯に稼いでいる男

鉛筆の芯が妥協を許さない

つますいた日から狂わぬ芯になる

決心を促している帯の芯

灯芯を替えた貧しい過去を持ち

西高東低灯油の芯がすり切れる

向かい風芯の強さを見せる母

耐えている分だけ芯が太うなり

逆風に芯の強さを試される

どんぐりが揃っているが芯がない

エンピツの芯尖らせてある文机

七草やかんだの芯に届きけり

ひっそりと咲いて花芯を覗かせぬ

どっかりと家族の芯に母がいる

芯のゆがんだ独楽だと思ふ老いの足

善人と思ふが芯のない男

楓楽

澄子

東雲

笛生

いわゑ

いわゑ

絹子

吐来

英子

寿美

弥生

射月芳

笛生

度

庸佑

寿美

久峰

三男

冬葉

薰

稚代

風云児

文秋

正坊

いじめにも耐えて子の芯太くなる

芯のない男火の粉は潜れない

喧嘩したあとのご飯に芯がある

母さんの芯は集約力を持つ

芯のある男時どき横を向く

わたくしの芯は尖ってゆくばかり

リストラに芯からゆれるお父さん

HBわたくしの芯硬からず

カルシウム不足か芯のあるジョーク

ほんとうのことを言わない花の芯

エンピツの芯に笑われそうな字よ

住
花の芯嫌いなひとはみな嫌い

6Bの芯の強さで書くコラム

たとえばの話の中に芯がある

芯一枚抜いたスーツが身になじむ

芯の強さはめられたのけなされたのか

人
エリートになろうと矢張り

やけに芯が折れる日だ風が冷たい

天
実験が続く芯まで冷えている

軸
わたしの芯を吹き抜けてゆく北の風

智子

グン吉

白兎

雅文

森子

楓楽

希久子

房子

しげお

鬼遊

鬼遊

こころ

楓楽

恭昌

勇太

保州

洋敏

落児

あやめ

鬼遊

こころ

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

軸

僕等にも出来ると手話の瞳が光る 柳宏子

兼題「コーナー」 橋高薫風選

コーナーに岩下志麻を掛けて初春 桂香

コーナーに昨日はあったお正月 茜

迷いこむヤングコーナーあらあら 朝子

コーナーを出たまえ春はすぐそこに 鹿太

百貨店まず特売コーナーまで昇る 一步

七草のコーナーが混む百貨店 歌子

新刊書コーナーに寄る帰り道 天笑

古書コーナーおもむろに眼鏡かけかえる 一步

コーナーに花 母の書齋は台所 満津子

コーナーに夫の部屋とる青写真 英子

リストラの風コーナーで見えています 鬼遊

わたしにもコーナーがある路地の裏 佳秋

コーナーの隅にわたしをぶらさげる 美代子

コーナーでゆったりしてるのは母だ ダン吉

ベテランがコーナー一点だけ紋り 悟郎

コーナーを回ってからの底力 弘直

四コーナー抜けると人馬風になる 洋敏

第四コーナー思わぬツギが待っている みつ子

真実を知りたいコーナーをつつく 重人

コーナーで待っていたのはテロリスト 正坊

申しわけに紳士コーナー置いてある たもつ

落し物コーナーにいる元社長 久峰

コーナーに明日を探る顔がある 吐来

コーナーに座れば君がよく見える 金太

人生のコーナーごとにある踏絵 三男

シヤネル五番コーナーが春になる 千歩

第三コーナーまで幸せな夢でした 一三

コーナーでちょこんとめしをついでいる 東雲

コーナーの派出所いつも人が居ず 紫香

コーナーをまがると息子の旗が見え たず子

宝石コーナーいくつになってもまだ女 諷云児

シニアコーナー母にも好きな人がいる たつお

佳

コーナーのこけしと旅は続いている いわゑ

夫の知らぬコーナーが胸にある 智子

幸せのコーナーに居て喉かわく 希久子

コーナーの暗がりにある軍歌かな 薫

やわらかい刺客に出遇う曲り角 朱夏

人

コーナーに小沢一郎立っている しげお

地

コーナーが似合う人生のように ルイ子

天

悠々とコーナーもなく揚子江 雅文

軸

サイン会書籍コーナーにはばな 薫風

(清記—希久子)

月間賞杯永久保持者決まる

平成7年度本社句会の月間賞杯永久保持者は、小池しげお氏（松原市）に決定し、2月本社句会で表彰する。

路郎賞

候補作品中間発表

川柳塔賞

平成七年九月号―十二月号

路郎賞候補作品

板尾 岳人

花道から遠く外れた平泳ぎ 舟渡 杏花

引き出しの死角にしがみつくと昨日 林 瑞枝

爽やかに父が笑った母が笑った 土橋 螢

愛と愚痴こまめに巻いた糸車 一戸 ツネ

花を貰う淋しい夜でないように 木本 朱夏

空カンを蹴りたいだれも見ていぬか 仁部四郎

鳩尾に鬼いっぴきを飼ひ殺す 高瀬 霜石

恋そめし頃ありありと虫の声 春城 年代

皮靴を履き常識を尊重す 新家 完司

ストローの殺意 氷に分け入って 山口新子

赤い靴はいてそれから迷い道 大角 幸代

たくらみは決して持たぬパンナイフ 福井 桂香

けんめいに歩く 歩くと何処へ行く 堀江 正朗

荒海を漕ぐには權が長すぎる 寺沢みどり

人恋えば母という字も揺れてくる 西原艶子

小池 しげお

夏椿見られていると散りません 滝北 博史

迷い子の話一つも嘘がなし 片上 明水

どうしてもカラスの黒が気に入らぬ 春城 年代

悪人になって見事な恩返し 土橋 螢

これ以上言うと心が錆びてくる 野中 御前

老母の便りに暑かった夏書いてない 小林 妻子

無理したらあかんが無理もせなあかん 稲本 凡子

受け皿を妻は大事に持ちつづけ 神夏磯典子

何事もなかったような鍋の位置 牧洲富喜子

豆大福が好き人間がもう好き 舟渡 杏花

故里の話が好きなら蕎麦枕 門谷たす子

樹のことは鳥のことは難しい 新家 完司

本当の辛さは今も話せない 山口 美穂

蟻の列未だにボスを見ていない 前 たもつ

吉岡 美房

哀しみの胸にも深い天がある 小谷美ツ千

小島 蘭幸

ラストボール今の君なら三振だ 武田 帆雀

薬屋でもらったサンプルでなおる 安藤寿美子

牛は静かにベーターペンをきいていた 江原とみお

瘦身も良し荒波をすり抜ける 牛尾 緑良

二期もボールを蹴ってばかりかい 土橋はるお

マヨネーズしぼり四十二歳かな 田中 叶

定刻にきつちりついた霊柩車 吉川 寿美

恋そめし頃ありありと虫の声 春城 年代

ものぐさな蟬は隣の枝に飛ぶ 森川まさお

洗い髪 白をまとうて今日おわる 林 荒介

見た目には何も変らぬ昨日今日 都倉 求芽

出過ぎたが一途な杭で打たれない 伊藤寿美

妻の音私の音もして我が家 竹治ちかし

決断のまだ生け垣の続くなり 藤井一二三

大切にされて犬とはおもてない 玉置英子

美人見て元氣出るとは頼もしい 川村 映輝

一輪の薔薇が凶器になることも 榎本 薩児

脇役が光ると強い風あたり 川崎ひかり

石ひとつ積んで明日を軽くする 尼 れいじ

すんなりと引けば女が廃れそう 米田 幸子

胃の底でなにかが今日も破裂する 高瀬霜石

笑わねば淋しい笑うとなお淋しい 吉田あずき

これ以上言うと心が錆びて来る 野中 御前

更衣おとこひとり脱ぎ捨てる 木本 朱夏

人生に上手も下手もないだろう 高瀬 霜石
樹のことは鳥のことばは難しい 新家 完司
介護する方もされたいほどの齢 宮尾みのり
北はもう大雪ネコが膝に来る 林野 魁光
末の世の電光ニュースの文字ひらひら

河内天笑

桑原 道夫

擬餌針に青い背広の子がかかり 林 瑞枝
一輪車漕ぐ両の手は翼です 斉藤 島
女房にラブレターでも書いてみよ 榎本路見
久びさに逢うて優しい人やさし 渡部さと美
わがローン終わりはじまる子のローン 岩津ようじ

二学期もボールを蹴ってばかりかい

土橋はるお

眼裏に蛍の灯る危うい夜

木本 朱夏

感動を冷やしてしまふコマージュ

相馬 一花

壺焼に砂の混じれる団欒や

桑原 道夫

坊様の男臭さも浮世かな

岸野あやめ

美しいだけでは蝶も蜂も来ぬ

石川侃流洞

子が巣立ち妻とジャンケンばかりする

高瀬 霜石

よく出来た人と言われてなるものか

宮尾みのり

倒されてやつと安心して眠る

新家 完司

人間は悩みトンビはピーヒョロロ

山口高明

川柳塔賞候補作品

川島 諷云児

吹き降りにやつぱり欲しい男傘 藤田 泰子
思春期という腫れ物に触れない 小寺 九
人前でしか使わないねえあなた 早川 盛夫
妻である自信余所見は許さない 水上 美記
つくろってしばらく行こう破れ傘 安宅美代子

綻びをねぎらつてから暇を出す

武島ちよえ

急いではるらしい木魚が忙しい

太田 藍子

親らしい親になるのはむづかしい

植田一京

ポリシーのわかる男に旗を振る

相馬 銀波

酒飲みが嫌いなくせに酒は好き

田中八太朗

定年後やつとかなった差し向い

山田 葉子

泣き顔を洗いたれた倦怠期

北川とみ子

つますいた石の形は忘れまい

傍島 克治

取り巻きの中に刺客がいた誤算

三浦 強一

榎本 吐来

政見放送 住みよい国になりそつた

宮本かりん

喪が明けて女にかえる耳飾り

国米きくゑ

顔見たらやつぱりできぬ仲直り

妹背尽呂久

きのこの顔をこしこし洗面器へおとす

高田美代子

新同人紹介

古川 奮たけ水すい

— 萬的・白溪子・武庫坊推薦 —

大石 あすなろ

— 妻子・寿恵子推薦 —

福原 悦子

— 妻子・玉恵推薦 —

福原 辰江

— 妻子・玉恵推薦 —

履歴書の筆を買われた車椅子
まったりと生きおきにと言つて逝き

安宅美代子

大声の方がどうやら負けている
清濁を飲んで夫婦の城守る
一人芝居に喝采贈る鳩時計
二度の職 破格で買うてくれた腕

古谷ひろ子

夫婦別姓わり勘で飲みにゆく
大漁節唄つてガイド勤務中
袈裟たたみ住職人の子にもどり
あした行くヨ豆台風のいい電話

山本たけし

遺伝子に背いた孫の頼もしさ

三浦 強一

宮口 笛生

紙人形胸のときめき知らぬまま
仏さまに熟れたら貰うメロン買う
アンケート何かくれそうだから書く

塩路よしみ

蹴つてほしそににあき缶立っている

高野 不二

元氣ないその理由聞けば銭がない
一兆円フウンと実感わいて来ず
夕立は大坂城を丸洗い

宮本かりん

全身の力が抜けた無事の報
心配の要らぬ夫で物足りぬ
豊作が自然に出来たように言い
満ち足りて見ればすべてが美しい

木村 親路

吉村さち子

言いきつてしまえばケリがついたのに

高田美代子

病名を勝手につけて悩んでる
入れないと通さぬ位置に立つ募金
幸せはやはり笑顔に寄つてくる

和田 和風

小林 由多香

近すぎて妻の長所がわからない
四畳半 女一人にいい広さ
政見放送 住みよい国になりそうだ

田辺 鹿太

家中をピカピカにして一人居る
物忘れ歳のせいにはしたくない
正直で咄嗟の嘘が出て来ない
たつた二人の意見が合わぬ晩御飯

宮本かりん

医者言う通り生きてても味気ない
自動化が進み無口になって来る
過疎に嫁 村祭りより盛りあがり

和田和風

三浦千津子

福本 英子

国税も市税も払い職がない
仮りの地の四角い部屋星の白い闇
蹴つてほしそににあき缶立っている

田辺 鹿太

犬かきで泳げる広さしか知らず
闇討ちがあるかも知れぬ禁猟区
薄っぺらの紙で男が飛ばされる
聞かせたい事は小声で話し合ふ

宮本かりん

国米さくゑ

丹 下 美津子

宵明・春嶺・みのり推薦

井 上 源 一

柳宏子・諷云児・正坊推薦

久 保 まさお

薫風・いわゑ・みつ子推薦

急いてはるらしい木魚が忙しい

忠孝が風化してから来た平和

不覚にも虫の居所まで読めず

正直へつけ込む貧乏神もいる

虫一つ付かぬと言うも不気味なり

着飾って黙つていれば美しい

疑いは晴れたが戻る席がない

迷い箸にがい話をつまんでる

太田 藍子

谷口 義男

岸本 孝子

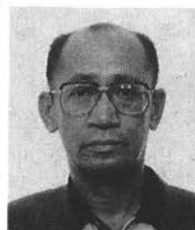
與田 明

植田 一京

村上 剛治

石川 勝

中嶋千恵子



片上英一さんを偲んで

宮崎 シマ子

徳山院雪歌峰英居士

片上英一さんがこのような名前に変えられた。つい一か月前、「川柳クラブわたの花」で皆さんと一緒に勉強をし、昼食をして二次会はカラオケといういつものコースを楽しみ過ぎておられたのに、十二月二十五日、六十一歳という若さで、脳内出血のため、急逝されました。追悼文と言われても、まだ真実とは思えません。二十二日の忘年会の時、病篤しということでしたが、新年会にはよくなられて出席されると思っていたのに。

初めて英一さんとお近付きになったのは、昭和六十二年、八尾中央公民館の川柳講座、講師・高杉鬼遊先生に入って来られて以来です。この講座は、通信講座ですので、お逢いすることはなかったのですが、研修旅行があって短歌の部から来られた英一さんとパスの中ではじめて顔を合わせました。温厚篤実な方で、口数も少なく、それでいて何事もテキ

パキと片付けられ、良い方が入って来られたとみんなが喜びました。そして、すぐにも次のような句を作っておられます。

ロボットの手足となっているバート
鈍行がゆっくり特急待ってやる

もひとりの自分が他人づらをする

やがてこの講座が廃止となり、主だったものが運動して「川柳クラブわたの花」を自主的に運営することになり、その時も「八尾市との手続きや難しい問題は、ボクが引き受けるから」と優しい心づかいをみせてくれました。心優しい句も英一さんのお得意でした。

口げんかジャンケンポンとゆかないか
愉しからずや六月の雨に唄えば

君も寒いか鍋焼鱈佃でも食おう

このころから活動範囲も広められ、「翠洋会」にも「若葉の会」にも参加され、平成三年三月、川柳塔社同人にもなられ、ますます句に磨きがかかり、作句や人様とのお付き合い

にも熱を入れておられました。たまたま体の不調を訴え、医師に診て頂いた時はかなり腎臓が悪く、週に二回は人工透析が必要となりました。しかし、病院通いの合間にも、翠洋会やわたの花は休まれることなく、続けておられました。

わたの花の句報も英一さんの手作りで、カッットを入れたり、新聞のコラムを挿入したり、いろいろ工夫して楽しませて下さいました。短歌の方も最後まで続けておられましたように、カラオケもいつも大きな声で、楽しそうに歌っておられました。

最近の英一さんの楽しみは、初孫の成長で一歳何か月かの可愛い盛りの子です。で、さぞお心残りであったと思います。

冥土への土産はなしがまだ足りぬ

英一さん、お土産が足りなかったら、取りに帰って来てください。皆で待っていますと願っても、どうにもなりませんね。一足先に逝かれた葉先生をはじめ、そちらの皆様と仲よく川柳を楽しんでください。

心からご冥福をお祈りいたします。合掌。

大器晩成さていくつまで待ちましょう

じよんがらに哭いているのは雪女

骨肉やボタン一つのかけ違い

エデンより追われて旅はまだ続く

柳界展望

成7年度の十秀が決った。
最優秀句は次のとおり。

〈橘高薫風選〉

サティアンに一本もなし

鯉のぼり 榎山 隆

〈片岡つとむ選〉

産声を育児日記にちりば

める 藤井 綾子

★京都塔の会は平成7年度

の年間賞を決定、12月句会

で表彰した。カップ賞は松

川杜的氏、優秀賞は①山本

磔②松川杜的③都倉求芽④

松川芳子⑤川島風云児各氏

★西宮北口川柳会は平成7

年度の年間賞を決定、1月

句会で表彰した。最優秀賞

は牧瀬富喜子さん、優秀賞

は①田辺鹿太②牧瀬富喜子

③奥田みつ子④西口いわゑ

⑤門谷たず子・田中正坊の

6氏であった。

★川柳サークル卯の花は平

成7年度の年間賞を決定、

1月句会で表彰した。優秀

賞は①川島風云児②山本磔

③河瀬芳子④田中薫⑤小池

しげおの5氏であった。

★川柳公論の1995年度

各賞が決ったのとおり決定した

〈大賞〉

ガラスの蝶の透ける血の

色 海へ海へ 本多洋子

〈めやなぎ賞〉

巨大劇場にあふれる溺死

体 加藤かずこ

〈双塔賞〉

掬われた足の形を瞳に刻

む 瀧 正治

〈新人賞〉

譲らなくなった夫婦で豆

腐好き 石沢ふみ子

★松山市・同市教委・四国

郵政局は、第一回「はがき

歌」コンテストを行う。形

式は短歌（五七五七七）形

式の便りで、内容は誰かに

想いを伝えるもの。官製は

がきに作品と宛先を書き、

住所・氏名・年齢・性別を

明記、2月20日までに〒790

234号「はがき歌」コン

テスト係へ。発表は3月。

▽出版△

■創立5周年記念・句会入

選句集『大阪川柳』（大阪

川柳の会刊・B5判68頁・

価1000円）30回にわた

る句会の入選作品を収録。

■『速水の楽書き』（小川

速水遺句集・A5判222

頁・価2000円）磯野い

さむ序文・故人の川柳・エ

ッセイ・柳画・写真を収録。

■なにわ柳壇「私の百句」

（B6判70頁・岩津よう

じ著）橘高薫風・片岡つと

む序文。

▽計報▲

■片上英一氏（本社同人）

は昨年12月25日、脳出血の

ため死去、61歳。告別式は

27日、八尾市黒谷5-116

0の自宅で行われ、橘高薫

風主幹ら多数が参列した。

■広瀬反省氏（全日本川柳

は12月27日、腸閉塞のため

死去、79歳。川柳瓦版の会

顧問で、長く読売時事川柳

（関西）の選者をつとめた。

■春城千代さん（常任理事

春城武庫坊氏の実母）は1

月2日、老衰のため死去、

92歳であった。

■笠原綾子さん（参事笠原

吸江氏夫人）は1月5日、

死去、81歳。同7日、告別

式が行われた。

■若宮武雄氏（和歌山市・

元同人）は1月4日、呼吸

不全のため死去、85歳であ

った。

▽訂正△

■1月号P90上段12行目

（澎湖抄）「いま俺が死ん

でも風は当らない」↓「：

風は変らない」▽P102下段

3行目「火」↓「光」

▽P114下段14行目（本社句

会）「汚い金ほうぶの美学

抱いている」↓「汚い金は

★朝日新聞なにわ柳壇の平

触れ 山本 甲生

★世界かにフェスティバル

in鳥取'95協賛川柳大会・

宿題「蟹」（両川洋々選）

の入選作品が決定した。天

位句は次のとおり。

2 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(木)午後1時から ごまかす・鯛・初めて・遊び	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	2日(金)午後1時から 舌・気まま・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 まつえ	10日(土)午後1時から 雪・計画・えくぼ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
八尾市民 川 柳 会	10日(土)午後6時から 箱・逃げる・ソフト・薬	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	11日(日)午後1時から つばみ・立つ・秘訣	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後1時から コピー・解ける・きまぐれ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子
ほたる 川 柳 会	13日(火)午後1時から 待つ・すんなり・ルーズ	豊中市立螢池公民館 阪急宝塚線螢池駅西へ150米 〒560 豊中市螢池中町3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卯の花	16日(金)正午から 縮む・肩・あっさり・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
南大阪 川 柳 会	16日(金)午後6時から 本領・申し分・養生・論争	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
岸和田 川 柳 会	17日(土)午後1時半から 未練・無効・名刺・燃える	市立福祉総合センター2階 南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地理村
川 柳 ねやがわ	18日(日)正午から 日記・エンジン・筋書き・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	19日(月)午後1時から 調べる・暗い・細かい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
京 都 塔 の 会	22日(木)午後1時から 鍋・厚い・当分	京都府立南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町 都倉求芽
富 柳 会	22日(木)午後1時から 玉(たま)・薄い・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子
東大阪市 川 柳 同好会	24日(土)午後6時から 坂・屋台・ファイト・裁く	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 川 柳 会	25日(日)午後1時から ストーブ・苦い・こっそり・参加	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★昔は「還暦」と言うと、

赤い頭巾にチャンチャンコ

を着せられ、親類中で祝つ

たものである。私の父もそ

うして祝われたことを、は

っきりと記憶している。今

ごろ、こうしたことは全く

なくなった。「古稀」につ

いては私の場合、娘夫妻が

料亭に招待して孫ともども

祝ってくれ、面はゆい思い

をした。この時以来、私は

常用漢字表にない「稀」を

廃し、老いても未来に希望

を持つという意を込めて、

「古希」を使っている。

★高齢者が多くなって祝つ

たり、祝われることは少な

くなったが、長寿がめでた

く、ありがたいことには変

りはない。まず、還暦の六

十一歳の別称を「華寿」と

言う。今日の女性の六十一

歳は、正に女盛りである。

そして七十歳は「古稀」、

杜甫「曲江詩」中の「人生

七十古來稀」に由来する。

次いで七十七は「喜寿」、

八十は「傘寿」、八十八は

「米寿」、九十は「卒寿」、

九十九は「白寿」、百八は

「茶寿」、最高は百十一歳

で「皇寿」と言う。

★おめでたついでに、結婚

についてもあたってみた。

金婚・銀婚がよく知られ、

祝う人が多いが、下からい

くとまず、一年を「紙婚」、

五年を「木婚」、十年で金

婚となつて「錫婚」、十五

年を「銅婚」、二十五年を

「銀婚」、三十年を「真珠

婚」、三十五年を語呂合せ

で「珊瑚婚」、そして五十

年を「金婚」、六十年もし

くは七十五年を「ダイヤモンド婚」としている。節目

節目で夫婦の絆を確かめ合

いたいものだ。

(正)

ひとこと

川柳総合誌刊行を祝う

『月刊オール川柳』が創刊され

昨年11月25日、創刊第一号が刊行

された。短歌・俳句には数種類の

総合誌が新聞社・出版社などから

刊行され、それぞれの部門の発展

に貢献している。

川柳でもかつて東京で二誌が発

行されていたが、いずれも数号で

廃刊の憂き目を見ており、川柳の

総合誌は無理だという考え方が定

着していた。そこへ敢然と姿を現

わしたのが本誌である。

創刊号を見る限りでは二百ペー

ジを越す誌面に現代作家の巻頭競

詠はじめ多彩な内容が盛りれてお

り、まあまあという出来栄であ

る。しかし、問題は今後にある。

この種の出版は、始める“こと

よりも”続ける“ことが難しい。

とにかくがんばってほしい。

(島江 一夫)

▼数年ぐらい前から気にな

っているものに、「ら」抜

き言葉がある。ソースのC

Mであるタレントが「おっ

ちゃん、朝昼晩とよう食べ

れんなあ」と、言うのを聞

いて、とても耳障りで仕方

なかった。

▼人間は生来、怠け者だか

ら、発音を省略する傾向が

ある。特に大阪の場合、地

名の日本橋二丁目を日本一、

上本町六丁目を上六などと

省略するので、話し言葉も

とされてきた「ら」抜き言

葉については、「気になら

ない」は五七・九%、「気

になる」は四〇・一%だっ

た。

▼そこで、周りにこの話題

を持ち掛けたが、「そんな

んどつちでもええやんか」

と、関心なさそうだった。

川柳に携わる者としては、

言葉にもつと関心を持って

ほしいものである。(金)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（4月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

「川柳塔」への投句について

- ① 川柳塔蘭への投句は同人、水煙抄欄への投句は誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限ります。
- ② 両欄とも、この投句用紙を使って8句をお書きください。
- ③ 渺湖抄欄・茴香の花欄および課題吟（一路集）への投句は、同人または誌友に限ります。ただし、茴香の花欄は女性だけです。
- ④ 各欄への投句は、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

作品募集

4月号発表 (2月15日締切)

川柳塔 (8句) 橋高薫風選
水煙抄 (8句) 西田柳宏子選
渺湖抄 (3句) 小出智子選
茴香の花 (3句) 八木千代選
吟課題 (3句) 「合」 谷口次男選
「話」 神夏磯典子選
「電」 土橋螢選
「酒」 (3句) 吉岡美房担当

5月号
吟課題 「辞書」「抜く」「溶ける」
初歩教室 「積む」

本社2月句会

とき 2月7日(水) 午後5時半
ところ メンズファッションセンター3F
中央区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角

兼題 「サイン」 門谷たず子選
「点」 三宅保州選
「片隅」 川島颯云児選
「余り」 玉置重人選
「うなずく」 橋高薫風選

会費 1題 当日発表 各題2句以内
500円

本社3月句会 7日(木) 予定

兼題 「コップ」「害」「島」「光」「足」

夜市川柳募集

第9回「予感」土田欣之選
ハガキに3句 2月末締切
投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「場所」 森中恵美子選
ハガキに3句 2月10日締切
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表 2月24日(土) 午前11時5分からラジオ第1放送(予定)

西日本文字放送作品募集

課題「チャンス」 森中恵美子選
ハガキに3句 2月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

定価 六百元(送料76円)
半年分 四千元(送料共)
一年分 七千九百円(同)
平成八年二月一日発行
編集兼 橋高薫
発行人 藤原童心社
印刷所 ウエムラ第2ビル202号室
大阪府阿倍野区三好町二一〇一六

発行所 川柳塔社
電話 (06) 691-1436
振替 〇〇九八〇一五二三三八番



泣いて笑って……

夜を通り過ぎたら

また陽がのぼっていた

男のロマン



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町 1-4-7
(06) 941-8018

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

TJ 豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町 5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

〒564 吹田市泉町 5丁目11-14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886